

# 東アジア文化研究

学長祝辞：東亜大学東アジア文化研究所10周年記念に寄せて 榎田宏治

講演：「地・人・芸術－＜芸術と地域＞を問う－」……金田管……3

植民地朝鮮で「国語」は何を教えたのか……上田崇仁……17

中国公共サービスにおける公共サインの中日翻訳研究……孫蓮花・単言……30

上下の時間表現にみられるメタファー……林楽常・鄭新爽……43

帝国期遺産をまなざす「われわれ」の特殊性……上水流久彦……57

「満洲映画」における中国農村イメージの形成……林楽青……76

複数の首里城観……松田良孝……98

映画『男はつらいよ』にみる日本文化……王欽……109

シベリア調査旅行……崔吉城……123

## <書評>

崔吉城著『朝鮮戦争で生まれた米軍慰安婦の真実』……原田環……154

東亜大学東アジア文化研究所

2021年3月31日

# 東亜大学東アジア文化研究所10周年記念に寄せて

東亜大学学長 櫛田宏治

東亜大学東アジア文化研究所は、「東アジアを中心に世界の文化、社会、歴史等の人文社会学的領域について国際的視野に立った研究を推進しその成果を発信する」ことを設置の趣旨として掲げ、崔吉城先生（東亜大学教授、広島大学名誉教授）を所長として、2011年4月1日に発足しました。開所式を同年12月10日に行いましたが、下関在住の直木賞作家故古川薫先生は、わざわざ本研究所のために自ら揮毫し篆刻された看板を贈呈されました。オープニングセレモニーには多方面・多地域から多くの方々が駆けつけて下さり、盛況にとり行われました。

早くも10年が経過したのですが、多くの方々が様々なイベントを協働し立上げ運営し力強く推進してきた状況をみますと、組織とその活動というのは人の思いが人に伝播していくことを原点として、時間をかけて広がりとし深化を遂げていくのだと実感しています。

私たちの目の前には多くの課題が横たわっていますが、衆知を集め、変化することを恐れず、信念を持ってあらゆる困難に向き合う姿勢を維持することでできれば、マイナスもいつの間にかプラスに転じ、自ずから解決の糸口は開かれていくのだと確信しています。

東亜大学は下関という歴史的な国際交流都市にあってその地の利を生かし、教育と研究、そしてこの地域や日本、そして世界に対して奉仕することを発展的にすすめてきました。そして、本学が東アジアの拠点大学として確実に成長を遂げていくための様々な挑戦の過程で、本研究所は崔先生という国際的な文化人類学者であり優れた教育者でもある方との出会いを契機として生み落とされたものでした。

長いアジアの歴史には政治的な分断や友好、干渉、対立といった表現では済まされない過酷な歴史も数多く存在し、その癒えることのない影響は今日

まで各国間の関係性の構築に色濃い影を落としています。しかしながら、一旦その文化の交流に目を凝らしてみるならば、そのダイナミックで創造的な変遷は私たちの生活文化や考え方に深く影響していて、さらには底知れぬ多様性と豊かさを与えていることが判然としてきます。私たちは文化的にも人類的にも兄弟姉妹であり掛け替えのない友人同士であることが理解できるならば、相互に親しみと感謝の気持ちが湧いてきます。

異文化理解とは、真に私たちがこの多様性に満ちた歴史上の遺産を継承する土台となるものと考えます。私たちの存在とそれを支える文化の形成が、国や地域を超えて、お互いの影響なしにはあり得なかったことが理解できるならば、新しい時代の新しい考え方や方法を備えた交流と交感、交信の歴史が現代にあった新しい形で自ずと動き出すことでしょう。この研究所の存在が常に前例のない活動を指向する拠点として位置づき、微力ながらも、今後ますます重要となる国際連携協力を後押しする精神的なバックボーンとなることを祈念しています。

皆様方には、今後とも本研究所に対するご理解とご支援をお願いいたします。

## 「地・人・芸術—〈芸術と地域〉を問う—」

金田 晋

2011年3月11日東日本東部地帯を襲った大震災は今年で10年になる。日本学術会議哲学委員会・芸術と文化環境分科会のもとに組織された芸術学関連学会連合（17学会加盟）では、被災地の研究者等に支援と連帯のエールを送るために、翌12年6月16日（土）、仙台市博物館ホールで、第7回シンポジウム「地・人・芸術」を開催した。美学会（平山敬二東京工芸大学教授）と広島芸術学会（金田晋東亜大学特任教授）が企画運営に当たった。本稿は、当日シンポジウムに先立って行われた金田晋の基調報告全文である。被災10年を記念して、大震災の記憶を留めるために、収録していただいた。（金田晋）

### 感謝の意

本シンポジウムは芸術学関連学会連合の恒例になっている公開シンポジウムの第7回にあたり、美学会の平山敬二さんと二人でオーガナイズしてまいりました。このシンポジウムに共催者として会場をご提供いただいた仙台市博物館にまず感謝いたします。また当博物館との橋渡しをしていただき、本日の会場設営にお手伝いいただいている東北大学の尾崎彰宏先生および学生の皆様にも感謝いたします。

#### (1) 「芸術と地域」

まず、本日のシンポジウムのタイトルから説明いたします。テーマは、サブタイトルに示しましたように、「芸術と地域」であります。現代芸術の大

勢は、交通、通信機関の発達によるグローバル化に浮かれて、本来その対立概念ではないはずの地域 locus を忘却し、いわば脱地域化をよしとしているような風潮がありました。その傾向は作家の意識にだけでなく、美術館における作品展示者の意識にもなかったとは申せません。だが近年、特定の場所を選んで、ゲニウス・ロキという語もありますが、その場所の自然、人間、伝統を踏まえ、住民の地域おこし、島おこしの情熱と結びついた芸術プロジェクトが行われるようになりました。芸術と地域への眼差しの転換期に来ているように思います。そのような時期に、芸術とそれを育む地域との関係を、美学や芸術諸学の観点から考えてみることは、きわめて重要だと考えます。

私は広島に住んで40年をこえました。その間、美学や芸術学の方面の原理的研究を、主として現象学的方法で行ってきました。ただ一方で、広島に職を得て芸術学を生業とする者として、被爆の後遺症もお生々しい都市において、経済復興に眼が向き、芸術文化への関心が高まらない環境にあって、なお芸術状況の創出に向けて努力している作家や企画者たちと問題意識を共有したいと思いました。

1945年8月6日広島では、入市者35万人前後（推定）のうち、原爆投下によって9～12万人が死亡しました。それだけでなく広島という都市そのものが壊滅してしまいました。

私は、その後の広島の復興の軌跡を芸術状況の方面からたどり直す仕事を引き受けました。その関わりの中で、広島芸術学会は今から25年前に設立されましたが、「広島」という冠をはずすことができないで、今日に至っています。

私は被爆広島の廃墟についていろいろ語ってきましたが、ただ文字資料から想像したり、絵画や写真や映画などで間接的に見てただけです。だが昨年3月11日、私たちはそれとそっくりの一面廃墟の風景をリアルタイムで目にすることになりました。地震と津波に見舞われた東日本太平洋沿岸においてであります。地震の怖さはテレビではなかなか伝わってきません。だが、街や畑や建物が、船や車や、人や動物たちが根こそぎ大津波に呑み込まれてゆく映像は衝撃的でした。ゆっくりと、しかもどんな隙間も見逃すこと

なく、不気味に津波はすべてを呑み込んでゆきました。

その不可逆的な時間がまさに恐怖でした。死者や行方不明者を合わせると2万人を越え、住むところを失った人は30万をこえると聞いています。都市や山村が、地域そのものが根こそぎさらわれてゆきました。そこに福島原発事故が加わりました。放射線汚染によって今までそこに住んでいた人々がそこに帰ることを拒否される地域が生まれました。

この会場に参加しておられる方々の近辺にも被害を受けられた方が多いのではないかと思います。広島に住む者として、深い共苦 *sympathos* を禁じえません。今まで自明のもの信じ、有難さなど特に思いもしなかった自分たちが住み、そこに立っている土地、「地域」が奪われたとき、人は何をすべきなのでしょう。何をすることができるのでしょうか。60年以上前の広島の人びとも同じ思いだったのでしょうか。

私たちは「芸術と地域」を問うシンポジウムを、今いちばん痛切な体験をおもちの東北地方で、そしてその中心の仙台で開催したいと思いました。わが芸術学関連学会所属の学会によびかけたところ、渡部泰山（山形大学、東北芸術文化学会）先生、奥中康人（静岡芸術文化大学、日本音楽学会）先生、吉村典子（宮城学院女子大学、意匠学会）先生、芳賀満（東北大学、美術史学会）先生がパネリストに名乗りをあげてくれました。4先生方のご自身の研究をもとにした「芸術と地域」のご報告を聞けることをたのしみに行っています。

## (2) 「地・人・芸術」について平行して

私は美学会の平山先生と相談しながら、タイトルと趣旨説明の作成にとりかかりました。会場でお配りしているフライヤーにあるタイトルと趣旨説明です。メイン・タイトルは「地・人・芸術」としました。会場の皆様ならどっくにご承知のように、このコトバは宮沢賢治が大正15（1926）年夏（8月16日）に設立した「羅須地人協会」の「地人」から着想しました。彼はその協会で昼間は農作業に汗をながし、夜は農の理論を共同で学ぶ時間でした。彼はその夜間講座で若者たちを前に「農民芸術」講義を行いました。その講義概要の中に、「農民芸術とは宇宙感情の地 人 個性と通ずる具体

的なる表現である」という一文が見えます。その「地人個性」にタイトルの着想を得ました。

また同協会で行われた「講義案内」の中の最後にある「三月中エスプラント 地人芸術概論」（『校本宮沢賢治』第12巻下、170頁）の一行の中の「地人芸術概論」にも依拠しました。「羅須地人協会」は、賢治の努力にもかかわらず、昭和2（1927）年3月に閉じられます。だから「講義案内」の最後に記されたこの「概論」の講義が文字通り協会の最後の仕事となったと思われる。本シンポジウムのタイトルには、この90年前の賢治の最後の講義をひきつぐという意味を、私はこめたつもりです。ただしタイトルには、誤解されることを承知で「地・人・芸術」というかたちで中ポツを入れさせてもらいました。

羅須地人協会が開設された当座、芸術論の講義は「農民芸術概論綱要」という名前でした。それが途中から「地人芸術概論」と言い換えられます。「農民」と言えば、他に「漁民」もおれば、「労働者」もおり、「学生」も、小説家や演奏家などの「職業的芸術家」もいます。それは一つの職業と誤解されます。だが賢治は、「地人」と言い換えることによって、この語で新しい芸術家のあり方を示そうとしたのでしょう。「地人」は賢治にとって芸術家の実存的あり方でした。（1）土（労働）に親しみ、世界の「まことの幸福」を仲間と一緒に目指すこと、（2）分業化された芸術ではなく、詩歌も美術も音楽も演劇も舞踊も相互に協働しあう総合芸術を目指すこと、に賢治が描いた「新興文化」の理想がありました。

「地域」、地は衰弱している。だがここに一つの問題があります。賢治の時代、日本、あるいは東北の人びとは、今日よりはずっと土に近いところでみずからの生活を営んでいました。日本はまだ農業国でありました。人びとは気候、気象その他のさまざまな困難に身を滅ぼすほどに苦闘しながら、地に汗することの喜びもありました。山林や田畑の作業のうちに育まれるエートスが芸術に新しい生命をあたえるのだ、というユートピアが生まれる余地がありました。その状況を受けて、賢治は「芸術はいまわれらを離れしかも佞しく墮落した」と警告し、「いまやわれらは新たに正しき道を行き、われらの美をも創らねばならぬ」と決意を語りました。

新しい美とは「個人から集団社会、宇宙と次第に進化する」とし、いわば  
間主観的美意識の成長をうながしています。そのために「地人」の出現を期  
待したのであります。都会で芸術に疲れた作家たちは、帰るべき田園があ  
りました。だが賢治がその力を頼もうとした「地」は、今どこに行ったので  
しょうか。「地」は、現代の人びとからは一時代前には考えられないほどに  
薄められてしまいました。

翻って考えると、こうした「地」を原基とする思想は、賢治ひとりのもの  
ではありませんでした。たとえば幕末の思想家吉田松陰も、西洋の文物、社  
会制度、思想を学ぶためには、地理を学べと説いています。かれは日本国内  
をも涉猟しましたが、安政元（1854）年、西洋の文明文化を学ぶために、  
同じ長州藩の金子重之輔を誘って禁制を破って密航を企てます。伊豆下田で  
ペリーの黒船ポーハタン号に乗り込みましたが、拒否されます。その途次  
「学問を為す方」を問う金子に、松陰はこう語ったと言われています、「地を  
離れて人なく、人を離れて事なし、故に人事を論ぜんと欲せば、先ず地理を  
観よ。」と。幕末期の開明派、今風に言えばグローバル思考の牽引者松陰は、  
またロクスの力をよく理解していました。

和辻哲郎の『風土』（1931年刊）の思想もまた、こうした系譜の中で読ま  
れてしかるべきです。かれの言う「風土」とは土地の気候、気象、地質、地  
味、地形、景観の総称のことで、日本を含めて東アジアをモンスーン型と定  
義しましたが、他の砂漠型（中東）、牧場型（ヨーロッパ）に対比させなが  
ら、そこに住む人、社会、文化の風土への寄り添いの規定性を強調いたしま  
した。地に関わる生業は、特にモンスーン型風土のもとでは農でありまし  
た。農業が主要産業であり、農本主義が基本でありました。日本も戦前まで  
は農業人口は3000万人だったと言われます。北陸地方などを歩くと、よく  
棚田を見かけます。中国でも見たことがあります。

大変な労をつかって、山の頂に向けて、天をつくように段々畑を耕してい  
ます。ただでさえ耕作地の少ない瀬戸内海の島々では、それが当たり前の風  
景でした。だが戦後、その日本の風景が大きく変わりました。1960年代に  
なると、日本は工業化に大きく舵をとります。農業人口は1960年1200万人  
に減少し、2000年になると200万人と大幅に減少してゆきます。かつては、

好景気の時には、若者たちは都会に出て工場労働者になり、不況になると農村にもどってきました。

「帰農」は、日本資本主義の、「過剰人口を吸収する貯水池」（大河内一男）の役割を果たしていました。とにかく都市と農村の間にはそのような相互関係が成り立っていました。不況期において、農村は勢いをとりもどしていたということです。農で回復したエネルギーを糧に、帰農者たちは景気が上向きになるとふたたび都市に向かいました。だが高度成長期を迎えると都会に出た若者は農村に帰らなくなり、都市の住民となり、その子たちも農村に帰ることがなくなりました。特に私の住む中国地方では「三八豪雪」（昭和38年、1963年）のことが今でも長老たちの間でよく語られます。農家の屋根に達するような豪雪が冬の間つづき、道路は隣の家に行くにも困難なほど寸断されました。

若者だけでなく、成年の男たちが都会に仕事を求めて出て行って、そのまま帰りませんでした。「過疎」という語は、中国山地から起こったと聞きます。たしかに行政は「地域振興」という名の下に数々の振興策を立法化し、地域の活性化のためのさまざまな施策を講じてきましたが、真の解決を見出すことはできませんでした。それらがいわば外からのイデオロギーの注入、財政措置にとどまっているからでありましょう。また中央政府への陳情のパターンからいって、地域振興策は経済効率優先とならざるをえず、工場誘致とか商業施設誘致を柱とした「地域振興」にならざるをえませんでした。

農業は生産性を一元的に目指し、その費用対効果で計られる、一つの工業、生産業になっています。そもそも近代工業、近代産業は土地、風土のアイデンティティを否定するところからはじまりました。過疎化の地域では、その地に留まり、たとえば中国山地では働き盛りの青年たちが「過疎を逆手に取る会」を結成し、「地域再生」、「地域おこし」のさまざまな運動をしてきましたが、その世代が次第に高齢化しているのが現状です。かれらの求める「地域再生」、「地域おこし」には、なんとかしたいが担い手がないという悲痛な響きがこめられています。現実には、休耕地、荒廃地が増え、日本の国土は荒廃しています。

### (3) 芸術による地域おこし

賢治は、農の力によって芸術の革新を求めました。だがその農の力が衰弱しています。農が文化を支えるどころか、本来己の職能である国土の保全をも引き受けられない現状になりました。賢治のユートピアを今に置き直すことは、不可能でありましょう。

しかし今、逆転現象が起こっています。それは一種の倒錯現象かもしれません。あるいは地域を取り戻す起死回生、乾坤一擲の賭けかもしれません。芸術が地域おこしに関わるという新しい局面です。アート・ディレクター北川フラムが2000年からはじめた「大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ」や2010年に行った「瀬戸内海国際芸術祭」のように行政や企業の地域おこしの事業と手をつないだ、大規模なイベントが知られています。だが今、多くの作家たちが、みずからの芸術意思をさまざまな地域の活性化に重ねあわせ、地域を立て直すことに努力する地元行政や住民たちと共同で活動をはじめています。規模の大小を別にして、あちらこちらで地域おこしと結びついた多くの実験が行われています。

この会場に出席されておられる皆さま方の中にも、こうした事業に率先して参加されておられ方も多いと思います。このシンポジウムでは、パネリストの報告につづいて、フロアの方々のそのような実践報告も受けたいと思っています。一例を申し上げます。私は今、呉市の東地区に広島県から愛媛県に島々を飛島のように結ぶ「とびしま海道」の一角をなす小島・下蒲刈島にある蘭島閣美術館の館長役を引きうけています。

この島はもともとミカンの産地で、ミカンが高値をつけていた時代、島民はずいぶん豊かな生活をしていました。だがやがてあちらこちらでミカン生産がはじまり、生産過剰になります。次に島はタイなどの高級魚の養殖事業を手がけますが、これも生産過剰となり、結局失敗します。あるとき養殖池に農薬が放り込まれ、出荷直前の魚が全滅します。当時の竹内弘之とこの島の町長は、こうした殖産事業によっては、安定した島おこしはできないと考え、25年の町長在職中をかけて文化による島おこし「ガーデンアイランド構想」を提唱し、実践されてきました。かつてこの島は瀬戸内海交通の公的な要衝であり、江戸時代には朝鮮通信使の行列の、安芸浅野藩が接待す

る公的停泊地でありました。

その歴史を掘り起し、朝鮮通信使資料館や陶磁器資料館、さらには現在収蔵品2200点をこえる美術館が建設されました。竹内町長が亡くなって数年経ちますが、市町村合併でこの島を併合した呉市もまたこの海域一帯の振興に力を入れて、文化による島おこしを今もつづけています。私とその文化施設の面倒を見ておりますが、これは全国的にみても、地域活性化のモデルとして誇れると事業だと考えています。芸術が地域の活性化の力になっています。だが同時に芸術は、なによりも人間の活動にほかならず、そうである以上地域を離れることはありえないことも、島おこしの事業の中で痛切に感じました。

だがそれよりももっと本格的な、地域に根ざした、その地域の息遣いが聞こえ、その声が響いてくるような創造活動も行われています。特に東北地方には豊かな民話伝説が伝えられ、さまざまなジャンルにおいて、その地域だからこそ素晴らしい作品と作家が生まれてきました。さまざまな地域で、芸術の近代的パラダイムを破砕する野生の格闘が民俗芸術の域を突破して、試行されています。それがややもすれば失いかけている地域のアイデンティティを取り戻し、地域の活性化の道を見つけてゆけるだろうと、そのような活動に接するたびに、私は確信しています。

#### (4)「芸術、それは自然に付加された人間である。」

私は最近二度、フランシス・ベーコンの技術（芸術）の定義「自然に付加された人間l'homme ajouté à la nature」に出会いました。一度は、ゴッホの弟テオに宛てた手紙、もう一度はメルロ＝ポンティの論文「セザンヌの懐疑」においてです。この定義はベーコンがスコラ哲学の模倣原理から脱するために、自然（＝被造物）と向かい合うことをやめず、かつ自然に働きかける人間の力を指しているのだと思います。この定義は、ベーコンの『学問の尊厳と進歩』第2巻第2章に出てきます。

その定義の出てくる文脈を、私は前田達郎「フランシス・ベーコンとロバート・フラッド」（中森義宗他編著『ルネサンスの人間像』所収）から転引用させていただきます。「人間にしるのびこんだ別の微妙な誤りがある。す

なわち技術を単に自然の補助で自然のはじめたものを終了させ、誤りを正し、物事から解放するための力をもつだけのもので、自然を根本的に変化、変成、改造することは不可能だとしたことである。そしてこれは人間の企図に絶望を生んだ。これに対して、反対のことを確信しなければならないのだが。すなわち人工的（技術的？—転引用者注）なものはその形相と本質において自然と異なるところがなく、ただ動力において異なるだけである。」

人工的な動力が加わることによって、自然において隠されていたものが一挙にかたちをとりはじめる、というのでしょうか。

この技術（ベーコンにとって ars は「技術」であり、芸術もその中に含まれていたのでしょうか。）の定義を、ゴッホは芸術の定義に使用します。彼がこの定義をどのような経路で学んだのか、私は不勉強でわかりません。ただこの定義は、日本の大方の「美学史」には出てきません。ベーコンは欧米に美学書でも眼にすることはあまりありません。だがゴッホがこともなげに、芸術の定義としてベーコンの定義を引き合いに出しているのは興味深いことです。ともあれ1879年6月、ゴッホはベルギーの南端の鉱山都市ポリナージュから弟テオにパリにゆく途中にぜひこの地に立ち寄ってほしいと手紙を書きます。

そこにベーコンの芸術についての定義が出てきます。「芸術、それは自然に付加された人間である、ぼくは芸術についてのこれ以上の定義を知らない」（1879年6月）。そこは芸術にまったく無縁な殺風景な風景です。「煙突、石炭の鉱夫たちの小さな小屋、日中だと、蟻の巣さながらにあちこちあわただしく動きまわる小さな黒い人影」、とゴッホはこの都市を描写しています。多くの労働者がこの都市に集まってきました。当時は、蒸気エネルギーが産業の基本エネルギーになり、鉱山都市があちこちで生まれます。

ベルギーのフランスとの国境沿いのポリナージュもそのような新興都市だったのでしょう。だが「ものごとを注意深く見る眼をもっているものにとって」、じつに「特色豊か」で、「レンブラントやミシェルやロイスダールの絵が思い出される」と書かれています。この劣悪条件の労働者の生活の風景の中に、ゴッホはレンブラントやロイスダールを想起させる芸術の予感を感じます。かれはこの地で福音伝道師になる道を断たれますが、芸術家とし

ての出発を決意します。ゴッホは先のベーコンの定義のあとに、次の一節をつづけて、かれの定義の理解を示しています。

「自然、実在、真理、だが、それから芸術家が引き出してくる意味と見解と特質とが加わっているのだ。芸術家はそれらに表現を与え、それらを「解放し」、繯れをほぐし、自由にし、鮮明にするのだ。マウフェやマリスやイスラエルの絵は自然そのものよりも多くを表現し、自然そのものよりもはっきりと語っている。」(二見史郎訳『ファン・ゴッホ書簡全集』第1巻、273頁)。別の手紙で「人間いたるところ故郷」と語るゴッホは、たしかに自然を「注意深く見」て、そこに住む人(労働者)へ愛情をそそいだのでありました。

次は、M. メルロ＝ポンティの「セザンヌの懐疑」の中です。この論文は、セザンヌ研究史の里程碑ともなる密度の濃いものであり、かれが1945年12月、第2次世界大戦から解放されたばかりの廃墟のパリで執筆したものです。多分、晩年郷里エクスにもどって、サントヴィクトワール山や湖を描きつづけたセザンヌの方法に思いを馳せていたのでありましょう。「ぼく」の理解では、画家は思想を演奏する *interpreter* のだ。「だがこの演奏は視覚から分離された思想ではない。」と記したあとで、セザンヌは「芸術の古典的定義<自然に付加された人間>という定義をふたたび手に入れた」と記します(M. Merleau-Ponty: *Sens et Non-Sens*, p.28)。

「古典的」という修飾語を、かれはあえて冠をつけています。ゴッホより20年近く後、セザンヌは、パリの街がますます都会的な感覚でよそわれてゆく中でそこにいづらさを感じ、郷里に近くマルセユから10キロほど離れた小村レストックで「青や赤や褐色や紫のシルエットとなって浮かび上がる」物たちの風景を発見し、やがて本格的に郷里エクスにもどって、レストック湾やアヌシー湖やサントヴィクトワール山を描き、それらを包む空気を描くことになります。かれのモットーは「自然に倣って *surature*」だったと言われます。だが「自然に倣って」とは、「顔を『オブジェのように』描く、それは顔からその『思想』を剥ぎ取るということではない。『思想を演奏する *interpreter*』ことなのだ、セザンヌは言う」(27頁)。だがこのセザンヌの思想は、メルロ＝ポンティの当時の覚悟でもあったでしょう。し

たがって、ベーコンの定義は、1945年時代のメルロ＝ポンティの想念であつたと思われまふ。

私たちはこの「自然に倣つて」つくられる絵画を、展覧会などでよく見られるような写実絵画のことを思い浮かべるべきではないでしょう。「彼は風景の地質学的構造を調べる」(29頁)が狙ひだつたのです。それに彼の「自然に倣つて」は、その風景を眺めている画家の視覚、あるいは視覚に収斂されてゆく画家の身体という「自然」をも組み込んだ構造をもっていました。第2次世界大戦後の破壊されたパリの空の下で、メルロ＝ポンティは復興の意思をセザンヌ、さらにベーコンにことよせて語つたのでした。

それから半世紀、21世紀初めの、この時期に、私たちはもう一度ベーコンの芸術の定義を見直してよいと考えまふ。ベーコンの定義は、芸術、それは人間、しかも自然と向かい合い、自然を基にした人間ということでしょう。

#### (5) デカルトはアムステルダムを生きていた。

ベーコンと並んで近代哲学の祖とされるデカルトもまた在所不明の抽象的な場において思考生活を送つていたわけではありません。よく私たちはデカルトの思索を、冬のドイツの寒村の一軒家で暖炉に火を燃やしながら『方法序説』を構想した孤独のデカルトをイメージして語りがちですが、それはかならずしも正確ではありません。P. ヴァレリーは紀行文『オランダよりの帰途』(吉満義彦訳)の中で、現存するデカルトの肖像画がレンブラントによつてではなく、フランツ・ハルスによつて描かれていることの幸せを語り、そこにデカルト哲学の基調を読み取ろうとしました。デカルトはアムステルダムにあつて、活動しているオランダ人に交わることもなく、言葉をかわすこともなかつたでしょうが、アムステルダムを愛し、戸外に出て「大群衆の混雑の中を歩き回り」(バルザック宛書簡)、「部屋の窓越しに、通行人たちが真新しい雪の中を踏みしめてゆくのを、皮衣をまとつた船員達が、半ば氷結し、半ば融け割れた、白く且つ黒い河氷の上で、信じられない位に上手に彼らの重い端艇を操り移動しているのを眺めるのがたのしみであつた。」(ヴァレリー) そうしたデカルトには、都市の市民の息遣いを描いたハルス

が相応しい、とヴァレリーは考えました。レンブラントが描く哲学者たちは部屋に閉じこもって思索していました。その部屋はまるで法螺貝の内部、「闇を降りてくる螺旋状の階段と寂寞の廊窓」をもつ空間にたとえられました。そこは「自己内屈の観念や、深さの観念や、存在自身による、みずからの認識領域形成の観念」等が展開される場でありました。

ヴァレリーは一つの画面に二つの「構図」があると指摘します。一つは精神の構図、「表現された物体と対象」の構図であり、「画面の確固明瞭な事物や、意味の一目瞭然たる所与を発見し且つ命名する」意識の所産であります。もう一方に理性が定義できない世界であり、いわば「眼」の構図であります。これはいわば「側面からの作用」であって、明暗 *clair-obscur* の織りなす「光の場」に向かいます。そのデカルトの「光の場」を照らしだすのに相応しい画家として、ハルスがいたのではないか、そうヴァレリーは推測します。

「アムステルダムにおける私のデカルトは、私が彼に眺めて欲しいと思うものを打ち眺め、恐らく彼の眼が注がれたであろうと思われる、あれ程多くの対象と事物との中で、樽や箱や荷の山や機械を以って、河岸や堤防を塞いでいる一切の商売道具ほどに、彼の常の思考組織内に立ちどころに彼を据直すに適したものを見なかった。巻揚機、滑車、簡単な機械その他、河岸から船艙に、船艙から河岸に貿易の品を運ぶ一切の荷役綱具など、これ等は然うした力学的なものを愛し、量的事物を愛する人にとっては魅力ある思索対象である。彼はこれら繁華な岸に立って、数学的機会に全く取囲まれていた。」(ヴァレリー全集13巻『哲学論集 I』24-25頁) 人びとがアムステルダムに運び込まれてくる世界の珍品、逸品に眼を奪われ、そこにたたずんでいる哲学者など見向きもしないでいるとき、デカルトはこの「数学的機会」のひしめくアムステルダムの街を愛して、そこから哲学的思考を発芽させたのでした。

デカルトは「数学的機会」を眺めていました。そこにもう一つの自然を見ていたと、ヴァレリーは言いたかったのでしょう。そのアムステルダムにおいて、デカルトは微積分学の数学的普遍性を構築してゆきました。

## 終わりに

広島を例に廃墟からの立ち直りを願って私は、広島に赴任して10年ほど経ったとき、「戦後広島美術年譜」の作成の仕事を広島市文化財団から依頼されました。大学院の学生たちに手伝ってもらいながら、新聞を調べ、戦後を体験した作家や行政の文化担当者たちにインタビューをし、さまざまな資料を集めました。7～8年かけて、ようやく1945年8月6日原爆投下直後からの広島美術状況を年譜にまとめました。45年の10月、つまり被爆後3か月で生き残った画家たちの展覧会があったという情報がありました。それを裏付ける資料は見つかりませんでした。だが翌年1月には、戦時中ほとんど美術活動を抑えられて、終戦をまたずにあるいは直後に他界してしまった鬨光や山路商のまわりにおいて、被爆の広島を生き残った作家たちが作品発表を行い、定例の研究会をはじめました。住いがままならず、食糧も不足する時代に、かれらの無手勝流の、そうした創作や研究活動は、戦後の広島の復興に大きな励みをあたえたのだと思います。資料を整理しながら、広島の市民たちのエネルギーに圧倒されました。

広島では「原爆ドーム」が有名です。被爆前その建物の名称は産業奨励館であり、だから広島の産業を紹介する建物だったと誤解されています。だがこの建物は、大正4（1915）年8月「広島県物産陳列館」としてチェコ・アールヌーボーに属するセセッションの建築家ヤン・レツルが建てたモダンな建物でした。彼はおそらく故郷モルダウ川に、広島市を流れる太田川の一支流元安川を重ねていたことでしょう。そこは広島の文化のシンボルであり、翌年の5月には第1回広島県美術展が開催されました。入場者38000人を越えたと記録されています。鬨光をはじめ多くの上京した作家たちもよくここで展覧会を開催しました。つまりそこは原爆で破壊されるまで、たんなる広島の物産を展示する場所であるだけでなく、文化を発信する文化の殿堂でもあったわけです。

そのような文化の土壌が、戦後の広島を復興する力になったと言えないでしょうか。原爆ドームがたんなる物理的存在の残存物ではなく、そこに多くの市民たちが記憶を内蔵させているモニュメントであったからこそ、廃墟となった今も存続しているのだと思います。

文化は地域を場にして生育します。だが原爆で壊滅した広島では、欠如態としての地域が力になって、都市復興のエネルギーをつくりました。そして欠如態がエネルギーになるのは、そこに文化が介在しているからです。その広島に思いをはせながら、東北地方が培ってきた文化の蓄積が、大震災と大津波ですべてを流されてしまった瓦礫の街や村をフェニクスのように立ち上がらせる日を願っています。

戦後半世紀以上、否、明治維新の頃から数えると150年、日本がひたすら走りつづけてきた国家建設の手法は今岐路に立たされています。長くその国家建設にエネルギーを送りつづけてきた「地域」が衰弱し、機能が低下しています。地域は、中央との二項対立図式においては「地方」という語に矮小化されながら、中央に、野性味あふれるエネルギーをもつ人材を補給してきました。今、その地方が過疎化し、疲弊し、もはやかつてのようにエネルギーの補給基地の役を果たせなくなりました。

今時代は転換期を迎えています。東北の惨状を見て、政府はとにかく救援の手をさしのべています。だが弱者救済という視点だけでは、将来大きな禍根をのこすことになるでしょう。それでは「地域」の自立にはつながりません。「地域」の果たしてきた役割、地域が育ててきた芸術文化の豊かさを真摯に受け留めて、「地域」の復興に向かうべきでしょう。

そのことによって、震災を受けてはいないが、過疎化の現実から脱却するために苦闘する「地域」の再生へと眼を向けるべきでしょう。

地に足場をおいた芸術の創造に向けて、私たちは、東北の一角花巻にいて「羅須地人協会」をおこし、肥料の科学に専心しながら、「地人芸術」を構想し、地 locus から発して音楽、絵画、彫刻、演劇、舞踊すべてのジャンルへと放射する総合芸術を志向した宮澤賢治を取り上げてみました。賢治の描いたユートピアを、今もう一度描き直してみる時代に来ていると、私は思います。

今日の危機の時代に、私たちは芸術学関連学会連合がカヴァーするさまざまなジャンルの研究者が集まって、「芸術と地域」のテーマをここ仙台で語り合えることは、私たちの今後の研究に大きな示唆を与えてくると確信しています。

# 植民地朝鮮で「国語」は何を教えたのか —テキストマイニングの手法の活用を検討して—

上田崇仁

## はじめに 研究の背景

植民地朝鮮で使用された『国語読本』（併合前は『日語読本』）を使って当時の児童に何を教えようとしたのかという点については、今日まで様々な側面から研究が進められている。

筆者は、2018年度から、テキストマイニング<sup>1</sup>の手法を国語読本の分析に応用すると何が視覚的にとらえられるかと考え、試行錯誤を続けているところである<sup>2</sup>。

教科書に掲載されている語彙に注目した研究は、李淑子（1985）を代表として挙げることができる。この中では、どのような話題がとられているか、という点にとどまらず、「歴史的人物（表A）」、「神話・説話の人物（表B）」、「国家主義的語彙（表C）」、「戦争及び軍事的語彙（表D）」、「神道関係語彙（表E）」、「地名及び建造物名（表F）」、「一般の人物（表G）」と分類したうえで、その語彙数と出現頻度を数えたうえで検討を進めている。非常に細かな作業であり、大いに参考とできる。

一方で、この研究では、その語彙がどのように扱われているのか、本文を示しながら議論はしているものの、すべての語彙についてそれが行われているわけではない。そのため、語彙そのものは出現しているとしても、その語

---

<sup>1</sup> テキストマイニング（英: text mining）とは、文字列を対象としたデータマイニングのことで、通常の文章をデータとし、それを単語や文節で区切り、出現頻度や出現傾向、共起状況などを、統計学などの技法で解析するテキストデータの分析方法である。今回、簡便に使用できるKH coderという無料のアプリケーションを使用した。

<sup>2</sup> 【附記】に示した科研費による研究。

彙がどのような文脈で現れ、どのように評価され、どのように教えられていたのかについては、もう一步検討する余地があると思われる。

例えば、「朝鮮」という語彙の本文での出現頻度が10とした場合、肯定的なとらえ方がいくつあり、否定的なとらえ方がいくつあり、中立的なとらえ方がいくつあるのか、ということを確認しなければ、その教科書で何を教えられたのかということは明らかにできないのではないだろうか。

筆者が分析ツールとして選択したKH coderは、ある語彙がどのような語彙と共に使用されているのか（共起ネットワーク）を視覚的に描くことが可能である。この機能を生かせば、上述したような肯定的、否定的、中立的という分析が可能となり、従来の語彙数や内容の主観的な分析を補完することが可能であると考えている。

また、植民地朝鮮で使用された『国語読本』及び『日語読本』は、日本による近代化の過程を支えた新たな知識や情報を与えたという側面もあると考える。その視点での教科書分析は、KH coderでは、コーディングによる対応分析図を活用することで達成できるのではないだろうか。

本稿では、植民地朝鮮で併合前に使用された『日語読本』をKH coderによって分析することに関して、データをもとにその適否を整理していきたい。

## 1. 共起ネットワーク図から見た併合前の『日語読本』

併合前に編纂された『日語読本』には現在までのところ3種の異本があることが明らかになっている<sup>3</sup>。本研究では、すべての巻がそろっている学徒本を使用する。ただし、筆者の手元の資料の巻六には欠落した部分があるため、完全なデータでの分析が不可能であることを断っておく。

巻一について、すべての品詞を対象に上位60語を取り上げ、ある語彙がどのような語彙と共に使用されているのかを描いた図が次の図1である。

例えば、この巻では「机、筆、紙」という語彙が共に使われることが多いこと、「学校」という語彙には、「行く」という語彙や「何時」という語彙が

---

<sup>3</sup> 上田 (2000)

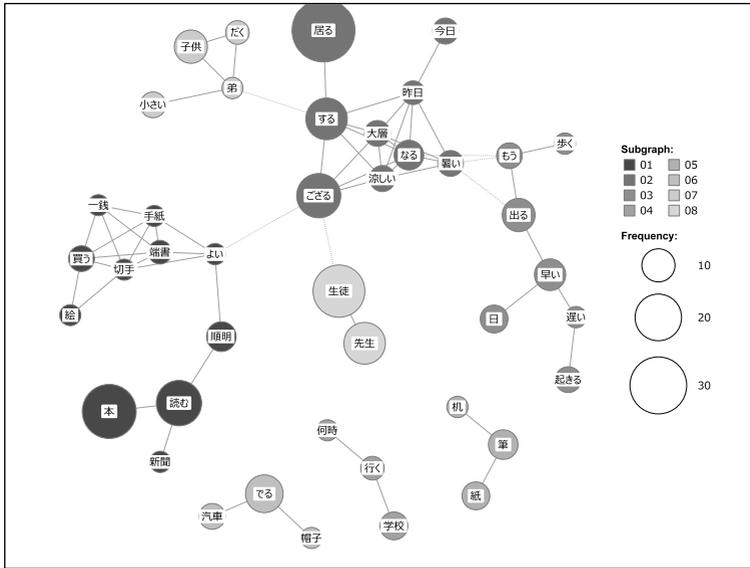


図1 巻一 全語彙 上位60語 共起ネットワーク図

共に使われることが多いこと、「先生」と「生徒」が共に使われることが多いということなどが見えてくる。頻度については、それぞれのバブルの大きさを示されることから、この巻では「居る」「本」「生徒」が多く使用されている語彙であることもわかる。

さらに、独立した塊もある一方で、多くの語彙が強弱あるにしても互いに結びついていることがわかる。言い換えれば、どの語彙も、ほかの語彙と関連づいて使用されているといえる。このことは、今日の日本語教育でも見られるような、新たな学習項目は以前の学習項目との関連の中、学習項目の延長上で教えていくという授業方法と同じだったのではないかということも推察される。

巻八はどうだろうか。

巻八では、「日本」「清国」「韓国」「ロシア」という国名が「戦争」「軍艦」「兵隊」という語彙と共に使用されていることがわかる。また、最終学年であることから、「学校」には「卒業」が共に使用され、「医者」「坊さん」「祈

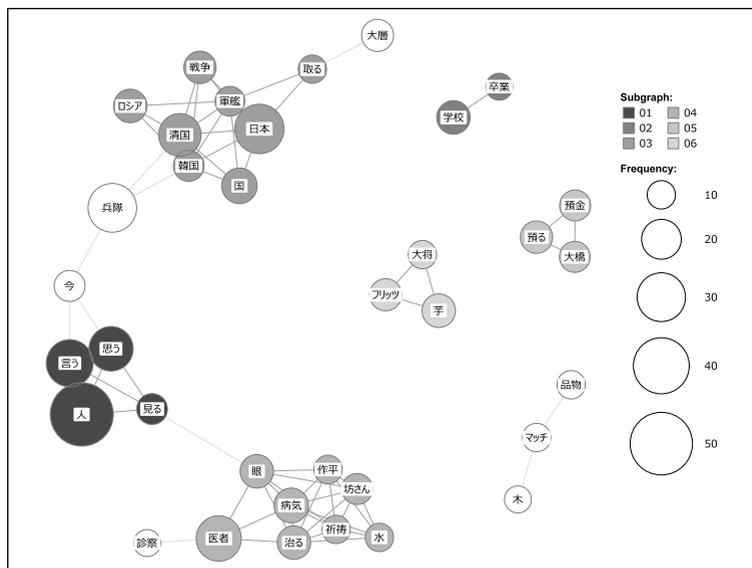


図2 巻八 全語彙 上位60語 共起ネットワーク図

痔」「病気」「治る」といった迷信にかかわる一連の塊も見て取れる。巻一と異なり、それぞれのネットワークが独立していることから、話題が複数あること、今日の日本語教育の教材にも見られるような、上級であれば多様な話題、知識、表現を学んでいくという特徴と同一で、巻一のように学習項目が互に関連づいて教科書の各課が書かれているわけではないということも視覚的に把握できる。

## 2. 対応分析図から見た『日語読本』

次に、同じ『日語読本』について教科書の文の特徴を見るために対応分析図を作成する。巻一は次の図3のようになる。数字は「課」を表す。

図の横軸と縦軸から伸びている破線が交わっているところを原点とすると、この原点付近の語彙は、この教科書の中であまり特徴のない語彙という分析がされる。離れている語彙ほど特徴があるとされる。ただ、この図単独ではあまり有意なことは指摘できないと考えている。

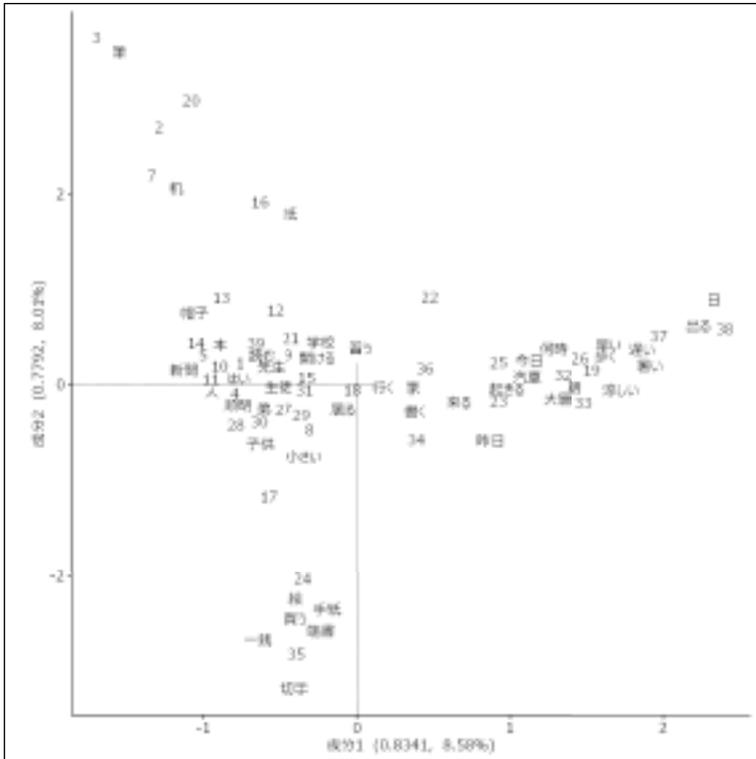


図3 巻一 全語彙 上位30語 対応分析図

巻八の対応分析図である図4と比較するとやや意味のある分析が可能となる。

つまり、巻一は比較的中心部に語彙が固まっているのに対し、巻八では、中心から離れたところに四つの塊が見えるということである。巻一では、採用された語彙は頻繁に使用されることで特徴がある形で出現しないが、巻八では、話題が独立していることから、それぞれの課が特徴のある語彙の塊として描かれているといえる。

図5は、巻一から巻八までの全語彙について巻ごとの特徴を示すために作成したものである。ここからわかるのは、巻一と巻八が原点から比較的離れ

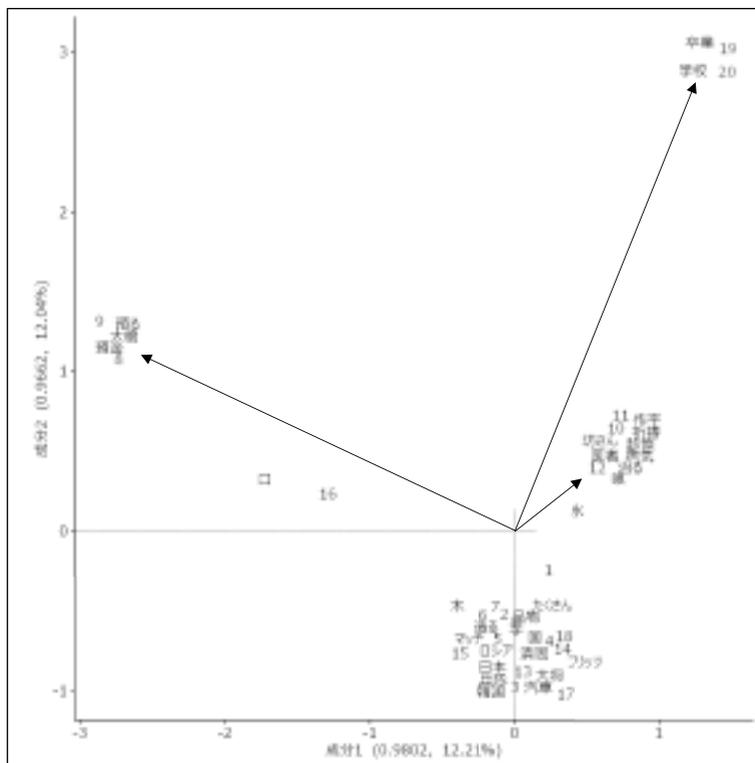


図4 巻八 全語彙 上位30語 対応分析図

ており、ほかの巻に比べ特徴があること、巻一では「本」「生徒」「読む」のような学校に関する語彙が、巻八では「兵隊」「医者」「かかる」「清国」という軍事や医療に関する語彙がそれぞれの巻を特徴づけている語彙であることである。中心部から矢印を引いたが、8課と9課が金融を、10、11、12課で医療と迷信、19課と20課が卒業を話題にしていることが見てくる。また、それらの話題はほかの話題と異なり、この教科書の特徴的な話題である。

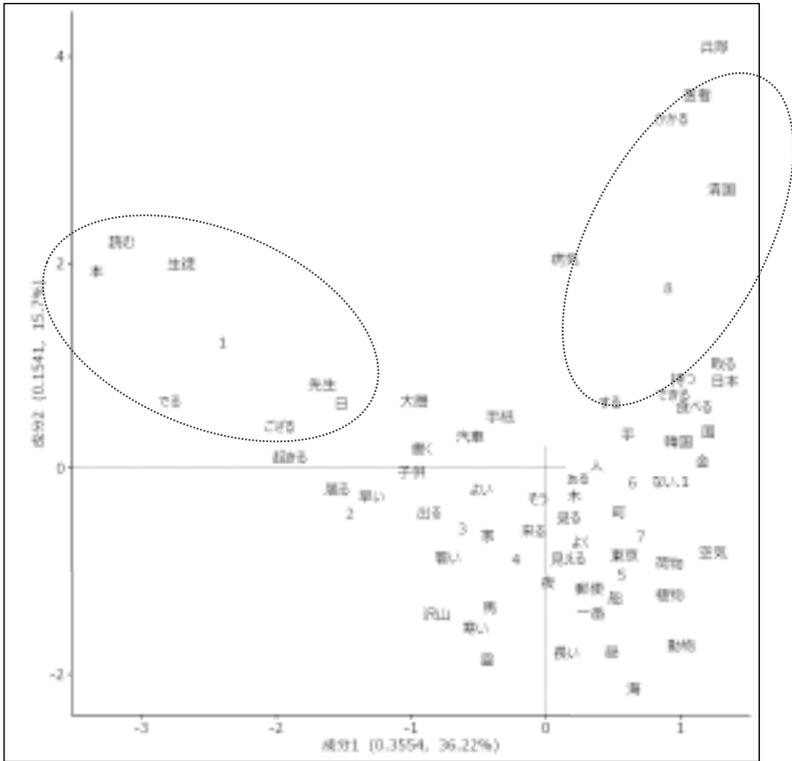


図5 巻一から巻八 全語彙 上位60語 対応分析図

### 3. コーディングを通じて見えてくるもの

次に、特定の記述や語彙があればそれを特定の категорияに仕分けてデータとしていく作業であるコーディングを通じてどのようなことが把握できるのかを見ていきたい。

コーディングに関しては、上田（2021b）において、どのようなコーディングルールを立てるのが適当かということ語彙リストをもとに検討した。また、上田（2021a）では、『日語読本』に関して、名詞に限定した共起ネットワーク図と対応分析図から、教科書の特徴について検討し、コーディングルールの案を提示した。

ここでは、上田（2021a）で提示した案にのっとって、『日語読本』の巻一と巻八を比較してみたい。

コーディングに建てた項目は、「学校」「家族」「生活」「自然」「軍事」の五項目である。それぞれどのような語彙が該当しているかは、次の表1、表2を見てほしい。

表1 巻一 名詞のコーディングルール

<p>*学校 せんせい or いす or けいこ or こども</p> <p>*家族 かあさん or とうさん</p> <p>*生活 はし or ふろしき or みち or いたずら or かさ or かま or そり or なべ or はり or ほうき or ます or むら or もやい or らっぱ or ろうそく or 色 or 赤</p> <p>*自然 かめ or うさぎ or とり or あし or かお or かに or した or つば or ひと or 牛 or 犬 or 人 or あめ or いね or うし or えさ or かぜ or からだ or が ん or きつね or くま or くるみ or だいこん or つめ or つる or てんき or にんじん or ぶどう or まめ or まゆ or もも or りんご or わら or 雨 or 手 or 水 or 川 or 木 or 目</p> <p>*軍事</p>
--

表2 卷八 名詞のコーディングルール

\*学校

学校 or 練習 or 学問 or 勉強 or 子供 or 生徒 or 席

\*家族

とうさん or 家 or おい

\*生活

医者 or 病気 or 金 or 坊さん or 大勢 or マッチ or 汽車 or 祈祷 or 品物  
or 診察 or 卒業 or 客 or 農夫 or 交換 or 港 or 着物 or 定期 or 約束 or 話  
or 運 or 塩 or 荷物 or 紙 or 手間 or 布 or 圓 or 貨幣 or 割合 or 手紙 or  
商人 or 乗客 or 町 or 鉄 or 盲目 or 葉 or ステーション or 為替 or 近所  
or 材料 or 仕事 or 分業 or 利子 or 演説 or 靴 or 絹 or 支払

\*自然

人 or 芋 or 眼 or 口 or 水 or 木 or 雨 or 手 or 山 or 空気 or 銅 or 月

\*軍事

兵隊 or 国 or 戦争 or 預金 or 軍艦 or 大将 or 士官 or 属国 or 弾丸 or 海  
軍 or 条約 or 世界 or 船 or 土地 or 独立 or 半島 or 汽船 or 撃沈 or 講和

「\*」のついている語彙がカテゴリーの名前で、その下に並んでいる「or」で結ばれている語彙がそのカテゴリーに属すると規定した語彙である。この語彙の適否については、上田（2021b）で再検討したが、まだ結論に至っていない。

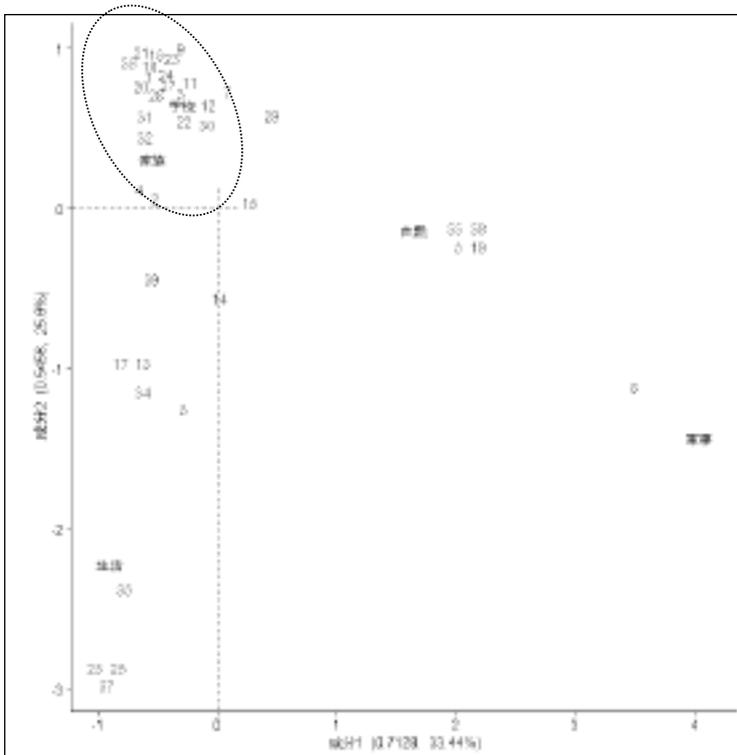


図6 巻一 名詞コーディング 対応分析図

さて、このコーディングルールにのっとって、巻一と巻八の対応分析図（図6及び図7）を比較してみたい。

数字はそれぞれテキストの課を示しているが、「学校」と「家族」に話題が集中していることが見て取れる。「生活」に関する課もそれなりにあるが、「軍事」に関する課は極めて少ないことがわかる。

一方の巻八では、「生活」に関する課が多いように見受けられ、巻一とは対照的に、「学校」に関する課はほとんど見られなくなっている。

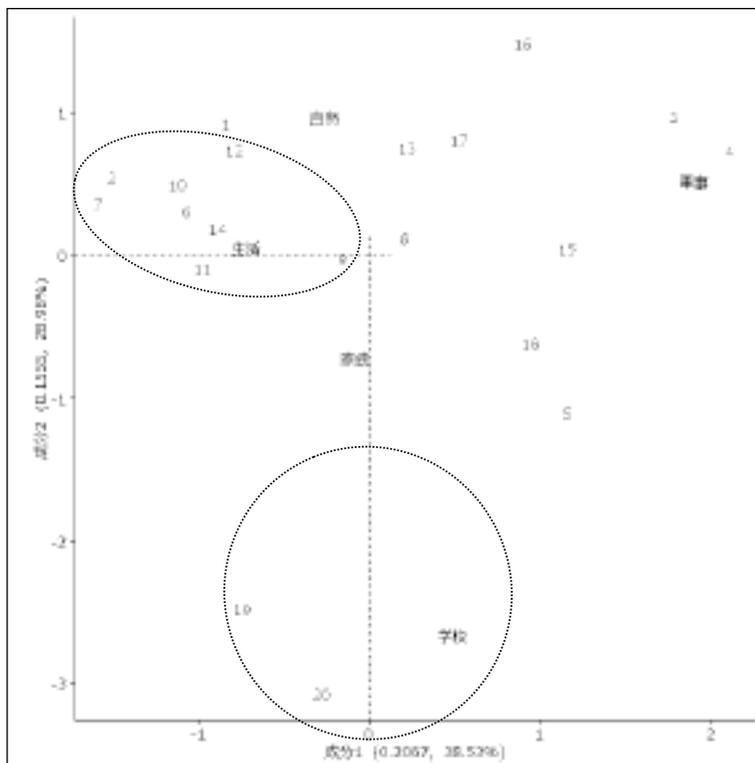


図7 巻八 名詞コーディング 対応分析図

## おわりに

本稿では、テキストマイニングの手法により、植民地朝鮮で使用された「国語読本」を分析する意味とその成果、有効に使える可能性について検討してきた。

単純に語彙の数を示してだけでなく、共起ネットワーク図により、どのような語彙と共に使用されているのかを視覚的に提示できるということは、その語彙が肯定的に使用されているのか、否定的に使用されているのかを確認することもできるという意味で、従来の研究を補完できると考えた。

また、対応分析図では、それぞれの読本の特徴を把握することができ、ど

の巻でどんな話題を提示しているのかを、これもまた視覚的に提示できることが明らかとなった。

併合前を含め、全6期にわたる『国語読本』と大和塾が「国語」教育に使用した『国語教本』をはじめとした社会教育で使用された教科書の特徴を、このテキストマイニングの手法により視覚的に明らかにしていけるのではないだろうか。

そうすることにより、朝鮮半島でどのような話題や知識を「国語」教育が提供してきたのかを考察することができるだろう。それは、非母語話者に対する言語の教育にとどまらず、日本的価値観の教育でもあったと考えるのが妥当であろう<sup>4</sup>。

今後、データを増やすこと、また、現段階では名詞の分析にとどまっているが、コーディングルールの検討を深め、動詞や形容詞とともに統一したコーディングルールの下で特徴を示していきたいと計画している。

## 参考文献

李 淑子『教科書に描かれた朝鮮と日本』ほるぷ出版、1985

上田崇仁「朝鮮総督府編纂教科書の通時的研究 - 違いを視覚化する試み」

『新世紀人文学論究』第3号、戦時日本語教育史研究会、2019

上田崇仁『『日語読本』考』『南山大学日本文化学科論集』第20号、2020

上田崇仁『『日語読本』の特徴～併合前の教科書は何を教えたのか～テキストマイニングで見えてくること』『全地球時代からの人文主義——歴史、言語文化、文学の還流をもとめて——』（仮題）田中寛教授退職記念論集（印刷中）、2021a

上田崇仁「旧韓末『日語読本』考 ～KH coderによるテキストマイニング・コーディングルールの検討」『南山大学日本文化学科論集』第21号（印刷中）、2021b

樋口耕一『社会調査のための計量テキスト分析』ナカニシヤ出版、2020

---

<sup>4</sup> 矢田（2021）では、内地と朝鮮、南洋で求められていた「理想の子ども像」の差異を検討してきた。そこで得られた結論は、「国語」教育が示した「理想の子ども像」が地域により異なっていたということであった。とても示唆的な結論であったと考える。

樋口耕一ほか『KH Coderを用いた計量テキスト分析実践セミナー初級編』  
株式会社SCREENアドバンストシステムソリューションズ、2018  
樋口耕一ほか『KH Coderを用いた計量テキスト分析実践セミナー実践編』  
株式会社SCREENアドバンストシステムソリューションズ、2018  
矢田七帆「芦田恵之助が求めた子ども像～内地と植民地朝鮮、植民地南洋群  
島との比較～(南山大学人文学部日本文化学科 卒業論文 上田ゼミ  
所属)、2021

**【附記】**

本研究は、科学研究費補助金 基盤研究 (C) 研究課題/領域番号  
18K00685「植民地朝鮮における日本語教育～計量言語学的手法から見る学  
校教育と社会教育との連携」によるものである。

# 中国公共サービスにおける公共サインの中日翻訳研究

孫蓮花・単言

**要旨：**本稿では、中国の「公共サービス領域の日本語訳規範」を対象に、中国語公共サインに使われている慣用表現の日本語訳を考察し、以下のことを明らかにした。まず、公共サインの慣用表現の日本語訳には意識と直訳がよく使われているが、意識の使用は起点言語と目標言語の言語文化背景に配慮しつつ、起点言語の意味をはっきり伝えることを考慮したためであるのに対し、直訳の使用は目標言語の文化要素を尊重し、形式上の対等性も保つためであると考えられる。また、「指示」類サインと「説明」類サインの情報や内容は「警告」類と「禁止」類サインよりもっと具体的、詳細であるため、その日訳には目標言語の文化背景・言語的習慣に従った加訳も使われていることが明らかになった。

**キーワード：**公共サービス 公共サイン 中日翻訳 慣用表現

## はじめに

中国は、2008年の北京オリンピック開催以来、2010年の上海万博、2014年のAPECサミット、2016年のG20杭州サミットなど国際的なイベントを主催し続けてきた。このような背景の下で、訪中する外国人のための公共サインの外国語翻訳に関する規範性書類が公表された。2017年12月29日には公共サインである《公共服務領域日文訳写規範》（公共サービス領域の日本語訳規範、原文は簡体字）（GB/T 35303-2017）の国家標準が公表され、2018年7月1日から正式に実施されるようになった。

《公共服務領域日文訳写規範》（以下《公共規範》と略す）は《公共服務領

域日文訳写規範》(公共サービス領域の英語訳規範)と《公共サービス領域のロシア語訳規範》(公共サービス領域のロシア語訳規範)とともに、公共サービス領域における中国の外国語翻訳規範シリーズの一部である。規範の選定は教育部、国家語言文字工作委員会の指導のもとで行われ、日本語翻訳は大連外国語大学(劉利国・孟海霞・徐文智等)によって、2014年10月から3年間にわたって完成されたものである。

公共サインの外国語翻訳を行う場合、言葉遣いや、慣用表現などの合理性、標準化、サービス性などに注意を払うべきであり、どのような翻訳法が用いられるのかは非常に重要な課題であると思われる。しかし、《公共規範》は2018年に公表されて間もないため、それに関する研究は数少ない。そこで、本稿では、中国の《公共規範》を対象に、中国語公共サインに使われている慣用表現がどのように日本語に翻訳されているのかを考察し、その翻訳法及び使用原因を明らかにしたい。

## 1. 先行研究

公共サインの中日翻訳に関する諸先行研究では、中国の観光地における公共サインの日本語訳の問題点を中心に考察し、書き方ミス、訳名不一致、語彙選択の不適切、文法ミスなどを指摘し、その対策を提案している(宮偉、2016など)。また、公共サインの中日翻訳のストラテジーについての研究も多く、そのうち、張紅濤・加藤(2017)では、公共サインの中日翻訳には、慣用表現の利用、曖昧表現の減少、簡潔翻訳などの翻訳ストラテジーが用いられるべきであると指摘した。祁勝(2018)では、中日公共サインの翻訳において、日本語母語話者の立場に立って、情報の分かりやすさを追求する「対応式」、「平行式」、「代替式」、「衝突式」といった4つのストラテジーを使用すべきであると論じた。

上述したように諸先行研究には、公共サインの翻訳のストラテジー、誤訳などに関する研究が多く、全般的な公共サインの分類とその具体的な翻訳法に関する研究はほとんど行われていない。

「意味的翻訳と伝達的翻訳」理論はNewmark(1981)が提出したもので、「意味的翻訳」とは、訳文の意味と文法が通じる場合、できる限り原文の意

味を再現することを指す。「伝達の翻訳」とは、読み手に対して訳文の伝達効果と原文の伝達効果を最大限に一致させることを指す。「意味的翻訳と伝達の翻訳」は訳文による原文の意味の再現を重要視するだけでなく、訳文による情報伝達効果を優先的に考えており、需要者の言語的ニーズと文化的期待に合わせなければならない（ジェレミー・マンディ 2009）。公共サインの翻訳において、訳文の適切な表現、訳文による伝達効果は最も重要な部分であり、「意味的翻訳と伝達の翻訳」理論が適切であると思われる。

そこで、本稿では、「意味的翻訳と伝達の翻訳」理論を基に、2018年7月に公表された《公共規範》の慣用表現の日本語訳の実態を明らかにすることで、公共サインの翻訳研究に役立つデータを提供したい。

## 2. データ結果と分析

本稿では、《公共サービス領域日文訳写規範》を対象に、その中の「公共サービス情報」（公衆の需要を満たすため、公共サービス領域に提供された「警告」、「禁止」、「指示」、「説明」などのサービス情報を指す）に関する公共サインの用例194例を取り出し、集計した「公共サービス情報」データを「警告」、「禁止」、「指示」、「説明」に分類し、各分類における慣用表現の日本語訳について考察する。

なお、本研究では、分析の際の中国語原文例は“”で表し、日本語訳文例は「」で表す。

### 2.1 警告類サイン慣用表現の中日翻訳

表1 「警告」類サイン慣用表現の中日翻訳用例数と比率

中国語	日本語訳	数	比率
“当心……”	「…注意」	15	45.5%
“小心……”	「…注意」	10	30.3%
“注意……”	「…注意」	7	21.1%
“前方弯路慢行”	「…注意」	1	3.0%
合計		33	100%

表1は《公共規範》の「警告」類サイン慣用表現の日本語訳の用例数と比率をまとめたものである。表1をみると、中国語の「警告」類サインには主に“当心……”“小心……”“注意……”といった3種類の慣用表現が使われているが、日本語訳にはすべて「…注意」が使われている。

例1：中国語：当心電纜。                      日本語訳：ケーブル注意。

例2：中国語：当心火車。                      日本語訳：列車注意。

例3：中国語：小心障碍。                      日本語訳：障害物注意。

例1と例2の“当心……”、例3の“小心……”は「…注意」に翻訳されている。例1から例3をみると、“当心……”と“小心……”の意味を日本語に直訳すると、両方とも「気を付ける」という意味であるが、ここでは起点言語の“当心……”と“小心……”を「…注意」に翻訳し、意識法を使っている。『国内外の旅行者のための分かりやすい案内サイン標準化指針－東京都版対訳表』では、警告サインに使われている22例のうち、21例が「注意」と訳されており、日本語では「…注意」という簡潔な表現が公衆に「気をつけろ」と警告する場合によく使われる決まり文句であり、日本人にとって意味情報が伝わりやすい表現であることが分かる。「意味的翻訳と伝達的翻訳」理論からみると、起点言語と目標言語の言語文化背景に配慮しつつ、意識を使うことによって、起点言語の意味をはっきり伝えることは、両方を同時に考慮した翻訳であると考えられる。

例4：中国語：注意安全，請勿靠近。                      日本語訳：危険！近づくな！

例5：中国語：注意防火。                      日本語訳：火の用心。

例4と例5では“注意……”を日本語の「…注意」に直訳せず、「危険」「用心」に意識している。例4は警告類サインであるが、禁止の意味も含まれている。起点言語である中国語原文では、安全性に注意が必要な警告サインには危険が伴うことが明記されている。そこで、“注意安全”を日本語の「危険！」という形に意識し、セキュリティ情報を直接伝えると同時に、感嘆マークを追加し、警告情報をより強調していることによって、表現効果を高め、原文より文字は少ないが簡潔明瞭である。例5では“注意防火”が「火の用心」と翻訳されているが、『スーパー大辞林』（2015年、第3版）では「用心」の意味が「万一備えて警戒・注意する」と解釈されている。昔から、

「火の用心」は、日本では火事が起きないように火の元に注意するよう、昔、夜番が拍子を打ちながら大声で唱える言葉であった。これは中国語の「注意防火」に対応している日本語の言語習慣であり、日本人に中国語原文と同じ意味伝達の効果を与えるために、意識法を使っているのが分かる。

例6：中国語：前方弯路慢行。 日本語訳：カーブ注意。

例6の中国語原文には“注意……”という表現が使われてないが、中国語の“慢行”は「ゆっくり歩く」という意味で、道路状況を公衆に伝え、警戒させるために使用される言葉である。日本語訳では「…注意」と意識され、この場所には何か注意すべきことがあるという情報を一目瞭然に伝え、直訳の「ゆっくり歩く」より簡単且つ目立つ表現であると思われる。

## 2.2 禁止類サイン慣用表現の中日翻訳

「禁止」の分類について、中日両語言語では、様々な研究が行われているが(宮崎 2002、藤田 2004、岸江 2008、曾麗蘇 2007など)、本稿では、曾麗蘇(2007)の分類を参考にし、厳禁類、普通禁止類に2分類した。以下、この分類に基づいて、分析を行う。

表2は《公共規範》の「禁止」類サイン慣用表現の日本語訳の用例数と比率をまとめたものである。全体から見れば、日本語訳には「禁止」「厳禁」「お断り」「…しないでください」「…ご遠慮ください」など5種類があり、禁止類の合計85例の中で、普通禁止類は29例で、34.1%を占め、厳禁類は56例(65.9%)である。

まず、普通禁止類の日本語訳をみると、

例7：中国語：請勿踐踏草坪。

日本語訳：芝生に入らないでください。

例8：中国語：高血圧、心臟病患者以及暈車、暈船、醉酒者請勿乘坐。

日本語訳：高血圧・心臓病患者及び車酔い、船酔い、飲酒者のご利用はご遠慮ください。

表2 「禁止」類サインの慣用表現の中日翻訳用例数と比率

分類	中国語	日本語訳	数	比率
普通禁止類 29 (34.1%)	“請勿……”	「…しないでください」// 「…ご遠慮ください」	23	27.1%
	“謝絶……”	「…お断り」//「…禁止」	2	2.4%
	“不準……”	「…禁止」	4	4.7%
厳禁類 56 (65.9%)	“禁止……”	「…禁止」//「…しないでく ださい」//「…お断り」	47	55.3%
	“切勿……”	「…厳禁」	1	1.2%
	“厳禁……”	「…厳禁」	8	9.4%
合計			85	100%

例7と例8は「普通禁止」の“請勿……”を使っている表現である。例7は“請勿……”を「…しないでください」に直訳している。日本語の「…しないでください」は他人に依頼・要求する際によく使われる敬意が含まれている表現で、相手の立場を尊重する表現を使って直訳することによって、翻訳する際に、目標言語の文型・文法表現を通し、起点言語の意味を伝えていられる。一方、例8の“請勿……”は「…しないでください」に直訳せず、「…ご遠慮ください」に意識している。これは禁止サインの対象の立場を考えた翻訳であると言えよう。高血圧・心臓病患者及び車酔い、船酔い、飲酒者は公共場所において、弱い立場に置かれているグループであり、弱い人への配慮が必要であり、その人たちに対して固い禁止表現を使うより、婉曲に禁止の意味を伝えるための、「…ご遠慮ください」のような意識を使ったほうがより適切であると思われる。

例9：中国語：食品飲料謝絶入内。 日本語訳：飲食物持込禁止。

例10：中国語：謝絶参観。 日本語訳：拝観お断り。

《公共規範》のデータからみると“謝絶……”は例9と例10の2例のみであり、「…禁止」に翻訳された例9は意識で、「…お断り」に翻訳された例10は直訳である。例9の禁止項目は飲食品であるため、“謝絶……”を「…禁止」に翻訳しても、公衆に与える不快感はそれほど大きくないように思われる。逆に「…禁止」を使うことによって、禁止サインの情報ははっきり表すこと

ができる。一方、例10の日本語訳「…お断り」は拒否を表し、語気上「…禁止」より柔らかく、他人の行動を禁じる時の不快感を減らすことができる表現で、原文の「謝絶……」特に「謝」にもそのような気持ちが含まれている。直訳することによって原文の意を十分表すことができ、敬語表現を使うことによって、「拝観」ができないことをより丁寧に表現しつつ、起点言語の文化要素を尊重した翻訳であると考えられる。

例11：中国語：不準停放自行車。                      日本語訳：駐輪禁止。

例11のように、「不準……」を使った禁止類表現は4例であり、全部「…禁止」に意識されている。「不準……」の禁止度合は「請勿……」より強く、これらの禁止項目はほとんど人身安全に関するもので、禁止内容は公共場所のルールを厳守するための要求である。このような場合には、強制の度合は普通であるが、発話効力が少し強い禁止表現が必要であるため、「…禁止」に訳することで、日本文化と言語習慣に一番近い表現を選択したと考えられる。

次に、厳禁類の日本語訳をみると、

例12：中国語：禁止狩獵。                      日本語訳：狩獵禁止。

例13：中国語：禁止倚靠。                      日本語訳：寄りかからないでください。

例14：中国語：未成年人禁止入内。                      日本語訳：未成年者お断り。

表2をみると、「禁止……」が合計47例（55.3%）で一番多い禁止類表現である。例12のように、中国語の「禁止……」を日本語の「禁止…」に直訳することによって起点言語の意味を十分に伝達し、違和感もない。例13と例14では、「禁止……」を「…ないでください」と「…お断り」に意識している。原文の表現形式にことわって翻訳すると、訳文が硬く、意味伝達の効果を減らしてしまう恐れがある。特に例14の原文は「未成年人禁止」と「禁止入内」2つの文に分けて分析することができる。要するに、その場所に未成年者は入られないという意味である。日本語の訳文では「入内」を削除して、簡単に「…お断り」でその意味を表しているが、意味の伝達には問題がない。また、禁止対象は未成年者であるため、強制性が高く発話の効力が強い「…禁止」を使わず、「…お断り」という丁寧表現でその語気を和らげることによって、訳文の伝達効果が最大限に発揮できると考えられる。

例15：中国語：切勿酒後駕車。 日本語訳：飲酒運転厳禁。

例16：中国語：嚴禁明火；嚴禁煙火 日本語訳：火氣嚴禁。

例15と例16では、中国語の“切勿……”“嚴禁……”は強制的なサインであり、日本語の「…禁止」よりもっと強い禁止マークである。飲酒運転、火事のようなことは中日ともに公衆に厳守注意させる必要があり、それぞれの読み手に対して同じ伝達効果を与えるには直訳が適切であると考えられる。

### 2.3 指示類サインの慣用表現

表3 「指示」類サイン慣用表現の中日翻訳用例数と比率

中国語	日本語訳	数	比率
“請……”	「…にしましょう」//「…お/ごください」//「…お願いします」	38	86.4%
“必須……”	「必ず…ご…ください」	2	4.5%
“……時……”	「ご…ください」	2	4.5%
“随手関門”； “易碎物品， 輕拿輕放”	「…てください」// 「ご…ください」	2	4.5%
合計		44	100%

表3は《公共規範》の「指示」類サイン慣用表現の日本語訳の用例数と比率をまとめたものである。表3を見ると、「指示」類サインの日本語訳には「…にしましょう」「…お/ごください」「…お願いします」などの表現がよく使われているのが分かる。

例17：中国語：請在此等候。 日本語訳：こちらでお待ちください。

例17では“請……”を「お/ご…ください」に直訳することによって、中日ともに、他人を尊重して、その気持ちに配慮しつつ、指示の程度を和らげることができ、公衆にいい気持で指示サインの内容を厳守させるようにしている。このように、それぞれの読み手に対して同じ伝達効果を与えるには直訳が適切であると考えられ、起点言語の文化要素を尊重し、それを再現した翻訳であると考えられる。

例18：中国語：請節約用水。 日本語訳：水を大切にしましょう。

例18では、「請……」を「…にしましょう」に意識している。例17と比べると、例18の指示項目は水・電気・樹木・公共施設・古跡のような社会の公共財産であり、公衆と一緒にこれらを大切にしようと呼びかけることで、普通の指示というより、公衆への提議とも言える。中国語原文の公衆に呼びかける意味を伝達するために、目標言語の文化を優先的に考え、日本語の言語習慣に従って、「…にしましょう」に意識し、伝達効果を最大限に上げている。

例19：中国語：貴重物品請自行妥善保管。

日本語訳：貴重品の管理は各自でお願いします。

一方、例19では「請……」を「…お願いします」に意識している。直訳の「…ください」と比べると、語気上指示の強制性が減っており、これは相手の気持ちに特別配慮したためであろう。「…お願いします」に意識することによって、貴重品の管理は公衆への指示ではなく、依頼するという感じを与える。日本文化では、何かを依頼することは他人に迷惑をかけることで、翻訳の際に丁寧に相手に伝えることが必要である。

例20：中国語：火警時圧下。

日本語訳：火災発生時、押してください。

例21：中国語：必須載安全帽。

日本語訳：必ずヘルメットをご着用ください。

例20と例21は日本語訳の際、「…てください」「ご…ください」に加訳した例である。依頼する時に、より丁寧な表現、より敬意度の高い表現を使ったほうが相手に受け入れやすいと考えられ、加訳を使うことによって、読み手の感情に配慮しつつ指示を出すことによって、意味伝達と伝達効果両方が達成できたと考えられる。

## 2.4 説明サインの慣用表現

表4 「説明」類サイン慣用表現の中日翻訳用例

No.	中国語	日本語訳
1	二十四小時營業	24時間營業
2	暫停服務	一時サービス停止
3	正在維修	点検中
4	此路不通	この先、通れません
5	此路封閉	この先、閉鎖中
6	歡迎光臨	いらっしゃいませ、ようこそ
7	謝謝合作	ご協力ありがとうございます
8	旅客通道，請勿滯留	旅客用通路につき、 立ち止まらないでください
9	票己賣完	チケット売り切れ
10	滑雪者在此下車	スキー場ご利用の方は ここでお降りください
11	必須穿救生衣	救命胴衣を必ずご着用ください
12	兒童需由成人陪同	お子様は保護者のご同伴が必要です
13	原路返回	来た道をお帰りください
14	沿此路返回	お帰りはこちらです
15	免費泊車	駐車無料
16	提供酒後代駕服務	飲酒時の運転代行サービスを ご提供します
17	此処施工帶來不便請原諒	工事中につき、ご迷惑をおかけして おります//ご協力をお願いします
18	施工期間，絮不開放	工事中につき、 休業させていただきます
19	施工現場，禁止入內	工事中につき、 立ち入りをご遠慮ください
20	証照檢查	旅券等をご提示ください
21	逆時計方向扳動手柄90度	ハンドルを左に90度回してください
22	內部施工，暫停營業	工事中につき、 休業させていただきます
23	可使用無線網絡	WiFi無料接続

24	失物招領	お忘れ物取扱所
25	口岸限定区域, 凭証通過	この先、立入制限区域につき、 通行証をご提示ください// この先、立入制限区域につき、 立入証をご提示ください。
26	票已售出, 概不退换	発券後の取消し・払戻しは致しません ので//ご了承ください。
27	顧客止步	関係者以外立入禁止
28	臨時閉	一時サービス停止
29	閑人免進	関係者以外立入禁止
30	車門未完全打開或閉, 不得触摸車門	扉が完全にあくまで 扉を触らないでください
31	先下後上	下車優先
32	節假日照常營業	休日營業

表4は、「説明」類サイン慣用表現の日本語訳用例をまとめたものである。表4をみると、中国語の「説明」類サインの合計32例の文には、「警告」類、「禁止」類、「指示」類のような、使用頻度が高い表現は見られず、全部それぞれ異なる表現が使われていることが分かる。一方、日本語訳をみると、意訳の「…させていただきます」（2例）、直訳と加訳の「…て（ないで）ください」（3例）、加訳の「お/ご…ください」（8例）のような表現がよく使われているのが分かる。その他にも、さまざまな表現が使われている。

これは、「説明」類サインの翻訳においては、説明する情報がそれぞれ異なっているため、中日両言語では統一された表現で説明サインを表していないことが分かる。

## おわりに

本稿では、中国の公共サイン《公共規範》の中の「公共サービス情報」の慣用表現を中心に、「警告」類、「禁止」類、「指示」類、「説明」類に分け、それらの日本語訳について考察し、以下のことが分かった。

- (1) 「警告」類サインの慣用表現には、直訳と意識がよく使われており、

中国語には“当心……”、“小心……”、“注意……”3種類の表現があるが、それに対して、日本語訳では、ほとんど「…注意」に翻訳され、表現が単一化されている。

(2)「禁止」類サインの慣用表現にも、直訳、意識がよく使われているが、日本語訳には多様な表現が使われていることが分かった。そのうち、「…禁止」「…しないでください」「…厳禁」3つの表現が一番多く使われている。

(3)「指示」類サインの慣用表現には、直訳、意識と加訳がよく使われており、日本語訳には多様な慣用表現が使われている。そのうち、「お/ご…ください」が多用され、「…にしましょう」「…お願いします」のような意識、「…ください」のような加訳も多く使われている。

(4)「説明」類サインの慣用表現にも、日本語訳に意識、加訳と直訳がよく使われている。中国語には統一された慣用表現がないが、日本語訳には「…させていただきます」「…て(ないで)ください」「お/ご…ください」といった慣用表現が比較的よく使われていることが分かった。

要するに、公共サインの慣用表現の意識は、起点言語である中国語と目標言語である日本語の言語文化背景に配慮しつつ、起点言語の意味をはっきり伝えることを考慮したためであるのに対し、直訳の使用は目標言語の文化要素を尊重し、形式上の対等性も保つためであると推測できる。また、「指示」類サインと「説明」類サインの情報や内容は「警告」類、「禁止」類よりもっと具体的、詳細であるため、その慣用表現の翻訳には目標言語の文化背景・言語的習慣に従った加訳も使われていると考えられる。

## 参考文献

岸江信介「四国方言における禁止表現と禁止表現行動」『山口幸洋博士古希記念論文集－方言研究の前衛』。桂書房，2008：29-46

ジェレミー・マンディ著 島飼玖美子監訳『翻訳学入門』，みすず書房（2009）

藤田恵「禁止表現の一考察」，恵泉女学園大学日本文化学科，2004：267-282

邴勝「中国の公共区間における案内サインの日本語訳に関する研究」『北星学園大学文学部北星論集』55，2018：75-81

宮崎和人『モダリティ』くろしお書院、2002

宮偉「公示語日訳策略研究—基于日語及日本文化特色」『日語學習及研究』,  
2016：104-111

張紅濤・加藤靖代「公示語的漢日交際翻訳」『黑竜江教育（理論及實踐）』7,  
2017：86-87

曾麗蘇「略論指令性“禁止類”公示語及其語用翻訳策略」『廣東教育學院學報』  
2007：88-92

Newmark, Peter A Textbook of Translation. Shanghai Foreign Language  
Education Press, 1981：39-40

## 上下の時間表現にみられるメタファー

林楽常・鄭新爽<sup>\*</sup>

**要旨：**中国語には、例えば、「上溯（遠古）」（(古代に) 遡る）のように、時間を川・流れる水に喩えてメタファー的に表現するパターンがある。先行研究では、上下の時間表現においては、人間は時間が直接に上から下へ流れる（一段階の認識）ようなものだと捉えていると指摘されている。本稿の研究では、中国語母語話者が時間を本当に直接上から下へ流れると認識するかどうかについての心理実験を行った結果、時間が直接に上から下へ流れるとは認識されていないことがわかった。その結果を踏まえ、より合理的な仮説を提案する。このメタファーの背後の概念化のプロセス（その経験的基盤から時間領域への写像まで）を具体的に記述し、図式によって形式化する。基本的には、（水平の移動として経験される）川の流れる物理法則への参照によって「上へ」または「下へ」と解釈され（つまり、二段階の認識がある）、この認識が時間領域に写像されると思われる。

**キーワード：**上下の時間表現、時間メタファー、実験、二段階の認知プロセス

### はじめに

日本語と中国語の上下を用いた時間表現においては川のメタファーの存在を主張する先行研究が多く存在している（藍純2005; 瀬戸1995、2017; 左咏梅2007; Radden 2011; 沖本2012等）。しかし、中国語においては、すべ

---

<sup>\*</sup>corresponding author. E-mail: xinshuang2020@163.com

て時間の（川の）メタファーで説明付けられない現象が存在している。例（１）で示しているように、一見すると両表現は時間メタファーが機能しているように見えるが、実際に（１）a.の「上溯」という表現は本来、空間領域における川の流れについて使う言葉であるが、ここで時間領域に使われているいわゆる川のメタファーと言えるのに対して、（１）b.は書字体系に関わっている順序認識<sup>1</sup>が働いている。

- （１） a. 上溯到遠古时代。（上古の時代に遡る。）<sup>2</sup>  
b. 上一次/上周（前回・先週）

（１）b.のような上下の時間表現の認知プロセスに関しては、鄭新爽（2017、2019、2020）で時間（川の）メタファーではなく、順序認識によるものであると説明したが、本稿は主に引き続き（１）a.のような部分的上下の時間表現の背後の認知プロセスを検討する。

## 問題提起

上記の（１）で示すように、中国語では上下の時間表現においては二つの認知プロセスが同時に存在していると言えよう。部分的上下の時間表現の背後では（１）b.のように、書字体系による順序認識が働いているのに対して、部分的時間表現は（１）a.のように、川のメタファーが機能していると考えられている。今までの先行研究では、川のメタファーに関しては、前後の時間表現では時間は水平軸に沿って流れる様式と、上下の時間表現は垂直軸に沿って流れる様式という二つの時間の把握様式が存在している。水平軸のパターンを描写するものは例（２）a.のような表現である。しかし、例（２）b.の時間表現に対して、母語話者が時間が直接に上から下へ流れるという認識を持っているのかという疑問が存在している。

- （２） a. 前天           （一昨日）

<sup>1</sup> 書字体系に関わる順序は書字方向が決まっている方向のこと。

<sup>2</sup> 以下、すべての用例に関して出典が示されていないものは、筆者の作例である。

## b. 上溯遠古（古代に遡る）

本稿では（2）b.のような部分的上下の時間表現にメタファーという時間認識が存在しているという認識には賛成しているが、母語話者が時間を直接上から下へ滝のように流れるような認識を仮定することが妥当ではないと思う。そのため、その認識が当てはまるかどうかという問題について心理実験を行い、結果としては直接上から下へ流れるとは認識されていないことがわかった。この結果を踏まえ、上下の時間表現は前後軸の時間表現と同様に、話者が時間を上から下へ直接に流れるという認知ではなく、最初の段階では水平軸によって流れるという認知であり、また、物理法則を参照にして「上へ」または「下へ」と対応させ、この空間の対応関係から時間領域にマッピングするという二段階の認知プロセスを主張する。

本稿の以下の構成は下記の通りである。まず、上下の時間表現に関する先行研究を概観する。次に、中国語母語話者が直接に時間を上下に流れているように概念化しているかどうかについて実施した実験を紹介する。それから実験の結果を踏まえた上で、より合理的な認知プロセスに関する説を提案する。最後はまとめである。

## 1. 上下の時間表現に関する先行研究

上下の時間表現に関する先行研究は概ねに2つに分けることができる。その代表的な研究として、一つは瀬戸（1995）、Yu N.（1998、2012）等の、上下の時間表現がすべて時間メタファーで働いているという時間メタファー説である。もう一つは鄭新爽（2019、2020）等の、上下の時間表現の背後の認知プロセスは単なる時間メタファーではなく、部分的上下の時間表現の背後の認知プロセスはそもそも時間認識ではなく（当然時間メタファーでもない）、順序認識であるという順序説である。ほかに部分的上下の時間表現（時間を川に喩えるもの）の背後の認知プロセスは時間メタファーと言えるが、ただし、メタファーの基盤（つまり、時間はどのように流れる時間の川につながっているのか）に関してはまだ議論の余地があると考えられている。これは本稿の研究対象になっている。まず、鄭新爽（2019、2020）等

の順序説を概観する。

## 1.1 順序説

多くの先行研究では上下の時間表現の背後に時間を断続なしで、動いている水に喩えている川のメタファーが存在しているとされている。しかし、鄭新爽（2017、2019、2020）が述べているように一部の上下の時間表現ではこのような特性が体現されていない。つまり言語レベルでは一見すると時間表現であるが、実際そもそも根本的には時間認識ではなく、順序認識に付随した時間性によって産出しているものである。例えば、仮に、すべての上下の時間表現は前後の時間表現と同様に時間メタファーで説明づけられるなら、「9点前后」（9時前後・9時ごろ）の言い方が存在している。同様に「\*9点上下」の言い方も存在しているはずだと考えられる。しかし、「\*9点上下」という言い方が存在しない。一方、中国語の古語では「八月上下」（八月くらい）、「第六次上下」（6回目くらい）という言い方が存在している。ここでの区別としては「9時」は純粋な時間を表しているのに対し、「八月」と「第六次」はそれぞれ、「8番目の月」、「6回目」の意味で順序を表していると解釈できる。「何月」という表現は、連続体としての時間内のある位置を指すのではなく、明確に区分された月の順序体系内の何番目かを表しているのである。純粋な時間ではなく順序を表している点で異なっている。

以上のことから、時間のような連続体は川のような連続性を持った存在で喩えることができるが、非連続的な性質を持った順序概念は川のような連続体に喩えることができなと言えよう。要するに、部分的時間の上下は時間を表すのではなく、順序関係を表している。その順序関係から時間性が生まれる。「上（个）月」（先月）などはその事例である。この順序認識は中国語の古代からの上下の書字習慣・読字習慣から来たものだと考えられている<sup>3</sup>。

しかし、部分的上下の時間表現（例えば、「上溯遠古」（古代に遡る））の背後には明らかに順序認識ではなく、断続性がないという特性が見える川の

---

<sup>3</sup> 紙の幅の原因で、詳細な論述を省略させていただく。詳細な説明は鄭氏（2019、2020）を参照。

メタファーが働いていると考えられている。この上下の時間表現の背後の認知プロセスに関しては後の5節で詳細に分析する。

## 1.2 時間（川の）メタファー

上下の時間表現の背後の認知プロセスの考察に関しては、上記の新しい認識と異なり、時間を川に喩えて認識するという考え方がほとんどである（史厚敏ら2007; 沖本2012; 瀬氏1995; 左咏梅2007等）。これらの先行研究がさらに二つに分けられる。川のメタファーの空間領域から時間領域の認知原理を概ねに説明している研究（沖本2012; 史氏、何氏、陸氏2007等）もあれば、認知図式を用いて詳細な認知プロセスを述べているという研究（瀬戸1995; 左咏梅2007等）もある。

史氏、何氏、陸氏（2007）、沖本（2012）等は、日中両言語の上下の時間表現は時間の流れを「上流域」と「下流域」というような領域に区分し、これが年や月などの一定の期間に投射され、「上旬」「下旬」「上半期」「下半期」などの上下の時間表現を構成していると述べている。つまり、水は高いところから低いところへ流れることから、「上流」「下流」のような表現が生み出され、さらに、この概念化が時間領域に投射されると、上下の時間表現が形成される。例えば、時間には「早」「遅」があり、「早」は「遅」の前にあるが、この時間の構造と川の構造に類似性が見られる。この類似性に基づいてメタファー写像が行われると、時間が上から下へ流れるという認識が生まれるのである。

上記の先行研究を踏まえ、瀬戸（1995）、左咏梅（2007）等は、写像関係を詳細に議論する際に有意義な知見を与えてくれる認知図式を示している。ここで代表される左咏梅（2007）の認知図式を紹介すると、次の図1のようになる。

左咏梅（2007:58）は、「上」と「下」のメタファーの中に「過去の時間が上、未来の時間が下」というメタファーがあると認めた上で、「中国語には時間の二つの捉え方がある。一つは「横」の軸であり、時間が「横」の軸に沿って流れるのに対して、もう一つは「縦」の軸であり、時間が「縦」の軸に沿って流れている」と主張している。縦軸に沿って流れる時間は図1の

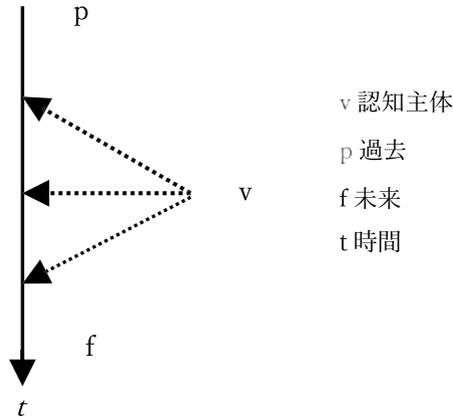


図1 縦の軸の時間図（左咏梅氏2007:58）

ようになる。これによると、時間は上から下へ流れ、上方が過去、真ん中が現在、下方が未来を表し、早い時間は「上」の方に、遅い時間は「下」の方に対応することになる。

左咏梅（2007）によると、このような時間メタファーの存在により、中国語では（3）で示されるような表現が可能である。このように「上下」の空間表現はメタファー的に写像されることによって時間を表現することができるようになるのである。

- (3) a. 上午（午前）一下午（午後）  
 b. 上半夜（夜12時前）一下半夜（夜12時過ぎ）<sup>4</sup>  
 c. 上个月（先月）一下个月（来月）

（左氏2007:59。一部変更）

上記の分析は一見すると問題ないと考えられている。しかし、上記のい

<sup>4</sup> 左咏梅（2007:59）では「下半夜」は「夜12時後」と訳されているが、ここでは「夜12時過ぎ」と訳すことにする。

れの先行研究は、母語話者が時間を上から下へ流れるという認識が前提としている。この上から下へ流れるという認識が自明であるように多くの研究に認められているが、本当に時間は上から下へ流れているのか。本稿では人間が時間を滝のように上から下へ流れるように把握しているかということを確認かめたい。以下のような実験を行った。

## 2. 実験

人間はどのように時間を認識しているのかについて実験<sup>5</sup>を行った。参加者<sup>6</sup>は中国語母語話者30人で、年齢と人数はそれぞれ、10～20歳は6人で、21～30歳は10人で、31～40歳は10人で、41～69歳は4人である。書字・読書の頻度の要素が実験の結果に影響を与える可能性があるため（書字習慣による順序認識の除く）、ここで普段書字・読書の頻度の高い10～30歳の16人と、書字・読書の頻度の低い31～69歳<sup>7</sup>の14人という二つのグループに分ける。参加者全員に同時に別々の通訳の教室で同じ実験内容について回答してもらうことにした。実験を行う前にすべての参加者に実験の手続きの概要について説明し、実験の真の目的について実験終了後に説明した。すべての参加者に2つの課題を設定した。1番目の課題を実施した後、続いて2番目の課題を実施した。

1番目の課題としてはモニター上に時間はどのように流れているのか、つまり時間に方向を付けたら、どう書くかという質問が出てきて、参加者に用意した白紙に描いてもらう。1番目の課題に関しては、前後軸の「前天」（一昨日）、「后天」（明後日）のようなプロトタイプの表現が影響している可能性があるため、2番目の課題ではモニター上に出た「上溯遠古」（古代に遡る）、「下及未来」（未来に下がる＝未来に進んでいく）などの一部の川のメタファーによる上下の時間表現を見せて、この表現では時間はどのように

---

<sup>5</sup> 2020年9月16日午後1時に大連大学で本実験を施行した。

<sup>6</sup> 参加者の中では17人が女性で、13人男性である。

<sup>7</sup> 10～30歳の学歴は高校生と大学生であるのに対して、31～69歳の学歴はほとんど中卒で、今まで、ほとんど書字・読書していない重労働者である。ここで、書字などの要素の影響を除くため、このようにグループ分けを設定している。

流れているのかを聞き、また時間の方向を描いてもらう<sup>8</sup>。2番目の課題では明確に上下の時間表現を出して、直接に考慮してもらう。質問が出た後、30秒以内に描かなければならないことにした。結果としては、1番目の課題に対して、時間の方向に関しては、両グループの30人がすべて時間を水平的に描く<sup>9</sup>という結果であった。2番目の課題に対しては、10～30歳のグループの16人の中では9人が水平的に描いている。他の7人が何も描いていない（つまり回答していない）。31～69歳のグループの14人の中では5人が水平的に描いているが、9人が描いていないという結果であった。実験終了後、2番目の課題に何も描いていない16人になぜ描いていないかと聞いたところ、9人がどう描いていいかはわからないと答え、残りの7人は時間が足りないと答えた。回答の結果を示すと以下ようになる。

図で示されているように、課題1の回答率と回答の一貫性から、明らかに

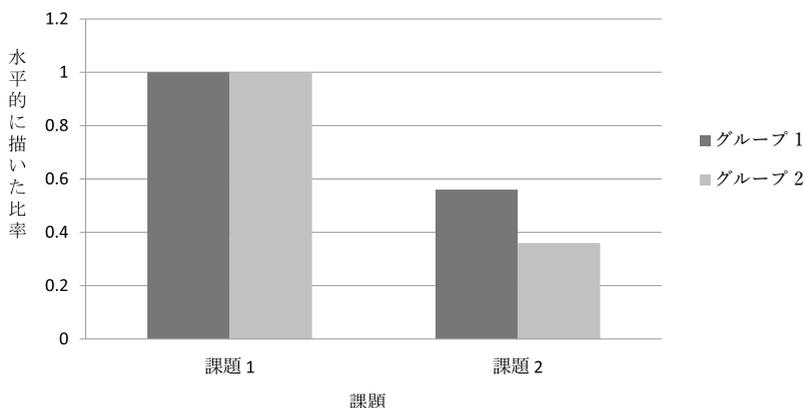


図2 回答率（水平的に描く）（著者作成）

<sup>8</sup> 「上（个月）（先月）のような表現は使用しなかった。なぜならば、これらの表現は、「上溯远古」（古代に遡る）と異なり、書字習慣と関係があると考えられ（cf. 第1節，第2節）、川のメタファー以外の要素が入ってしまう可能性があるからである。これに対し、「上溯远古」（古代に遡る）のような表現は川のイメージを喚起しやすいと考えられるので、このような表現を採用した。

<sup>9</sup> なお、この中で、少し斜め（ほぼ水平的に）に描かれたものが二つあった。斜めの角度が大きくないので、ここで水平的に見なしている。

中国語母語話者が直接に時間を上から下へ流れるという認識が存在していないことが分かった。そして、課題2の回答率はそれぞれ、グループ1では0.56で、グループ2では0.36であった<sup>10</sup>。

ここで、グループ1の回答率がグループ2の回答率より高いことから、書字習慣が時間の流れの概念化に影響があるという可能性が示唆されると考えられる。その可能性の1つは、図などで時間を水平的に表象する習慣の影響がグループ1においてより強く見られるということである。グループ1の書字・読字する頻度がグループ2の書字・読字する頻度より高いので、図などによって時間を水平的に表象する習慣が強い可能性がある。課題2に関して、時間を単純に水平的に流れているようにイメージしない傾向が両グループにあっても、グループ1が比較的気安く水平的に描く傾向があると思われる。課題1においては、書字・読字習慣のない話者も水平的に描いたので、書字・読字習慣の影響が課題1の結果には見られなかった。これは、課題1においての天井効果によるものだと推測される。つまり、課題1では、もうすでに時間を単純に水平的に概念化しているため、書字習慣が時間を水平的に描く比率を押し上げて差が出ないということだろう。

所詮、課題2では課題1と異なり、グループ1とグループ2の無回答率が低くない（特にグループ2の無回答率が半分以上の0.64であった）ことに、直接水平的に描かないようにする何かの原因が与えている影響が垣間みる。課題1の答えはすべて水平的であって、課題2の回答も全て水平的であったので、非回答の場合のそのイメージは垂直であるはずがない。むしろ、課題2に喚起された概念化は何らかの形で水平的なイメージに関連していると考えられる。回答率が低い原因は、上下の時間表現の背後の認知プロセスが複雑であることを示唆していると考えられる。

上記の実験の結果を踏まえ、次節では上下の一部の川のメタファーによる時間表現の背後の認知プロセスについて、時間を上から下へ流れるという垂直の時間認識ではなく、基本的に水平軸による二段階からなる認知図式を提案する。

---

<sup>10</sup> もちろん、実験の参加者の人数を増やせば、課題2のグループ1とグループ2の回答率の差が小さくなる可能性もある。

### 3. 提案

本研究では、上記の川または滝のように斜めあるいは垂直に流れる水の認知図式は、上記の実験で示されるように、認知主体である人間の日常的な経験からは喚起しにくいことがわかった。ここでより現実的な経験的基盤を持った認知図式を提案したい。基本的には、水平的なものとして認識される川の流れを経験的な知識として持っている物理法則を参照にして解釈することによって、上流下流の認識が生まれるという二段階の認識を想定する。これは、もともとは水平に認識される川を垂直のものとして表すということにほかならない。例えば、地図などでは上を進行方向にすることがよくあるが、これは前後軸を上下軸に射影していることになる。つまり、上下軸のように描いているだけであり、実際は、垂直のものとして認識しているわけではない。同じことが上下の時間表現の背後にも起こっていると考えられる。論理は次のとおりである。川は実際には水平方向に流れる。そこに、物体は重力に従って上から下に向かって動くという経験的知識が組み合わされると、水がやってくる方角が上、水が向かっていく方角が下という認識を得るのである。このようにして得られた「上流」「下流」のような空間的な認識が時間領域にメタファー写像されると、「上旬」「下旬」「上半期」などの表現になると考えるのである。このように、川のメタファーに現れる「上下」は経験を直接的に反映したものではないのである。

以上の考察を図に示すと以下の4つの図のようになる。そして、川の認識から時間認識に至るまでには大きく分けて2つの段階がある。前半は図3と図4が組み合わされて、図5を生じさせる段階、つまり、メタファー写像のための準備として川の構造づけが行われる段階である。後半は、図5が図6へとメタファー写像される段階、つまり、構造づけられた川（起点領域）から時間（目標領域）へのメタファー写像が行われる段階である。川は物理的には上から下へと流れるが、日常的な経験において川はむしろ水平に流れるように見える場合が多い。図3の川はこの認識を反映して水平になっている。その一方で人間は、物体が重力に従って上から下へと移動（落下）することを経験的に知っている。これを図示したものが図4である。図3と図4が動きの向きに従って合成されると水平的な川に上流と下流という構造が生



図3 水平な川



図4 物体の落下

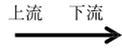


図5 上下の川

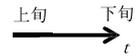


図6 上下の時間表現

まれる。これが図5である。こうして構造化された川に関する概念領域（起点領域）が時間領域（目標領域）にメタファー写像されることによって、「上～」「下～」という時間表現が可能になるのである。これを表したのが図6である。

本研究の主張が他の先行研究と異なっているところは、時間表現に現れる「上下」の概念が直接経験される川にはじめから存在するものではなく、上記のような段階を踏んで現れたものであると考えるところにある。実際、心理学実験（佐藤2014等）によって示されている日本語話者の時間認識は左から右へという水平方向であり、上から下へという時間認識が実験で確かめられたことはないが、この心理学実験が示す事実と「時代をさかのぼる」のような川のメタファーとの整合性は、時間の川は斜めではなく水平方向に流れていると考えることによって得られたのである。多くの場合、実際の川は水平方向に流れるように見えるため、「上下」の構造を生み出すような強力な経験的基盤が起点領域には存在しないのである。本稿では行われた実験では上から下へ流れいるという図式が出ていないこともそのためである。

ここで注意しなければならないのは、この認知プロセスは必ず上記のような2つの段階を経ていることである。川のイメージは垂直でもなく、斜めでもなく、ほぼ水平のものなので、川のメタファーに利用される空間軸は先行研究が指摘している「垂直軸」ではなく、「水平軸」であるということである。

## まとめ

本稿では主に中国語に関する部分的上下の時間表現の背後に存在している

認知プロセスである川のメタファーを検討した。上下の時間表現に対して時間をどのように把握しているかという実験を行った。その結果として、時間は直接に上から下へ流れていると把握しているのではないと示唆されている。そのため、本稿では、上下の時間認識に関しては、それは単なる一段階の認識ではなく、4つの認知図式からなる二段階の認知プロセスを経て得たものであると提案している。本稿で明らかにしたように、人間の時間認識はそれほど単純なものではない。時間認識とは、人間の日常生活に常につきまとう認識である。そのため、複雑な認知メカニズムが相互に関係し合うと考えるのが、正しい研究態度であると考えられている。

## 参考文献

- Boroditsky, L., & Ramscar, M. (2002) The roles of body and mind in abstract thought. *Psychological Science*, 13(2), 185-188.
- 蔡永强『漢語方位詞及其概念隱喻系統—基于“上/下”的介案考察』北京語言大學博士研究生學位論文、2008
- Casasanto, D. (2008) Who's afraid of the big bad Whorf? Crosslinguistic differences in temporal language and thought. *Language Learning*, 58, 63-79.
- Casasanto, D., & Boroditsky, L. (2008) Time in the Mind: Using space to think about time. *Cognition* 106, 579-593.
- Fuhrman, O., McCormick, K., Chen, E., Jiang, H., Su, D., Mao, S., & Boroditsky, L. (2011) How Linguistic and Cultural Forces Shape Conceptions of Time: English and Mandarin Time in 3D. *Cognitive Science*, 35(7), 1305-1328.
- 徐蓮「時間メタファーの普遍性と相対性: 上下軸・前後軸・左右軸の競合をめぐって」『言語文化と日本語教育』40、2010: 86-89.
- Lakoff, G., & Johnson, M. (1980) *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago press. 渡辺昇一他訳『レトリックと人生』東京: 大修館書店、1986
- Lakoff, G., & Johnson, M. (1999) *Philosophy in the Flesh: The Embodied*

- Mind and Its Challenge to Western Thought. New York: Basic Books.
- 藍純『認知言語学と隠喩研究』北京：外語教育と研究出版社、2005
- 沖本正憲「身体経験とことば：プライマリー・メタファーの観点から」『苫小牧工業高等専門学校紀要』47、2012: 6-35.
- Radden, G. (2011) Spatial time in the West and the East. In M. Brdar, M. Omazic, V. P. Takac, T. Erdeljic Gradecak & G. Bulja (Eds.), Space and Time in Language (pp. 1-40). Frankfurt: Peter Lang.
- 左咏梅「「上」と「下」のメタファーについて—日中対照研究—」『大学院論文集（杏林大学大学院国際協力研究科）』4、2007: 47-63.
- Santiago, J., Lupianez, J., Perez, E., & Funes, M. (2007) Time (also) flies from left to right. *Psychonomic Bulletin & Review*, 14(3), 512-516.
- 佐藤徳「未来は君の右手にある—身体化された時間概念—」『心理学研究』85（4）、2014: 345-353.
- 瀬戸賢一『空間のレトリック』東京：海鳴社、1995
- 瀬戸賢一『よくわかる比喩：ことばの根っこをもっと知ろう』東京：研究社、2005
- 瀬戸賢一『時間の言語学』東京：ちくま新書、2017
- 史厚敏，何芸，陆彦“英汉”上下“空间隐喻的认知对比研究”《湛江师范学院学报》25（2）、2007: 114-118.
- 鄭新爽「中国語話者の時間認識に見られるメタファーについて」『日本認知言語学会論文集』17、2017: 234-243.
- 鄭新爽「中国語の時間認識について—『左』『右』を伴った新たな時間表現を中心に—」『日本言語学会予稿集』155、2017: 205-210.
- 鄭新爽「中国語の時間表現に見られる順序認識—“上下”の時間表現を中心に—」『認知言語学研究』4、2019：109-131.
- 鄭新爽「中国語における時間表現に関する認知言語学的研究—日本語との比較を通して—」広島大学博士論文、2020
- Yu, N. (1998) The Contemporary Theory of Metaphor: A Perspective from Chinese. Amsterdam: John Benjamins.
- Yu, N. (2012) The metaphorical orientation of time in Chinese. *Journal of*

Pragmatics, 44, 1335-1354.  
(2021年1月5日)

## 帝国期遺産をまなざす「われわれ」の特殊性 ～東アジアの現地調査から

上水流久彦

### はじめに

本稿では、近代建築物を歴史遺産と認定し、「過去の良き時代」の象徴として利活用する「われわれ」の在り様について論じる。ここでいう「われわれ」とは、大日本帝国期（以下、帝国期）の建築物を肯定的に捉え、利活用する日本及び旧植民地の人々を指す。

東アジアにおいて近代化が自らの歴史を認識するうえで重要であることは間違いない。日本の重要文化財のうち、建築物については近世以前が1980件、近代は366件である（[https://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/categorylist?register\\_id=102](https://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/categorylist?register_id=102) 2021年1月23日確認）。近世以前と近代以降の時間の長さには比して近代の建築物が366件も重要文化財になっている点は注目に値する。台湾の場合は、少しデータは古いですが、2014年2月時点で日本植民地期の建築物で古蹟・歴史建築に認定されたものは、古蹟364件、歴史建築658件で、台湾全土の古蹟・歴史建築の1,957件（古蹟802件、歴史建築1,157件）の約半数を占める。ここでも植民地期の建築物の台湾における重要性が確認できる<sup>1</sup>。

近年は、そのような建築物が日本や台湾や韓国いずれでも、レトロを象徴するものになっている。台湾では帝国期の建築物をカフェやレストランにするなどレトロブームで、そのような建物をレトロとして台湾人が紹介する書

---

<sup>1</sup> このことは、日本のものを大事にしているということではない（上水流 2016）。崔は旧朝鮮総督府庁舎を事例に「韓国の歴史的な建物である」と述べるが（崔 1999：16）、台湾の植民地期の建築物も日本のものではなく、台湾のものである。

籍が日本でも販売されている（辛永勝・楊朝景 2018）。韓国でも同様で（中村 2020）、筆者が調査した2014年9月の現地調査時点でも大邱では、日本統治期の建築物がカフェとして使われ、改築も進んでいた。日本もレトロなカフェなどの人気は高い<sup>2</sup>。

消費におけるレトロをノスタルジアから論じた堀内は、Sternの歴史的ノスタルジアに基づいて、歴史的ノスタルジアの感情経験は文化的なアイデンティティの確認という意味を持つと考えることができるとする（堀内2007：185）。そのSternは、個人的な記憶と結びつく個人的ノスタルジアと対比させて、生まれる以前の歴史の物語や歴史上の人物への感情移入に基づく歴史的ノスタルジアを喚起するプロモーションとは、「過去の良き時代と自分を結びつけたいという消費者の願望に訴えるもの」とする（Stern 1992：14-15）。これらの論にしたがえば、レトロブームは、近代の建築物に「過去の良き時代」を見いだしていることとなる。

一方で、旧植民地<sup>3</sup>で帝国期に建築された建築物は、負の遺産でもある。したがって、朝鮮総督府のように破壊された建築物も多い（崔 1999）。または、沖縄の事例だが<sup>4</sup>、そこに植民地支配の傷も見出される（上水流 2018）。韓国では収奪の歴史を体現するものとして当時の建築物が保存され、台湾でも日本の統治支配への抵抗の記憶と結び付けられた建築物も存在する（後述する）。

そこで本稿では、日本も視野にいれ、帝国期の建築物が歴史遺産に認定され、レトロブームのなかで活用される現象から、帝国期の建築物と「文化的なアイデンティティの確認」や「過去の良き時代と自分を結び付けたい消費者の願望」との関係にみる「われわれ」の在り様について検討する。そこで

---

2 一例をあげておく。1912年に建てられた大阪市にある北浜レトロは登録有形文化財である。現在、英国風のカフェが楽しめるとして行列が絶えない。筆者が調査した2019年も同様であった。このような明治から第二次世界大戦以前の西洋建築を活用したカフェやレストランは、日本各地で見ることができることは言を俟たない。

3 韓国では、植民地ではなく、強制的な占拠であったという意味で、「日帝強占期」とされる。また、中国東北部は傀儡政権という形をとった満州国であり、現地では「偽満州」と呼称・表記される。

4 沖縄は琉球国という一つの国であったのであり、日本の支配下にいれる過程を見ると、それは植民地化と同様であろう。

は、欧米の実態や意識とは異なって西洋の様々な建築物が、近代を表象するものとして内面化される「われわれ」の特殊性が見出される。

## 1. 旧植民地における帝国期の記憶のされ方

「われわれ」の在り様を論じる前に、帝国期の建築物の記憶のされ方について概観する。最初に旧植民地についてである。旧植民地における日本植民地期の建築物の保存・利活用は、当然ながら消費を目的に行われるものではない。建築学的価値や歴史的意義が認められ、まず保存が決定される。したがって、「過去の良き時代」と自分を結び付けたい願望から全てが説明できるわけではない。

中国吉林省長春は新京と言われた旧満州国の首都で、皇帝が住むパレスがあった。現在、その建物は「偽満州国旧皇宮旧址」として2013年から「全国重点文物保护单位（日本の重要文化財に相当）」になり、説明には「日本の中国侵略の、植民統治をおこなった目に見える証」で、「愛国主義教育の拠点」と書かれている。そして、パレス内には江沢民元中国共産党主席による「勿忘“九一八”」（〈満州事変が始まった〉



図1 2015年11月筆者撮影

9月18日を忘れるな 〈 〉内筆者注)の碑(図1)が存在する。パレスの雰囲気を活用したカフェやレストランはなく、レトロを活用した消費の場はない。ここが屈辱的な歴史を象徴し、「良き時代」として懐かしむ場ではないことは、明白である。

同様の事例を韓国からも紹介しておきたい。全羅北道の群山市郊外に禾湖理という集落があり、集落全体が日本による収奪の証とされている。集落の入り口には、「禾湖理 日帝強占期 収奪現場」とハングルと漢字で書かれた看板が掲示してある(次頁 図2)。日本の地主が小作から米を搾取していたことが書かれ、悲惨な記憶が残されている。ここでは、偽満州国旧皇宮旧址と同じく、負の記憶の継承が保存の目的となっている。



図2 2014年8月筆者撮影

親日とされる台湾<sup>5</sup>にもそのような建築物はある。1998年に古蹟（日本の重要文化財に相当）に認定され、現在、台湾新文化運動紀念館となっている旧台北警察署（1933年建造）である。この紀念館では、1920年代から1930年代のモダンな文化活動が展示されていると同時に、日本の植民地統治に抵抗・抗議した人々が捕えられ、拘置された様子を見ることができる。

水で満たした所に容疑者を中腰にさせる「水牢」も展示されている。この建築物の保存にもレトロという言葉では説明できない、負の記憶の継承が見られる<sup>6</sup>。

このような植民地期の記憶の保存は、ある意味で予想されうる範囲である。だが、現在、その植民地期の記憶のされ方は、様々である。筆者は、多様な記憶（忘却も含む）の在り様を日本の旧植民地の建築物の保存・利活用の研究から、外部化、内外化、内部化、溶解化、遊具化の5つに分類するが、モダンでおしゃれなカフェやレストランとしてレトロブームのなかで利活用されることもその一つである。

5分類を説明すると、外部化は植民地期の建築物の破壊や放置である。1996年に完全に解体された旧朝鮮総督府庁舎がこれに該当する。自らの歴史の一部として認識し、文化資産化していく動きは、内外化と内部化の二つ

<sup>5</sup> 紙幅の関係から詳述しないが、台湾を単に親日とみなすことには、日台友好の点でも台湾理解という点でも弊害があると筆者は考えている。

<sup>6</sup> なお、台湾の近現代史の専門家である何義麟は、ここの展示について「抗日運動やそのリーダーたちを讃えるのではなく、新文化の展開とその成果を強調することに重点を置いています。『拘留所』や『水牢』の展示には抗日の側面もありますが、史跡を紹介するという意味の方が強いと言えるでしょう。新文化運動のネーミングにはポジティブな意味が込められ、普通の抗日記念館とは全く違った発想が込められています」（[https://taiwan-shugakuryoko.jp/spot\\_north/633/](https://taiwan-shugakuryoko.jp/spot_north/633/) 2021年1月22日確認）と述べ、悲惨な歴史の継承の場だけではないとする。

に分けることができる。いずれも、日本出自が不可欠な要素であり、日本出自ごと自らの歴史に組み込むが、近代化を阻害したとする理解は自らの歴史としつつ、否定する側面を前面に出すもので、アンビバレントな認識が存在する。これが内外化である。例えば、収奪の歴史として保存される韓国における日本統治期の建築物や収奪現場が該当する。一方、「日本」を肯定的に理解し、他者との差異化を図る行為が内部化である。台湾では、中国と異なる歴史として日本の植民地期が認識され、その台湾の歴史として目に見えるものが日本統治期の建築物だとする立場も存在する。

溶解化は、「おしゃれ」、「木造建築が美しい」という感覚で、植民地期の建築物がとらえられる。それゆえに日本出自は消費する者には問題とされない。日本のものは「おしゃれ」、「美しい」を構成する一部であって、歴史的な意味は消費されない。台湾にとって異質な「日本（日本的文化要素）」が、その出自を脱色し、日常生活へ溶け込んでいく。そのようなあり方が溶解化である。カフェやレストランとしての利用がここに該当する。最後が遊具化である。遊具化とは、「日本」が消費される対象になることを指している。単純なおしゃれな空間ではなく、日本植民地期の建築物であった歴史性を認識したうえで「日本」を楽しむ<sup>7</sup>。木造建築物が日本の雰囲気があるということで、しばしばそのような場になる。

このように分類できるものの、分類は固定的なものではない。状況に応じて同じ建築物であっても、「日本」の意味づけが強調されることもあれば、されないこともある。「日本」という要素は、脱着可能である<sup>8</sup>。さらに言えば、同じ建築物に否定的価値を見いだす者もいれば、「日本」を見いだす者、まったく歴史的要素は見いださずモダンという意味だけ消費する者もいる。植民地期の建築物は、状況依存的に、また見る者によって象徴するものが変

---

7 地域全体ということ言えば、韓国の浦項市内の九龍浦がある。ここは、日本統治時代に漁村としてつくられた地域であるが、昔の街並みが現在も残っていることから、「日本」を楽しむ場として2015年前後から地域振興を目的に整備が行われた。浴衣を着て韓国の若者が散策する姿や日本的なのぼりなどが見られたが、歴史認識をめぐる日韓関係の影響をうけ、浴衣姿で歩くことが禁止されたりなどした。なお、歴史遺産ではない。

8 脱着可能な「日本」については、上水流（2011）に詳しい。

わる多義的な存在である。

## 2. 日本国内にみる帝国期の記憶のされ方

次に日本における近代の記憶の在り様に目を向けてみよう。大まかに二つの方向性がある。ひとつは、近代化・産業化を伝える方向性と、戦争被害を伝える方向性である。前者の代表的なものに世界遺産である「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」がある。文化庁のホームページには、「西洋から非西洋への産業化の移転が成功したことを証言する」ものから構成されており、「一連の遺産群は造船、製鉄・製鋼、石炭と重工業分野において1850年代から1910年の半世紀で西洋の技術が移転され、実践と応用を経て産業システムとして構築される産業国家形成への道程を時系列に沿って証言している（[https://bunka.nii.ac.jp/special\\_content/hlinkF](https://bunka.nii.ac.jp/special_content/hlinkF) 2021年1月22日確認）」とあり、認定において産業化の発展・成功が重要な要素である。

後者は同じく世界遺産である「原爆ドーム」（1915年竣工）である。戦後、原爆ドームについて、「記念物として残すという考え方と、危険建造物であり被爆の悲惨な思い出につながるということで取り壊すという二つの考え方」があった。だが、1966（昭和41）年7月に広島市議会によって「原爆ドーム保存を要望する決議」がなされた。その決議文によれば、保存する理由は「ドームを完全に保存し、後世に残すことは、原爆でなくなられた20数万の霊にたいしても、また世界の平和をねがう人々にたいしても、われわれが果たさねばならぬ義務の一つである」とされている（<http://www.city.hiroshima.lg.jp/www/dome/contents/1005000000003/index.html> 2017年9月17日確認）。このように原爆ドームは、原爆投下の悲劇を世界の人々に知ってもらい、平和を希求するために保存された<sup>9</sup>。

だが、これらの記憶から帝国期の歴史として零れ落ちるものがある。日本

---

<sup>9</sup> 興味深いことに、文化庁の原爆ドームの説明には、原爆投下の犠牲や平和の希求に類する文言はなく、原爆が投下される直前の様子や、原爆ドームと呼ばれるようになった由来が書かれているのみである（[https://bunka.nii.ac.jp/special\\_content/hlink5](https://bunka.nii.ac.jp/special_content/hlink5) 2021年1月22日確認）。

社会への同化を求められた視点からの記憶である。その代表的なものがアイヌと琉球人の記憶である。筆者は、2020年7月に札幌市有形文化財である「清華亭」を訪れた。清華亭は明治13年に貴賓の接待所として開拓史工業局の設計監理によって建てられた。説明版には、「北海道開拓の黎明期の歴史を象徴するものとして」、「開拓使の建築技術者が洋風建築に和風様式を導入した貴重な例として」札幌市有形文化財に指定されたとあり、近代化、産業化の観点から価値あるものとされている。しかし、その一帯の開拓において追われたアイヌについては、全く言及されない。

原爆ドームもアイヌが追われた記憶も、帝国期の重要な過去だが、歴史的ノスタルジアの対象とはならない<sup>10</sup>。「過去の良き時代」ではないからである。どのようなものが、「過去の良き時代」と結びつくのであろうか。以下ではその点に絞って見てみよう。

沖縄は、周知のように、日本とは別の国であった。それが明治以降、日本へ組み込まれていく。結果、沖縄の人々は、日本本土と台湾や朝鮮などの外地の間に位置する日本国民として言葉などの文化を強制され、琉球には本土とは異なる政治制度が導入され、様々な近代システムの導入と同時に、皇民化・独自文化の消失・いびつな経済構造が確立された。その近代化は「植民地近代」（板垣 2004）であった。そのような沖縄でも「過去の良き時代」とも結びつく語りは、存在する。

例えば、重要文化財である大宜味村旧役場庁舎である。沖縄で重要文化財とされる近代建築物はこの建物のみで、観光スポットでもある。文化庁のホームページには、次のような解説がある。

大宜味村役場旧庁舎は、沖縄県における最初期の鉄筋コンクリート造建築で、かつ現存最古のものであり、役場庁舎としては全国的にも先駆的な事例である。沖縄県における鉄筋コンクリート造建築の普及発展を理解するうえで、高い価値を有している。

---

<sup>10</sup> 原爆ドームのある平和公園は、犠牲者を悼み、平和を祈念する場であって、一般の公園のように楽しむ場であってはならないという考えを持つ人々も広島には一定数いる。

(<https://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/maindetails/102/00004981>  
2020年1月21日確認)

現地で筆者が入手した大宜味村村史編さん室の説明にも、副題として「沖縄で一番古い鉄筋コンクリート建造物」と書かれ、「大宜味大工の技術の高さが随所にうかがわれる」、「県内でもっとも早い時期に作られた鉄筋コンクリートの庁舎は、大宜味村のシンボル、近代化の象徴として人々から親しまれ利用され大切にされてきた」などの文言が並ぶ。そして、「大宜味村の進取の気性、大宜味大工の気概、そして村の歴史の象徴として、地域の人々の誇りである」と締めくくられている。さらに、「沖縄全土が灰燼と化した沖縄戦も潜り抜け」という記述もある。これらの説明からは、沖縄戦の戦火を免れたことと、この建造物が大宜味村役場では大宜味村の誇りを語る、近代化の証として認識されていることがわかる。この記述に歴史的ノスタルジアを見ることは容易であり、文化的なアイデンティティの確認がなされている<sup>11</sup>。



図3 2020年3月筆者撮影

ひとつに「大正末期から昭和初期 カフェー大流行」という案内があった(図3)。そこには、以下のように記してあった。

2020年3月の名古屋調査では、近代建築物が多く残る名古屋の中心街広小路をめぐった。そこには、名古屋の広小路通りの修景計画「広ぶら芸ぶらヒストリー」の展示もなされていた。その計画は江戸から現在までの町の風景を文献や写真から説き起こすものであるが、その

<sup>11</sup> 那覇市には沖縄戦で建築物のほぼ全てが消滅したため当時の建築物はない。産業化やモダンな象徴として活用する例は、筆者が確認する限り、那覇市以外にあり、例えば、与那原の軽便鉄道の駅舎や北大東島村の燐鉱山遺跡などである。

ヨーロッパの大都市で流行ったカフェが日本に伝わり、20世紀初頭、東京で始まった。最初はコーヒーのみを提供する店だったが、徐々に女給がボックスで酒を給仕する店になっていった。

お酒を提供しない「カフェ」と区別するため「カフェー」と表記されることが多い。大正末から昭和初期にかけてカフェーは大流行し、広小路周辺とくに広小路本町周辺には多くのカフェーがあった。

ヨーロッパから伝わったカフェー文化が広小路で見られたことが、街の繁栄として記されている。西洋のものを日本に導入していくことが先進的とする認識は、「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」の文化庁の解説文と同じである。歴史的ノスタルジアが観光資源として、文化的アイデンティティの確認の資源として活用されている。

言うまでもなく、日本は欧米を近代化の模範とした。欧米の文化をうまく導入すること、欧米の文化を日本にうまく接続すること、これらが進歩であり、成功と当時されていた。その意識がテーマパーク化されている場が、日本の近代建築の素地となった建物の保存・公開がなされている明治村である<sup>12</sup>。そのホームページには次のような文章がある。

明治時代は、我が国が門戸を世界に開いて欧米の文物と制度を取り入れ、それを同化して近代日本の基盤を築いた時代で、飛鳥・奈良と並んで、我が国の文化史上極めて重要な位置を占めている。明治建築も従って江戸時代から継承した優れた木造建築の伝統と蓄積の上に、新たに欧米の様式・技術・材料を取り入れ、石造・煉瓦造の洋風建築を導入し、産業革命の進行に伴って鉄・セメント・ガラスを用いる近代建築の素地を築いた。(https://www.meijimura.com/about/ 2020年1月21日確認)

そして、入り口にある案内には、「明治村は日本の近代化に力を尽くした

---

<sup>12</sup> 移築展示されている建造物が67件あり、そのうち重要文化財が11件、愛知県指定文化財が1件である。

人々の精神と努力の結晶があるがままに」と記されている。

Sternや堀内が述べる良き時代と自分を結び付けたい欲望がここには存在し、文化的アイデンティティの確認がなされている。そして欧米の技術を日本に導入し、欧米の文化を日本文化に接合した姿を確認できる。旧植民地でもそれは同様であり、次節では再度旧植民地の記憶の在り様からその点を確認してみよう。

### 3. 旧植民地にみる帝国期の建築物

日本は有色の帝国として、強者への憧れと対抗意識のなかで揺れ動きながら、弱者への支配を行った（小熊 1998：662）。戦前の日本の西洋建築物を文学の観点から分析する日高と西川は、「近代日本における西洋建築は、例えば、近代化のイメージを具現化したものとして、また、異文化との交差点として、あるいは植民地において〈日本〉をシンボライズするものとして存在してきた（日高・西川 2018：5）」と述べる。すなわち、帝国期の建築物は「日本」と「近代」の重なる焦点であった。それゆえ、近代化という欧米への憧れは、日本を通じて旧植民地にも移植された。

台湾の戦前のカフェ文化を文学との関係から分析した和泉は、「1930年代の台北には、すでに特殊喫茶の『カフェー』も『喫茶店』『純喫茶』も、両方が存在していた（和泉 2018：149）」とし、台湾人からなる詩人のあるグループを取り上げ、「彼らが『近代性』を追い求めていたのは明らかであり、近代建築の中に据えられた『近代的』施設としての『喫茶店』は、彼らにとって——そして、『近代性』を担おうというすべての台湾人青年達にとって、欠くべからざる場所となっていたはずだ（和泉 2018：166）」と述べる。

台湾へのカフェ文化の移入は、1896年の資生堂がその最初である（山路 2020：48）。ただし、本格的なカフェ文化の移入にはさらに時間を要した。そして、台湾のみならず1930年代には満州でも広くカフェ文化が広がっており、それは朝鮮でも同様であった（山路 2020：51-53）。1930年代初頭には、京城（今のソウル）では、「豊かな消費文明への渴望が渦を巻き始めていた」という。このようにレトロの基盤となるモダン、1930年代、

日本の旧植民地には存在したことがわかる。

現代でも、歴史的ノスタルジアや近代化へのあこがれは、確認できる。すでに内部化や溶解化、遊具化として台湾などの事例を紹介したが、ここでは欧米、特にアメリカへの対抗意識を明確に持つ中国でも歴史的ノスタルジアがあることを確認しておきたい。



図4 2015年10月筆者撮影

筆者は2015年の大連や瀋陽で調査を行ったが、瀋陽市の中山広場近辺にある満州国時代のルネッサンス様式の建築物が現在も残り、その一部は重要文化財となっている(図4)。そして、中山広場周辺には「歴史建築文化街区」ガイド図が掲げられていた<sup>13</sup>。同様のガイド図は大連にも存在した。ここからは日本が移入した西洋建築物が「文化」として肯定的に認識され、「展示される」価値を有することがわかる。

当然、そこには近代化が伴う。大連市の旧満鉄病院は、現在、大連中山医院となっている。病院内部には、旧満鉄病院の診察室が再現されている。当時の医療器具が展示され、近代医療の導入の歴史を知ることができる。帝国期の記憶は、近代化する満州と表裏一体である。

さらに大連市の旧大和ホテル(調査当時は大連賓館)の2015年7月の調査では、大連市の迎賓館として使われていたとホテルの職員が筆者に説明してくれた。欧米などから市役所の来客があるとき、わざわざ、旧大和ホテルで市長はゲストを迎えたという。それほど、風格があり、立派なものだと筆者に解説してくれた。ここに歴史的ノスタルジアを見ることはそれほど見当

<sup>13</sup> なお、吉林省の長春では見る事ができなかった。ハルビン、長春、瀋陽、大連を調査して、省ごとに旧満州国の建築物の扱いが異なる部分があることが判明した。長春では抗日の意味合いを前面に出していた。ハルビンではロシア文化の影響が日本文化よりも前面に出ていた。なお、国家レベルで旧満州国の建築物が歴史遺産に認定されるのが2010年代前半と、中華文化を象徴する遺産と比べると遅い点は共通である。

違いなことではない。

2019年の5月の現地調査では、大連市役所旧址の前で写真をとる中国人グループの姿も見ることができた。それらの建築物には、QRコードが設置され、その建物の歴史や内観を見ることができるようになっていた。西洋建築物が観光の対象として肯定的価値をもって少なくとも受け入れられていることがわかる。

このような現在まで続く日本植民地期の建築物への歴史的ノスタルジアが、植民地支配から現在まで必然的に続いたと述べるつもりはない。保存されていても、長春のパレス保存に見るように負の表象物として保存されることもしばしばである。したがって、帝国期の建築物を歴史的ノスタルジアの対象とするには、そのための様々な仕組みが必要である<sup>14</sup>。消費文化の拡大、メディアによる欧米の建築文化の紹介、欧米への観光旅行の拡がりなど検討すべき項目は多岐にわたる。紙幅の関係からここではこれらの点を詳述できないが、日本との関係から重要な点を二つ指摘しておきたい。

ひとつは、建築物と「日本」という要素が切り離された可能性である。2019年の調査で筆者は、大連の大学で日本語を教える教員に「偽満州の建築物を保存することに抵抗はないのだろうか」と質問をした。その答えは、「一般の人は、そのような歴史を知らないですよ。意識していません」というものであった。似た話は「日本」が肯定的に語られる台湾でさえ聞いた。2013年に台湾の台中で50歳代の女性と雑談として筆者の研究について話していた時、「何が日本統治期の建築物なの？」と質問された。筆者が、「例えば、現在の総統府だ」と答えたところ、「そうなのか！」と驚いていた。台湾が日本に統治されたことは知っていても、一般の人々の間において、個々の建築物と日本の統治とが結びつくとは限らない。ここに、日本の支配という負のイメージが失われる余地が見出される。

もうひとつは世代交代である。Sternが歴史的ノスタルジアで重要なことを「見る者が生まれる前の過去の提示 (Stern 1992: 13)」とするように、世代交代は「過去の良き時代」との結びつきを分析するうえで不可欠であ

---

<sup>14</sup> この点については、上水流(2016)で詳しく論じた。

る。1970年代、1980年代に独立がなされたアフリカなどの欧米の植民地と違って、日本の旧植民地は1945年に植民地支配から脱却する。台湾を例にとれば、2014年7月末現在、65歳以上の比率は11.7%である ([http://www.ris.gov.tw/zh\\_TW/346](http://www.ris.gov.tw/zh_TW/346) 2014年9月4日確認)。この数字に鑑みれば、現在、戦前生まれは1割を下回ると思われ、植民地支配の非経験者が約9割を占める。このような傾向は、他の旧植民地でも同様である。つまり、植民地支配経験が歴史化され、客体化されやすい状況、経験していない過去を良き時代とする歴史的ノスタルジアが生まれやすい素地が、現在、生じている。

もちろんサイドがオリエンタリズムとして指摘するように（サイド1993）、非西洋に身をおく「われわれ」は、先進的な欧米、後進的な「われわれ」という認識を、政治的権力や学術的権威のもと繰り返し、刷り込まれてきた。中国が超大国となる以前、戦後は経済的にも政治的にも欧米を中心とした世界システムのなかにあり、帝国期の西洋への憧れとその導入・接続を成功と見なす認識は、現在まで存続する。メディアにおける欧米文化の紹介や欧米への観光もその一部と言えよう。

このように日本が導入した近代化は、世代交代とオリエンタリズムの装置のもと、「日本」が脱色された形で過去への歴史的ノスタルジアとして、旧植民地で西洋建築や洋風建築を通じて具現化されてきた可能性がある<sup>15</sup>。

#### 4. 帝国期の建築物にみる「われわれ」の特殊性

ここまで述べてきた帝国期の建築物への歴史的ノスタルジアは、西洋の近代化を目標としてきた東アジアの在り様に基づくと、論証するまでもない当然のことと思われる。だが、これが欧米の視点から見ても共有可能であるかと言えば、そうではない。そこに「われわれ」の特殊性が存在する。本章の最後にこの点について考えてみたい。

日本は、後発の帝国として欧米を模範に近代化を進めてきたが、帝国期の建築物は近代と直接関連するものではない。例えば、帝冠様式の台湾総統府

---

<sup>15</sup> 個人的ノスタルジアから、日本統治期の建築物が保存・再生されることもある（渡邊 2021）。

は、中世にヨーロッパで流行したロマネスク様式が基盤にある。台北市にある済南基督長老教会や大阪市の大丸心齋橋店本店は、12世紀から15世紀にかけてフランスから始まったゴシック様式である。大連や瀋陽の中山広場に展開するものは15世紀から17世紀に流行したルネッサンス様式である。16世紀からイタリアを発祥地として広がったバロック様式も見ることができる。例えば、ソウルにある1935年に落成した旧朝鮮貯蓄銀行（現在、スタンダードチャータード銀行第一支店）や東京の日本銀行本店である。台湾では17世紀から18世紀にかけて発達したコロニアル様式（欧米の植民地の建築文化と宗主国の建築文化が統合されたもの）の建築物も多い。また、明治村の説明にみるように欧米の建築様式に日本の建築様式を加えた洋風建築も存在する。

近代がいつから始まったかは大きな問題だが、産業革命をひとつの起点とするならば、18世紀半ば以降、ヨーロッパで近代化が進んだと考えることができる。そして、上記の建築様式はすでに近代化以前に存在していた。したがって、筆者は建築学や建築史の門外漢であるが、敢えて述べれば、欧米（イギリス、フランス、アメリカなど）<sup>16</sup>で近代化とこれらの建築様式を直接的に結び付けることはできない。しかしながら、日本や旧植民地では既述してきたように近代という枠組みのなかで、欧米の様々な建築様式が日本、日本を通じて旧植民地に圧縮・混在して輸入され広がった。それゆえ、近代化とは時代的にずれるこれらの様式の建築物が、「われわれ」の地域では近代化と結びつくまなざしを受けることとなった<sup>17</sup>。

したがって、これらの建築物は「われわれ」のまなざしと欧米の人々の「まなざし」においてズレを生じさせることとなる。それを考える手がかりが、前章で紹介した旧大連市役所庁舎の前で写真を撮る中国人観光客である。そのような姿は、日本でも見ることができる。

---

16 欧米における近代化の歩みに多様性があり、ここでは主にヨーロッパの大国とアメリカを念頭においている。

17 日本の旧植民地の建築物を研究する西澤は、満州事変以降、欧米の建築物の模倣の必要がなくなり、東アジアの伝統的建築様式が重視されていくとする（2008）。加えて19世紀末から20世紀初頭にかけて流行したアールヌーヴォー様式も広く見られるという。

2019年9月、筆者は昭和6（1931）年に第四師団司令部庁舎として建築された建物を見るために、大阪城公園内の複合施設「MIRAIZA OSAKA-JO（ミライザ大阪城）」を訪ねた（図5）。ロマネスク様式の「ヨー



図5 2019年9月筆者撮影

ロッパの中世の古城に似せた外観（現地の説明パネル）」になっているという。ホームページには、「過去から現在、そして未来へつづく物語を感じながら、どうぞ素敵な時間をお過ごしください」とある（<https://miraiza.jp/> 2021年1月21日確認）。

そこで筆者は、不思議な光景を目にした。ミライザ大阪城は、大阪城を正面に見て右側にある建物である。見学も可能である。興味深いことに見学をする人間も、またミライザ大阪城を背景に写真を撮る人間も、全て東アジアの人々（筆者が確認する限り、日本人か中国人）であった点である。

だが、その周辺にいた人間は、東アジアからの観光客だけではなく。欧米からと思われる観光客も多くいた。だが、彼らはヨーロッパの中世の古城を模したミライザ大阪城には全く関心を示していなかった。彼らは、大阪城を背景に写真を撮り、鎧や兜をかぶって写真を撮るばかりであった。

これと似た状況は、2019年6月に訪れた中部での調査でも出会った。その調査では、馬籠宿、妻籠宿、明治村を巡った。中山道の風情を残す馬籠宿と妻籠宿は、日本人はもちろん、東アジア、東南アジア、欧米人の観光客であふれていた。木曽路は、妻籠宿で見た英文雑誌では、「samurai trail」と紹介され、「A walk through old Japan」という見出しがあった。妻籠宿を離れる公共交通機関のバスに19名が乗ったが、日本人の客は筆者のみで、他は全て欧米人を含む外国人であった。日本人観光客が自家用車で来ることや、外国人旅行者には個人旅行が多いことを考慮しても、外国人の多さは際立っており、馬籠宿や妻籠宿が日本を堪能する場所として、如何に人気かが

わかる。

馬籠宿・妻籠宿を訪れた翌日、「日本の近代化に力を尽くした人々の精神と努力の結晶」がある明治村を訪問した。朝の10時から午後の4時ぐらいまで明治村をまわったが、そこで出会った外国人は台湾人一家族4名のみであった。見る限り、欧米人らしい見学者には一人も出会わなかった。

また2019年3月には「大阪暮らし今昔館」を訪問した。9階には江戸時代の大阪が、8階には明治・大正・昭和の大阪が、その暮らしを中心に展示されている。9階で見かけた外国人観光客の姿は、8階ではほぼ見ることができなかった。

ここからは、欧米人が日本に何を見に来ているかが確認できる。それは、日本的なものの、すなわち、「samurai」であり、「old Japan」である。そして、「old Japan」には、日本人が明治に見出す過去は含まれない。欧米人の彼らにとって中世の古城を模したものでも、それは日本に来て見るに値しないものであった（元来見るリストにも無いであろう）。欧米には、日本の建築家が模したロマネスク、ゴシック、ルネッサンス、バロック（正確には「風」であろう）などの建築物はあふれている。したがって、日本の西洋建築物は、彼らにとって、日本人からみた日本国外でみる日本料理（あるべきではない場所にあるモノ）のようなものであり、真正性という点で問題があると言える。したがって、当然と言えば当然だが、彼らは大阪城公園内にある西洋建築物には目もくれず、大阪城や兜に目を向けるのだ<sup>18</sup>。

一方で、これまで既述してきたように、「われわれ」は西洋建築や洋風建築に近代化を感じ、保存し、利活用し、歴史的ノスタルジアを見いだす。目の前に広がっているものは、その歴史を体現する本物で、まがい物ではない。欧米化を追求した過去の証である。ここに帝国期の建築物をまなざす「われわれ」の特殊性が存在する。

小熊は、後発帝国主義の特徴として、『後発』とは資本主義経済の未成熟といった実体的な問題ではなく、『先発』勢力が存在し、またそれを意識していたという関係上およびアイデンティティ上の問題<sup>18</sup>であり、「それゆえ、

---

<sup>18</sup> このような筆者の分析の妥当性について欧米人へのインタビューを通じて今後検証していくことが今後の課題であり、本稿では検証すべき仮説の提示としたい。

日本社会の近代化がどれほど進展しようと、『先発』勢力があるかぎり、『後発』なのである」(小熊 1998:628)とする。「後発」の近代化は、「先発」勢力の前では、遺産としての価値は見劣りすることも「われわれ」と欧米のズレの背景にあろう。

## おわりに

近代化遺産であれ、産業化遺産であれ、レトロブームであれ、そこには歴史的ノスタルジアが存在する。それは、「過去の良き時代」と自己を結びつける試みで、「後発」組の帝国であった大日本帝国の「先発」を思慕する感情が存在する。日本国内では、「先発」の欧米の技術や文化を導入し、成功したものを象徴するものとして、旧植民地では、近代という西洋と「日本」が交わる場として、帝国期の建築物は存在した。植民地支配下における、または近代化における、現実にあった負の要素は、進歩やモダンに目が向けられることで、忘却される。そこに歴史的ノスタルジアが成立する。

だが、日本や旧植民地において、歴史遺産として、レトロなものとして肯定的に評価される帝国期の建築物は、欧米の目線と対等に交わるものではない。欧米の人々にとって、注目する価値はそれらにはない。彼らは、東アジアの「われわれ」のまなざしに存する歴史的ノスタルジアをもって、それらはまなざすことはない。

日本の旧植民地における建築物を遺産化するとき、それらをモダンなものとして活用するとき、その行為は、ここまで見てきた、これらの地域における特殊な認識によって支えられている。一方的な西洋への憧れと言ってしまえば、それまでのことである。だが、この点を忘れて、遺産化やその活用を研究することは、「後発」と「先発」の枠組みを無意識に受け入れ、そこを問うことなく議論することと同義であり、そのような枠組みを無意識に再生産するものである。問うべきは、建築物ではなく、それをまなざす「われわれ」の、そして帝国期の建築物に魅力され調査する自身の在り様である。

## 謝辞

本稿の主資料は、JSPS科研費21320072、JSPS科研費17251011、JSPS科研費22251012、JSPS科研費25244044、サントリー文化財団「日本統治をめぐる対日感情の歴史の変遷とその形成要因に関する研究—植民地建築物の保存・破壊・活用の検討を通じて」（2018年度 研究代表者 上水流久彦）によって収集した。調査にあたっては調査地で多くの方々に協力をいただいた。感謝申し上げます。

## 引用文献

- 崔吉城「朝鮮総督府庁舎の破壊と『風水』ナショナリズム」『日本民俗学』218, 1999 : 1-24
- 日高佳紀・西川貴子「はじめに」日高佳紀・西川貴子編『建築の近代文学誌 外地と内地の西洋表象』、勉誠出版、2018 : 4-5
- 堀内圭子「消費者のノスタルジア：研究の動向と今後の課題」『成城文藝』201, 2007 : 198-179
- 板垣竜太「〈植民地近代〉をめぐる：朝鮮史における現状と課題」『歴史評論』654, 2004 : 35-45
- 和泉司「植民地の喫茶店で何を〈語る〉か——日本統治期台湾の都市と若者」日高佳紀・西川貴子編『建築の近代文学誌 外地と内地の西洋表象』、勉誠出版、2018 : 139-168
- 上水流久彦「台北市古蹟指定にみる日本、中華、中国のせめぎ合い」植野弘子・三尾裕子編『台湾における〈植民地〉経験 日本認識の生成・変容・断絶』、風響社、2011 : 25-53
- 上水流久彦「台湾の植民地経験の多相化に関する脱植民主義的研究—台湾の植民地期建築物を事例に—」三尾裕子・植野弘子・遠藤史編『帝国日本の記憶——台湾・旧南洋群島における外来政権の重層化と脱植民地化』、慶應義塾大学出版会、2016 : 261-288
- 上水流久彦「近代建築物にみる沖縄の近代化認識に関する一試論—琉球・沖縄史の副読本にみる歴史認識を踏まえて—」『白山人類学』21, 2018 : 37-58

- 上水流久彦「建築物にみる日本の植民地支配に関する台湾の歴史認識～他地域との比較から」『生命環境学術誌』11, 2019: 1-16
- 上水流久彦「都市に刻まれる負の歴史 台湾, 韓国, 沖縄から」岡井崇之編『アーバンカルチャーズ 誘惑する都市文化, 記憶する都市文化』、晃洋書房、2019: 202-214
- 中村八重「レトロブームの中の近代建築物:韓国の植民地遺産に関する一考察」『日本文化人類学会第54回研究大会発表要旨集』、2020
- 西澤泰彦『日本植民地建築論』、名古屋大学出版会、2008
- 小熊英二『〈日本人〉の境界 沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮 植民地支配から復帰運動まで』、新曜社、1998
- サイード、エドワード・W. 著西谷格訳『オリエンタリズム』(上・下) 平凡社1993
- 辛永勝・楊朝景(老屋顔)『台湾レトロ建築案内』、エクスナレッジ、2018
- Stern, Barbara B. Historical and Personal Nostalgia in Advertising Text : The Fin de siècle Effect. *Journal of Advertising* 21 (4), 1992 : 11-22.
- 渡邊義孝「台湾に残る日式建築～旅のノートから」『中国新聞 (セレクト)』2021年1月7日
- 山路勝彦「美人座物語：近代日本のカフェ文化(1)」『関西学院大学社会学部紀要』135, 2020: 21-56.

## 「満洲映画」における中国農村イメージの形成

林楽青

**要旨：**1937年に設立された株式会社満洲映画協会は崩壊の1945年まで千部ぐらいの映画を作った。戦後、これらの映画は姿が消え、「幻の映画」となったが、1990年代ロシアで一部の映画が発掘されたことを機に、「満洲映画」に関する研究は徐々に増えつつある。

「満洲映画」には、当時の「満洲」における社会文化の諸要素が多く取り入れられており、「満洲国」の社会の実態を究明する貴重な映像資料である。とりわけ、「農村」を題材にした映画も多く含まれている。本研究は「満洲映画」における「農村」を題材にした映画に形成された「満洲」農村のイメージと当時、世界各地で制作された中国農村を題材した映画による中国農村のイメージと比較しながら、その相違を明らかにする。

**キーワード：**満洲映画、農村イメージ、比較

### はじめに

日本の植民地は近隣アジアの国々であったが、それは日本帝国の本土の内地とし、朝鮮や台湾を外地としていた。帝国の統治における直接か間接かのような程度の差があり、樺太は内地であり、パラオは委託統治であり、「満洲国」<sup>1</sup>は皇帝が存在していたので、日本帝国の植民地ではなく、外国であっ

---

<sup>1</sup> 1931年日本関東軍は「満洲事変」を起こし、中国東北を占領した。翌年、清朝最後の皇帝溥儀を迎えており、傀儡政権の「満洲国」を建てたが、1945年日本の敗戦とともに崩壊した。

たという言論がある。だが、「満洲」<sup>2</sup>の権力は関東軍が掌握されており、外交や軍事、内務などまで日本の支配を受けていた。ある意味では間接統治の植民地だったといえる。

これについて現在中国では「偽満洲国」<sup>3</sup>と呼び、日本の傀儡政府だったという。日本帝国は「満洲」に対して近代化、日本化を図ったものである。それは植民地政策であり、近代化政策であった。その政策の一環として国策映画会社の株式会社満洲映画協会（以下、「満映」と略称）が作られた。それは南満洲鉄道株式会社<sup>4</sup>（略称、「満鉄」。以下同）、関東軍<sup>5</sup>、「満洲」などが行ったものを統合しながら新しく作ったものであり、当時アジアの代表的な映画製作社であった。

存在期間が僅か8年間である「満映」は劇映画、文化映画とニュース映画など千本近くも製作したが、終戦と同時にその作品の行方が分からなくなった<sup>6</sup>。1990年代旧ソ連崩壊後、モスクワ郊外にあるロシア国立映像資料館に大量の「満映」フィルムが発見・発掘されており、日本の音楽業者はロシアで発掘れた「満映」の作品に関する使用権などを契約し、300本のフィルムをコピーし、日本に持って帰った。これを機に、「満映」に関する研究が徐々に展開している。

当時、製作された百本余りの劇映画は主に「満洲」の農村や都会などを舞台として百姓の家庭や恋愛などを題材にした映画が多く見られる。本研究は

---

2 本論文では「満洲国」を強調する場合、そのまま引用するが、それ以外は「満洲」と略す。

3 「満洲国」が成立した当時、中華民国は反対の立場に立った。終戦後の中華人民共和国は、現代でも歴史書や辞典などでは、日本帝国主義が操った傀儡政権であり、其の傀儡性や反人民性を示すために、「満洲国」を「偽満」「偽満洲国」と称している。

4 日露戦争後、ロシアから割譲した関東州（現、大連）租借権と東清鉄道に関する権力を引き取った。日本政府が1906年に半官半民の特殊会社として南満洲鉄道株式会社を設立した。業務内容は鉄道建設以外に、地方部のもとで大規模な近代的都市計画を進めていた。1945年終戦とともに閉鎖された。

5 日露戦争後に日本政府は関東州と「満鉄」の付属地を守備するため、関東都督府陸軍部を組織した。のち関東都督府を関東庁に改組したと同時に、台湾軍や朝鮮軍と同じ軍たる関東軍として独立した。

6 戦時中に日本国内で上映したニュース映画に満映の撮ったニュース映画が組み込まれたが、そのほかに、『私の鶯』や『開拓地の花嫁』など2、3本だけ日本で発掘された。一方、中国の映画関係部署は「満映」に関する作品がないという声明を何度も出した。

今までの先行研究を踏まえ、現存の農村主題の劇映画を研究対象に、映像人類学的な方法で映画分析を行う<sup>7</sup>。満映作品に描かれた中国農村イメージと、当時日本国内に作られた中国農村に関する映画、アメリカハリウッドの中国農村を題材した映画と比較しながら、その違いを明らかにする。

## 1. 先行研究

満洲映画に関する研究の大部分は日本で行われている。戦後、中国から引き揚げた元「満映」関係者の回想録、自伝や人物伝といった形の著述が多く挙げられる（筈見1951、木村1953、内田1968、岩崎1969、大塚1976、藤原1987、山口1987、山口2004等）。これらの著述は「満洲」での体験談を中心にしたものであり、「満映」について含まれているものの、「満映」の全貌把握には及んでいないと思われた。そこで元社員である坪井与（1984）は、日本国内に現存する資料と元「満映」の社員十二人からの情報に基づき、『満洲映画協会の回想』を編纂した。本書は「満映」創設の背景、関係者の入社ルート、及び一部の作品紹介などを含み、現時点で「満映」に関する最も詳細な資料である。

一方、中国では戦後、「満映」を日本植民化の統治手段として批判され（程季華1963）、長い間タブー視されてきた。1980年代になってから「満映」に関する研究はようやく見られるようになったものの、やはり関係者の回想録に集中している（蘇雲1986、張奕1986、胡昶2005）。しかし、1990年に出版された胡昶の『「満映」一國策電影面面觀』（1990）は「満映」創設前の満鉄の活動から、「満映」の設立経緯、初期活動、発展期、後期製作および「満映」の解体までを取り上げている。そこには「満映」に関わった日本人および中国人スタッフの活動や、「満映」作品の製作状況、公開された映画館、社内機構図など、「満映」に関する基礎情報が整理され、「満映」研究に極めて貴重な資料を提供するものである。

---

<sup>7</sup> 全体としての映画作品（作品の本体）の構造において、作品の具体的な諸相がどのようにたがいに関係しているかを記述することを目的とするものである。したがって、「映画分析」は、具体的なショットが、未来のプロット・ポイントについての観客の知識を制限するのだ、ということを記述するものである。

1990年代の「満映」映像発掘を機に、「満映」に関する研究は大きな転換期を迎えた。日中両国において盛んになった。ロシアで発掘された「満映」フィルムの整理に携わった山口猛（1993）は映画評論家として、「満映」の人物への評論及び「満映」自体を評価した。また、満洲映像を写真集として出版し（山口1995）、「満映」作品の行方調査のプロセスや、「満映」人物の評論や発掘作品の紹介などを行った（山口2000）。また、佐藤（2004）は研究の視野を広げ、「満映」と当時中国の上海映画との関連性を指摘した。さらに、「満映」を中国映画史の一部分とみなし、中日映画交流史の立場から「満映」を捉えた研究も見られるようになった（四方田ら2010）。中国では2000年以降、満洲映画作品に関する研究が徐々に現れた。最初の研究は「満映」に関する日本の研究紹介にとどまっていたが（呉佩軍2009、王艶華2010）、その後、「満映」に関する研究が徐々に増えてきた。そこでもやはり植民地化の手段として、批判的な立場で為された研究が主流であった（孫曉鷗2002、張学智2003、陳威利2003、陳春萍2006）。しかしながら、満洲映画作品はある程度、日本の映画製作経験や文化を取り入れ、一部地域において、中国人観客の映画鑑賞や文化的品位に影響を与えた点や、中国の映画事業に専門的な人材を輩出した点などを、客観的な視点から見直そうとする動きも見られた（李鎮2008）。また、「満映」で活躍した作家群の構成や創作上の特徴を整理し、「満映」脚本家として活動し、監督に転身した王則の映画活動の考察も行われている（蔣蕾2008、2009）。さらに、満映雑誌『満洲映画』を参考資料とし、「満映」の女優や脚本家などの研究（丁珊珊2009）、植民地文化の叙事が満洲映画作品において如何に表現されたのかという点に焦点を当てた研究（降増玉ら2010）によって「満映」研究の視野が拡大している。その他、日本人研究者の古市雅子（2010）が中国で中国語を用いて「満映」に関する膨大な資料を収集し、比較文化史の角度から「満映」作品を上海および台湾の作品と比較しながら、「満映」の全体図を掴んでいる。

上記の研究の大部分は紙媒体に着目し、回想録、自伝、人物伝や映画評論などの映画史に関する研究であり、満洲映画に関する映像分析は少ないと言える。「満映」の啓民映画《虱は怖い》を対象に映像分析を行い、「満洲」の

福祉状況を明らかにした研究（崔吉城2004）、映像イメージの歴史的な分析を通じて「満映」の啓民映画のプロパガンダ性を示した研究（劉文兵2010）、日本の民間で発掘された「満映」の啓民映画《開拓の花嫁》を対象に「満洲」の日本開拓民のジェンダー像を分析した研究（市川2011）などが挙げられるが、いずれも1本ないし数本の作品を対象とした研究であり、満洲映画の全体像を理解することは不可能と言える。本研究は「満映」のいくつかの作品を取り上げ、そこに映された農村イメージと同時期の日本映画とハリウッド映画に反映されたイメージと比較しながら、それぞれの特徴を明らかにする。

## 2. 外国映画における中国農村のイメージ

「満洲」の農村を初めて映画素材として取り上げたのは「満鉄」映画班であった。前章で触れたように、芥川光蔵は「満洲」農村の風景や風俗を撮影し、多くの映画を製作した。そして、「満鉄」配下の地域や日本などで上映することにより、人々のなかに「満洲」農村のイメージを作り上げた。後に設立された「満映」はさらに「満洲」農村作品を増産し、そのイメージを変化させた。他方、同時期に日本や米国においても中国農村を取り上げた映画が製作され、それらは「満映」映画とは異なるイメージを形成した。

### 2.1 外国映画における中国農村のイメージ

1900年製のハリウッド作品《支那における教会の襲撃》は中国農村を舞台に、赤ん坊を抱き穏やかに過ごす西洋婦人を農民軍が殺そうとするシーンを映し出した。その暴力的イメージが中国農村イメージの原形となった<sup>8</sup>。1937年に作られたハリウッド作品《The Good Earth》（日本名：大地）は中国北部の農民生活を描いた物語である。パール・バックの出世作となった小説を映画化した本作品はアカデミー賞を受賞し、日本でも上映されヒットし

---

<sup>8</sup> 二十世紀初頭、米英を始めとする欧米八ヶ国の連合軍が中国を侵略し、農民の「義和団」鎮圧を賛美する作品《支那における教会の襲撃》が製作された。その中で、中国農民は「黄色い大群」であり、「平和」を脅かす「黄禍」であるというイメージが押し出されている。

た<sup>9</sup>。そのストーリーの概要は次の通りである。貧しい農夫の王龍（ポール・ムニ）が豪族黄家女中の阿蘭（ルイーゼ・ライナー）を妻として迎える。2人は努力し良い生活が送れるようになった矢先、干ばつでどん底に突き落とされる。一家は故郷を離れ、別の街で乞食生活をする間、戦乱が起きる。後に、命がけで手に入れた宝石により一家は故郷に戻り大地主となる。農村生活ではイナゴの群れを退治したり、次男が結婚する日に阿蘭が息を引き取ったりするシーンなどが描かれる。

映画の冒頭には山、畑、農舎、家禽、牛車、農具を担いだ人が映し出され、舞台が農村であることが示される。注目すべき点は主人公・王龍の家である。今にも倒れそうな芦屋がフルショットで映し出される（図1）。次にショットが屋内に変わり、崩れた壁、竹柵の窓やドア、がらんとした室内、壊れた茶碗、父親のボロ服などが映し出され、その貧しさが強調される。また、主人公が釜戸に火をくべ、炊事するシーンが映し出される。火打石で草に火を付ける場面がクローズアップされ、中国農村ではいまだ原始的な生活を送っていることが強調される（図2）。物語が進み、干ばつにより農民が大挙して村を離れるシーンがある。レール両側を取り囲む難民の群れがロングショットで映し出される。到着列車に押し合いながらだれ込む人々の群れは、人間というより「動物」を想起させる（図3）。2012年製の馮小剛監督<sup>10</sup>の作品である《1942》にも、干ばつで農民たちが群れを離れて避難するという似たシーンがある。そこには大勢の人々が蟻のように群れを成し、押し合いながら列車に乗り込む場面が映し出される。その撮影セットなどが酷似している点から、本作は《The Good Earth》の翻案とみなすことができる。

続いて、《The Good Earth》には、難民が富豪の家を襲撃し、金品を奪うシーンが描かれる。王一家が都会に流れ込んだ難民生活を象徴する。王一家6人（夫婦、子供3人、父1人）は空地に立てたホームレス小屋で乞食生活

---

<sup>9</sup> 本作品はキネマ旬報昭和12年度外国映画ベスト・テンに選出された（『キネマ旬報ベスト・テン80回全史—1924—2006』キネマ旬報社、2007：25）

<sup>10</sup> 中国の第五代監督の1人。代表作の《我不是潘金蓮》は2016年第64回サンセバスチャン国際映画祭でゴールデン・シェル賞（最優秀作品賞）を受賞。



図1 映画《The Good Earth》における主人公王龍の家の外観—倒れそうな芦屋。



図2 映画《The Good Earth》における主人公王龍は火石で火をつける。フレームの前景に壊れた茶碗がある。



図3 映画《The Good Earth》における難民たちは到着列車に押し寄せながら登る。



図4 映画《The Good Earth》における難民たちは富豪の家を壊し略奪。

を送るが突然、戦乱が勃発し、砲火と銃声、それに脅える住民の阿鼻叫喚が響き渡る。そして、暴徒化した農民が富豪の家を破壊し略奪するシーンが映し出される(図4)。その混乱、殺人、奪い合いの場面が観客に「中国農民は怖い」というイメージを与え、「黄禍」<sup>11</sup>を連想させる。このように、ハリウッド映画は中国農村が貧しく野蛮であるというイメージを観客に植え付け、それは長期に渡りステレオタイプ化された<sup>12</sup>。そのイメージは今日も残

<sup>11</sup> 19世紀半ばから20世紀前半にかけて欧米諸国では東洋黄色人種脅威論(黄禍論)が流行した。一種の人種差別であった。

<sup>12</sup> 劉文兵『映画のなかの上海—表象としての都市、女性、プロパガンダ』2004: 7.

り、ハリウッド映画の影響力の強さが窺える。

## 2.2 日本映画における中国農村のイメージ

《The Good Earth》と同時期に、日本でも中国農村に関する作品が製作された。1936年、日独共同作の《新しき土》ではどのように描かれたのであろうか。本作は同年、日独軍事協定締結を機に製作された映画である<sup>13</sup>。日本側は伊丹万作、ドイツ側はアーノルト・ファンクが監督を務めた。制作中、両者の意見が対立し、結果、日本語版とドイツ語版の2本が製作された。現存する作品はファンク監督版である。物語の概要は次の通りである。ドイツに留学していたエリート青年の輝雄（小杉勇）は、記者であった恋人ゲルダ（ルート・エヴェラー）を連れて日本に帰国する。しかし、輝雄には許嫁の光子（原節子）がおり、光子や義父の巖（早川雪洲）は輝雄を暖かく迎えるにも関わらず、輝雄は西洋文化に浸り、光子に愛情を注ぐどころか、古き慣習として婚約を破棄しようとする。しかし、その態度をゲルダから非難され、輝雄は反省する。光子が絶望の末、花嫁衣装を手に浅間山で身を投げしようとした際、輝雄が光子を救う。ゲルダは輝雄に手紙を残し、ドイツに帰国する。やがて結婚した輝雄と光子は開拓民として「満洲」に渡り、幸せに暮らす。

ラストシーンで山田耕筰が作曲、北原白秋と西條八十が作詞した曲がBGMとして流れる。機械で耕耘するショットに「Mandschurai」の文字が映し出され、「満洲」農村であることが示される。右へのパン<sup>14</sup>で輝雄がトラックを運転する場面が映し出される。次にショットが変わり、着物姿で赤ん坊を抱く光子が大地に立ち、後ろにトラクターが走る。次のショットでは輝雄が運転するトラクターが画面の右から左へ走り、中央には銃を持つ日本兵がいる。トラクターには「KOMATSU」の文字が明瞭に刻印されている（図5）。輝雄がトラックを降りて光子の元へ来て、子供を抱き上げ大地に降ろ

13 佐藤忠男『キネマと砲声―日中映画前史』岩波書店、2004：74。

14 パノラミック・ビュー(Panoramic View)の略語である。カメラを動かさずに首を左右に振るやり方である。右へ振ることを右パン、左振ることを左パンという（西村雄一郎『一人でもできる映画の撮り方』洋泉社、2004：45）



図5 映画《新しき土》におけるトラクターが耕耘する場面。



図6 映画《新しき土》主人公の輝雄が赤ちゃんを満洲の大地に置く場面。



図7 映画《新しき土》主人公の光子が次第に視線を移動する。



図8 映画《新しき土》日本兵士の厳しい顔と銃剣がクローズアップされる。

し、笑顔で「坊主、お前も土の子になれよ」と語りかける（図6）。そして、光子の顔がクローズアップされ、微笑む光子は次第に視線を移動する（図7）。そこには日本兵がおり、銃を持つ日本兵の顔がクローズアップされる。輝雄一家を笑顔で見つめていた日本兵は目線をカメラに向け、その表情が徐々に陰しくなり、顔前に銃剣が映し出される（図8）。本シーンではモンタージュ手法でトラクター、輝雄、光子と子供、日本兵が繰り返しクローズアップされる。

このシーンを通じ、3つのイメージが形成される。第一に、「満洲」がユートピアであるというイメージである。主人公の輝雄はドイツ留学し、西洋文化に馴染む日本人、光子は侍の娘としての勤勉で勇敢な人物の象徴である。2人が日本から遠く離れたことと銃剣は日本軍が移民を守ることを意味

し、そのクローズアップは強調表現である。それが必要であった背景には、当時の「満洲」移民状況がある。本作品が上映された1937年は、関東軍や拓務省が「満洲移民」政策を試験的に実施している最中であった。本政策は1932年に始まり、第2回移民実施の直後に「土龍山事件」が起こった<sup>15</sup>。その事件で日本人に多くの犠牲者が発生し、一時、移民募集は大変であった<sup>16</sup>。しかし、日中戦争勃発直後、日本軍の一時的「勝利」により、「満洲」移民が復活した。そのため、映画のラストシーンに強引とも思われる日本兵を入れ、日本軍（関東軍）が移民の安全を守ることを強調したのだと考えられる。

第三に、「農業近代化」のイメージである。作品にはトラクターで耕耘する映像が繰り返し使用され、トラクターに刻印された「KOMATSU」が強調される。そのトラクターは日本の小松製作所が1931年10月に生産した2 t ガソリン・トラクターである。株式会社小松製作所は1921年に独立し、日本初の鋳鋼、機械（プレスなど）製造メーカーを立ち上げた。1932年、米国のトラクターをモデルに2 t ガソリンエンジン・トラクター（G25）を製作した。1937年、日本は本格的に満蒙移民政策を実施し始めた。しかし、現地で使用されたトラクターは小松製ではなく、外国製トラクターであった<sup>17</sup>。満州開拓計画の杜撰さにより、終戦までに「満洲」で使用された小松製農業用トラクターは7台のみであった<sup>18</sup>。

同時期、日本映画会社の日活が《千里沃土》という映画を製作している。本作品は残されていないが、映画雑誌には「千里沃土」が「満洲」を指すこ

---

15 関東軍は三江省（現黒竜江省）依蘭県土竜山に日本人武装移民を入植させるため、1934年1月、大規模な強制買収を始めた。これに抵抗して現地農民は農民軍を組織し、武装蜂起して日本人移民団を包囲し、警察を武装解除させた。しかし後に関東軍によって鎮圧された。

16 満州移民史研究会『日本帝国主義下の満州移民』龍溪書舎、1976：412-418。

17 『小松製作所五十年の歩み』によれば、「満洲国」は1937年5月、公主嶺の「満鉄」農業試験場でトラクター実働共演会を開催した。日本は小松1社のみが参加し、G25と改良型G40が公表された。加えて、米国キャタピラー社、スウェーデン、ドイツ、イギリス、ソ連など一流企業の代表機種も公開された。小松のトラクターは燃費が悪かったため、「満洲国」は最後に他国のディーゼルエンジン・トラクターを採用したとのこと。

18 『小松製作所五十年の歩み—略史—』株式会社小松製作所、1971：27。

とや、見渡す限り果てしなく広がる畑で多数の日本開拓民が水を引いているショット(図9)や、トラクターを運転しながら農作業を行うショット(図10)が掲載されている。その写真から、「満洲」の大地の広さと近代的な農作業が強調されていることが分かる。さらに、1940年に豊田四郎が監督を務めた《大日向村》は、「満洲」開拓村で20日間、現地日本人をエキストラとして撮影された<sup>19</sup>。本作品は1940年10月に日本で封切され、良い評価が得られず失敗作と捉える者もいたが<sup>20</sup>、その影響で「満洲」開拓移民の志願者が急増し、一定の宣伝効果があったと指摘されている<sup>21</sup>。

### 2.3 満洲映画における「満洲」農村のイメージ

「満洲」農村映画を最初に製作したのは「満鉄」映画班である。1923年に設立し、「満鉄」建設、九・一八事変(満洲事変)、日中戦争を含む戦争などの記録映像に加え、「満洲」の風景や風俗に関する映像も撮影した。その代表作として、「満洲」熱河省<sup>22</sup>を舞台にした《密境熱河》が挙げられる。そこには農地や豊かな農産物などが映り出され、当時の日本人に大きな刺激を与えるとともに、中国農村のイメージを一新したと言える。撮影は氷点下15度以下の真冬に、中心都市の承德を起点に、熱河省中部の主要都市を一周して、承德に戻るというルートで行われた<sup>23</sup>。

作品は熱河省の紹介映像であり、冒頭では面積、人口、民族、特産物などが紹介される。その他、名所旧跡、現地の風俗習慣、広大な草原、豊かな特産物などをナレーションと字幕の両方で紹介している。本作品にはBGMに中国民俗音楽が使用され、始終愉しさが感じられるよう、「満洲」への憧れを抱かせるよう工夫されていると感じられる。当時の日本新聞広告に本作の

19 「埋もれた映画よみがえるー旧満洲開拓農民描く『大日向村』」1984年1月12日朝日新聞(東京版)朝刊13P.

20 “描き切れぬ：東京発声大日向村”朝日新聞(東京1940年10月24日)朝刊5P.

21 佐藤忠男『映画で読み解く「世界の戦争」ー昂揚、反戦から和解への道』ベスト新書、2001：79.

22 1914年中華民国によって作られた熱河特別区がその後熱河省に改名された。1955年まで存在していた。現在の河北省、遼寧省及び内モンゴル自治区の交差地域に相当する。

23 映画ナレーションの台詞による。



図9 映画《千里沃土》における日本開拓民が満洲の農村で働く写真。(出所：『キネマ旬報』昭和12年4月1日号)



図10 映画《千里沃土》における日本開拓民がトラクターで耕耘する写真。(出所：『キネマ旬報』昭和12年4月1日号)



図11 映画《東遊記》における農村の全体像。



図12 映画《東遊記》の主人公の宋が登場する場面。フレームの前景に豚の群れが映っている。

紹介が掲載され、そこに記された諸要素が「満洲」イメージの原形を形成したと考えられる。キネマ旬報によれば、本作は1936年度の映画ベスト・テンに選ばれるほどの人気ぶりであった。本作品は「満洲」移民に一切触れていないが、「満洲」の大地を映した映像が人々に感動を与え、移民意欲をかき立て、凶らずも移民政策の宣伝となったと考えられる。

「満映」は農村や農家を描いた劇映画を26本製作し、それが最多カテゴリーとなった。そのなかにはプロパガンダ、ファミリー、メロドラマ、コメディ、青春映画など各種が存在し、農村の風景、風習、人物像などによって「満洲」農村イメージが形成された。「満映」の処女作《壮志瀾天》は国策映

画と言えるものであり、農村を舞台に農民を主人公にした物語である。それ以降、農村を取り上げた作品が続々と作られたが、現存するのは《東遊記》と《皆大歡喜》の2本のみである。ゆえに、本章においてはその2本を中心に「満洲」農村イメージの分析を試みる。

前者《東遊記》の冒頭では、「満洲」農村の春の風景が映し出され、バックに京劇『小放牛』<sup>24</sup>の口笛というBGMが流れる。まず川の薄氷が流れる様子に焦点が当たり、次に分厚い氷が解ける映像が「満洲」の冬の厳しさを映し出す。その次の映像は、畑を横切る小川や春風に吹かれる木の枝などに切り替わり、春の風景が描かれる。その次は田園風景のロングショットで、フレームの前景に草を食む牛4頭、バック一面の畑には点在する牛や黒豚と思われる家畜と2、3軒の農舎が映る(図11)。映像はモンタージュ手法で畑や丘で草を食む牛、河で泳ぐアヒル、農家の脇を流れる川の淵にいる2頭の子牛などにショットを移し、農村の様子を伝えている。最初の登場人物は主人公の宋である。宋が馬に乗り農道を進む姿がフルショットで映し出される。路上には黒豚やアヒルの群れもいる(図12)。もう1人の登場人物は陳。宋の口笛を聞いて農舎から出て来て、玄関口で宋と言葉を交わす。フルショットのフレームには黒豚の群れも映り込む(図13)。本作にはよく黒豚の群れが映り込んでいる。後に作られた劇映画《迎春花》には豚の頭や豚足などの料理が度々映し出される。「満洲」当時、農村では黒豚が家畜としてよく飼われていた。筆者は中国東北地方の田舎出身であり、子供の頃、年末になると飼っていた黒豚を屠殺し、作られた豚料理が一番のご馳走であったことを思い出す。同時期の日本で製作された《放浪記》(1935)や、植民地の朝鮮で製作された《兵隊さん》にも農村シーンが含まれているが、映っている家畜はニワトリのみである。「満洲」映画には牛、アヒル、黒豚などの家畜が映り込み、「満洲」農村の特徴や自給自足生活が強調されている。

「満洲」農村イメージの形成において、もう1つの重要要素は農舎である。《東遊記》の冒頭では「満洲」農村の農舎の外観がロングショットで映し出される。農舎内部は主人公の陳が初登場するシーンや、自身の住まいから逃

---

<sup>24</sup> 京劇《小放牛》は1941年「満映」によって京劇映画として作られた。

げ出すシーンで見ることができる。陳が初登場するのは台所で食事の支度をしているシーンであり、農舎内の台所の様子がフルショットで映し出される(図14)。

フレームの中央で陳は、床に散らばるトウモロコシの干し茎の上に座り、干し茎を釜戸にくべながら炊事している。トウモロコシは「満洲」中国人の主食であり、日本人にとってのお米のような存在であった<sup>25</sup>。トウモロコシの干し茎は燃料としてよく使用された。釜戸の熱をパイプでオンドルへ取り込み、温まったオンドルがスチーム代わりに部屋を暖め、そのオンドルが「満洲」中国人の寝床にもなった。フレーム前景には農作業用の籠が無造作に積み重ねられている。それらの籠は当時の農作業が主に人力に頼っていることを示すメタファーと捉えることができる。

「満洲」農村の生活「実態」は宋と陳のやり取りに表されている。宋が東京の王から届いた手紙を握りしめ、一緒に日本へ行こうと陳を誘う場面である。

陳：嗯！老王那小子，真出息了！（字幕：成程 王の奴エラク出世しやがったな。）

宋：诶，老陈！我、我已经忍不住了！我无论坐什么去，我也想到东京去！哎，老陈！你也一块去吧！等到了东京，老王那小子既然出息了，一定要帮我们忙的！（字幕：俺もとても我慢できないよう。どんな事をしても日本へ行ってみたいんだ 君も一緒に行かうよ 東京へ行けば王の奴は出世してゐるし どうにかなる）

陳：嗯，可是我的东家，一定不能让我去啊！（字幕：でも俺んとこの旦那はとてもやかましいからな）

宋：不要紧，他要是不同意，你就偷着走！喂！就这么办吧。（字幕：大丈夫だよ ぐずぐず言ったら黙って逃げ出してしまへばいいん

---

<sup>25</sup> 当事者の回想録など多くの資料によれば、当時の「満洲」は「五族協和」と宣伝されていたが、実際には日本人が一等公民、朝鮮人が二等公民、その他の民族は三等公民とした社会階級が存在した。米が食べられるのは日本人と一部の朝鮮人のみで、中国人は米を食べることが許されず、主食はコウリャン飯やビーンズ（トウモロコシのパン）であった。

だから そうしろよ)

陳：嗯，那倒可以。但是盘费钱，怎么办呢？你我的钱，凑到一块，不也是不够吗？（字幕：然し旅費は一体どうするんだ 二人の金を合わせてもとてもたりやしないし……）

宋：这个，请你放心吧！因为老杨曾向我说过，不够的话他可以帮忙。只要有盘费什么都好办！（字幕：それは心配無用だよ 実は楊の奴がいくら都合して呉れるんだ あとはどうにかなるさ）

上記の台詞には、主人公の身分や日本へ行く話が含まれている。陳の台詞にある「<sup>ドンジャア</sup>东家」という言葉は田舎の地主などの雇い主を指す。そこで陳の身



図13 映画《東遊記》の農舎の玄関である。フレームの前景に豚の群れがある。



図14 映画《東遊記》における主人公陳の登場場面。



図15 映画《皆大歡喜》における農村の外景—広い道路および車タイヤの痕跡。



図16 映画《皆大歡喜》における主人公の家。

分は小作人であることが判明する。雇われの身である陳には自由がなく、日本へ行くには「黙って逃げ出す」しかない。それは当時の「満洲」農村に階級制度が明確に存在した事実を映し出す。さらに「二人の金を合わせても、とても足りやしない」ことや、友人の楊が「いくらか都合してくれる」ことが2人の貧しさを示している。このように、本作には「満洲」の封建社会が見てとれる。そして、2人は今の生活に不満を抱き、農村を出ようと試みる。その契機は日本へ逃れた王からの手紙であった。かつて自身と同じように貧しい暮らしをしていた王が日本で「エラク出世し」たことを知り、宋は「我慢できない」という焦燥感を持ち、「日本へ行けば」出世できるという「夢」を抱く。

このように、《東遊記》は「満洲」農村の自然環境を紹介すると同時に、その時代遅れな暮らしぶり、人々の貧困生活への不満、封建社会による束縛、日本への憧れなどを伝えようとしたことが窺える。

#### 2.4 「満洲」農村イメージの変化

1942年製作の《皆大歡喜》は《東遊記》同様、「満洲」農村を描き、その冒頭は《東遊記》と酷似しているものの、異なるイメージを作り上げた。作品ではまず、農村外景が映され、山道がロングショットで映し出される。バックには広い道の向こうから配達員がやって来て、通りかかる人に会釈する姿が見える。次にショットが変わり、フレームの手前から向こうへ走っていく配達員や、平坦な広道を歩く人々が映る。その道路の中央に鮮明なタイヤ痕が映し出されている（図15）。牛、豚、アヒルなどの家畜が映し出された《東遊記》とは対照的である。《東遊記》では人力や畜産力が、《皆大歡喜》では近代化が強調されていると思われる。《皆大歡喜》が映し出す社会形態は以下の登場人物の言動から窺える。最初の登場人物は主人公の息子の呉克安である。克安は玄関を出て配達員と会い、書留の捺印を求められる。そして家にいる母に「印鑑を持って来て」と大声で呼ぶ。庭で家事をする克安の妻と娘がその声を聞き、部屋にいる祖母に大声で伝える。妻から「誰からの書留？」と聞かれた克安は「新京にいる弟（次男の克居）と妹（長女の喜英）から」と答える。本場面から、主人公である祖母の呉張敏は長男の克



図17 映画《皆大歡喜》における農舎の庭。



図18 映画《皆大歡喜》における農舎の内部。



図19 映画《皆大歡喜》でクローズアップされた配達員の笑顔。



図20 映画《皆大歡喜》主人公の初登場の笑顔。

安一家と暮らし、次男と長女とは別居し、家の世帯主を克安が務めていることが読み取れる。長男一家は妻と娘のみの3人、核家族である。長男と長女は結婚し、次男と三男は未婚であるが、家族が共同生活をせず、子は独立している。つまり、本作では核家族の典型が示され、封建社会の家父長制から核家族制へ移り変わる様子を表している<sup>26</sup>。

次に《東遊記》と《皆大歡喜》の経済状態を比較する。作品で見られる3

---

<sup>26</sup> 家父長制は「父権制」とも言い、家族と家族員に対する統率権が男性たる家父長に集中している家族形態（宗介ら1994：156）。核家族は3形態あり、一組の夫婦のみ、一組の夫婦とその子ども、父親または母親とその子どもの家族を指す（祖父江孝男1990：131）。

つの要因から考察する。第一に、金銭である。《東遊記》では、貧しい農村生活から脱出しようとする主人公が旅費を友人から借りる話があり、お金が一銭もなく、食事にも事欠く悲惨な状況が描かれている。他方、《皆大歡喜》では、主人公が長春に住む子供に会いに行く際の旅費、100円を楽に用意できる。「満映」初期時代の中国人俳優の月給が十数円から四十数円程度だった<sup>27</sup>ことから見れば、当時の100円には相当な価値があったと思われる。

第二に、農舎である。《皆大歡喜》では主人公の家の外観、庭、入り口、屋内などの詳細がロングショットで映し出される。外観では立派な石垣と玄関が見られ、家の前に大木2本がそびえ立つ（図16）。次に庭に関するシーンである。石造りの壁、木造のドアや窓、入口両側の雨樋を支える太い木柱、入口前の石段が映し出される（図17）。屋内のシーンではフレーム中央やや左側に食卓と椅子、その奥に箆笥の様な家具と窓、窓の下にはオンドルがあり、その左側に箆笥が見られる（図18）。他方、《東遊記》主人公の家は農舎であり、比べものにならないほどみすばらしい。《皆大歡喜》の主人公の家や屋内の様子は、《東遊記》の主人公が住む農舎よりはるかに立派で豪華である。それらが観客に裕福な農村生活というイメージを与える。両者の差異は、農村の貧しい生活から裕福な生活へとイメージ変更されたことを明瞭に示している。

第三に、登場人物の表情である。《皆大歡喜》の冒頭には木に止まる2羽の鳥が映し出され、楽しそうな鳥の鳴き声がBGMに流れる。その様子を配達員が眺め「ハハ」と笑い、満面の笑みがクローズアップされる（図19）。次に、息子の嫁と孫に呼ばれてドアから顔を出す主人公の表情は明るくて笑顔である（図20）。そして、家族4人がテーブルを囲み、手紙を読むシーンがある。フレームの中央には祖母、その両側に息子と嫁が座り、孫は祖母の脇に立っている。手紙の内容について話を交わす4人の顔に笑みが浮かぶ。《皆大歡喜》では登場人物の笑顔が印象的であり、明るい生活が強調されているが、他方、《東遊記》では登場人物の暗い表情や苦しい生活が印象深く、

---

<sup>27</sup> 胡昶（1999）『満映—国策映の諸相』に中国人俳優の給料についての記述がある（p.100）。中国人社員の回想録にも給料についての証言もある（王啓明1987：18；張奕1986：23）。

両者は対照的と言える。その差異は、農村生活が貧しく苦しいものから、裕福で幸せなものへと変化したことを示している。さらに、「満洲」映画における農村イメージには、もう1つの変化が見られる。

「満映」が1939年に製作した《東遊記》のラストシーンは、日独共同で1936年に製作された《新しき土》のラストシーンと酷似する。まず、前進する無限軌道がクローズアップされ、トラクターの機械音がBGMで流れる(図21)。プラウを牽引するトラクターは《新しき土》では日本製が使用されるが、《東遊記》ではドイツLanz社製のLanz Raupen-bulldogの輸入品が使用される。本機の特徴はヘッドライトが飛び出ている点で、ヘッドライト



図21 映画《東遊記》のラストシーンにおけるトラクター。



図22 映画《東遊記》のラストシーンにおける2台のトラクターの耕耘の場面。



図23 映画《東遊記》のラストシーンに「満人」女性の服装。



図24 映画《東遊記》のラストシーンに出る字幕。

が前方に突き出したトラクターが映し出されている<sup>28</sup>(図22)。次にショットが変わり、トラクターがフル撮影されている。トラクターには陳と宋が乗っている。陳がトラクターを運転し、宋が後方の機械を見張る。そしてまた、初めのシーンが繰り返される。広々とした平原がフルショットで映し出される。フレーム前景には2台のトラクターが耕耘機を引きながら擦れ違う様子が映る(図22)。ズームアウトし、平原が広がる田園風景と4台のトラクターが耕耘する風景が映し出される。このように、度々ショットが変わり、トラクターによる耕耘が繰り返しクローズアップされ、その機械化が強調されている。

次のショットでは麗琴と王の妻が登場する。麗琴は食べ物を入れた籠とやかん、王の妻は風呂敷に包んだ食べ物と酒を持って手を振る(図23)。注目すべき点はその服装である。麗琴はチャイナドレス、王の妻は漢族の服を着用している。そして、食事シーンで、「満人」たちが漢服に麦藁帽子、協和服に協和帽子という「満洲」独特の服装をしていることが映し出される。バックには李香蘭が中国語で歌う「陽春小唄」が流れる。最後のショットでは「満洲」大地の背景から、「彼等の新しい 正しい生活は」「之より」「始まる」という文字が印象的に浮かび上がる(図24)。このように、「満映」はトラクターやプラウなどのリピートにより農作業の「近代化」イメージを刷り込んでいる。そして、中国を表すため、中国独特の歌や民族服などをコードとして使用し、農村の中国人のイメージを形成している。さらに、農

<sup>28</sup> Lanz社のウェブサイトと同様のトラクターが掲載されている ([http://de.wikipedia.org/wiki/Bild:Lanzraupe\\_D7567\\_15.6.85.JPG](http://de.wikipedia.org/wiki/Bild:Lanzraupe_D7567_15.6.85.JPG))。当時の「満洲」の絵葉書に描かれるトラクターも同機種である。

作業を主宰するのは日本人でなく、「満洲」の中国人であるというイメージを形成している。

## 結論

ハリウッド映画は中国農村に、「貧困、暴力、野蛮、黄色人種、略奪」など、いわゆる「黄禍」というイメージをステレオタイプ化した。しかし、「満鉄」の記録映画は「広大な沃野、豊かな特産物」など魅力的なイメージをアピールした。それが日本国民に良い影響を与え、図らずも移民政策の宣伝となった。同時期、日本国内では日本人、日本兵、日本機器などをコードとして使用した映像を通じ、「満洲」農村に日本的で近代的というイメージを人々に刷り込んだ。そちらは満洲移民政策を後押しするため、意識的に作られた国策映画と言える。他方、「満映」は「満洲」農村のイメージを貧しく苦しいものから、裕福かつ幸せなイメージに変えようとしたことが窺える。さらに、日本で作られた日本的イメージを払拭し、中国的あるいは満洲的な農舎、服装、歌、人々の笑顔などの要素を取り込み、「満人」の農村として、その「現地化」と「近代化」のイメージを形成した。

## 参考文献

- 内田吐夢『映画監督五十年』三一書房、1968  
岩崎昶『岸根寛一』岸根寛一伝刊行会、1969  
大塚有章『新版未完の旅路1－6』三一書房、1976  
木村荘十二『新中国』東峰書房、1953  
胡昶・古泉著横地剛・間ふさ子訳『満映－国策映画の諸相』パンドラ、1999  
佐藤忠男『キネマと砲聲－日中映画前史』岩波書房、2004  
近藤伊与吉「満洲映画生立ち記」『文藝』8月号、1942  
崔吉城「満洲映画“虱はこわい”考」『アジア社会文化研究』(6)、2005  
坪井与「満洲映画協会の回想」『映画史研究19号』、1984  
『満洲映画協会案内』満洲映画協会株式会社、1942  
山口猛『満洲の記録－満映フィルムに映された満洲』集英社、1995

山口淑子『「李香蘭」を生きて』日本経済新聞社、2004

四方田犬彦、晏妮『ポスト満洲映画論—日中映画往還』人文書院、2001

## 複数の首里城観 離島の戸惑いと大龍柱への眼差しを中心に

松田良孝

首里城は、2019年10月31日に火災が発生し、正殿など主要施設が焼失するに至った。焼失した首里城正殿は、沖縄本土復帰20周年の1992年に復元されたものである。その一帯を首里城公園（国営沖縄記念公園首里城地区）として整備している内閣府は、首里城を「戦災によって失われた沖縄のシンボリック的存在」と位置付けている。このシンボリック性を証明するように、沖縄県に寄せられた首里城火災復旧・復興支援寄付金は2021年1月29日時点で総額51億5800万円を超えた。ただ、その再建をめぐる議論では「首里王府が薩摩の権力代行者として琉球民の上に君臨した」「（宮古、八重山の）農民たちは二重三重に搾取され、苦しんでいた。その象徴が首里城である」との視点を加えるよう求める論者もいる（八重：2020）。焼失から1年余りを経た今、沖縄の人たちは首里城に何を見ようとしているのか。その「首里城観」を探るため、筆者は2020年12月、沖縄出身で在住者でもある人たちにインタビューを行い、沖縄県内で開かれた討論会や沖縄県内で発行されている新聞の論調などを参照しながらインタビューたちの言葉の意味を探った。

質問内容は主に、首里城を沖縄の象徴・アイデンティティとする考え方や、首里城再建をめぐる論点のひとつとなっている大龍柱の向きに関する見解である。インタビューの回答のうち、本稿ではとりわけ、首里城のシンボリック性に疑問を投げかけ、場合によっては批判的に捉えようとする見解に着目した。その際、首里城のある沖縄本島とは地理的に隔たった離島の人たちの言葉に耳を傾けると、首里城の焼失は大きなショックを与えただけでなく、首里城との距離感を再考するきっかけとなっていた。「私」や「私の地

域」と首里城の関係は決して自明のものではなく、火災を契機として多様な首里城観を表出させることになっていたのである。

大龍柱の向きについてはどうか。相対か、正面向きかをめぐって首里城の専門家が取り組んでいる検討とは別に、専門領域の枠を超えて、あるいは専門家か素人かを問わずに参画可能な開かれた議論の場に対するニーズがみられた。2019年10月の大火を機に表出された複数の首里城観を回収する場の必要性を示唆するものである。

## I 離島の首里城観

### (1) 怨念—否定的な見解

Aさん（先島地方出身・在住、70代）は首里城の存在に対して否定的な視線を向ける。琉球王朝や首里城の歴史や文化に「輝かしいものは一個もない」と言い切り、「それ（琉球王朝と首里城）を支えたのは百姓。その人たちの金と労力で建てた文化。その苦労はまったく出てこないで、華やかなありさまだけを大々的に宣伝するのはいかがなものか」と疑問を隠さない。八重（2020）と親和性のある見解である。

Aさんは「（1609年の薩摩侵攻後）王府（琉球王朝）は生き延びるためになんでもやっている。王様や役人はどんなに生き延びるかばかり考えていた」「王府は、薩摩の武力を盾に沖縄を治めていた。うそも方便。二枚舌だ。『薩摩がこうに言うのだから、みなさんお願いします』という方法」「王府は力がなかった。薩摩を笠に着て、琉球の民をいじめ、薩摩にいい顔をしている」と手厳しい。

首里城や琉球王朝に関連して、「怨念がたくさんある」とも指摘する。与那国島に残る人減らしの伝説「久部良バリ」と「トウング・ダ」を挙げ、「実際にこういうことがあったわけではないが、伝説で残したのではないか、それくらい苦しかったということ」と解釈した。

### (2) 引き出された葛藤

Aさん同様に先島地方出身だが、別の島で生まれ、さらに別の島在住のBさん（50代）は、首里城が焼失した時の衝撃を『『なんともない』（首里城

なんて大したものじゃない) と思っていたものが、ちょっとぼっかり(心に穴が開いたような感覚) というものがあつた。大きな敵を失つたような」と表現した。また、「(首里城のことで) 周りが騒ぐと、冷めていく自分がいる」とも語っている。象徴やアイデンティティという位置づけには「一概に言えない。『よくわからない』というのが正直な気持ち」と述べる。

Bさんは島の中学校を卒業すると、那覇市内の県立高校に進学した。那覇市内でのアパート探しでは、離島出身という理由で2軒の不動産屋から仲介を断られ、那覇市内ですでに長く生活している同郷の親戚名義でようやく部屋を借りることができたという。こうした経験を経て、Bさんは「自分の島を意識し始めた。でも、『自分の島を捨てないと上に上がれない』『島を捨てたい』と思った」という。

その後、沖縄県内の大学に進学し、先島地方の伝統芸能を実演・調査するサークルに参加した。この活動で触れた伝統芸能のなかには、琉球王朝による理不尽な抑圧を題材にしたものもあり、「自分があこがれていた沖縄の中心の文化が、犠牲で成り立っていた」「(先島の人は) 首里からの役人に都合よく使われて、捨てられただけ」と考えるようになる。奄美出身の後輩からは「奄美は、薩摩からも琉球からも搾取された。奄美は沖縄よりもっと悲惨。その歴史を知っているのか」と食って掛かれ、「自分が信じていた『被害者』『かわいそうな沖縄』『それでも頑張っていた沖縄』というものが、ぐらついた」。

さらに、首里城正殿が焼失した翌日、インドの音楽家を迎えての交流イベントが石垣島で開かれたこともBさんの首里城観に影響を与えたようだ。この音楽家はインパールを有するインド・マニプール州の代表的な音楽家、マヤラムバム・マンガナ氏である。マンガナ氏は石垣入りする前に焼失前の首里城を参観しており、その焼失は「マンガナ氏にとって自分たちが王宮を失ったことと重なるようだった。インパールはもともと独立国で、インドに飲み込まれたという歴史がある。それで沖縄にシンパシーを持っていた。歴史的な経緯から沖縄とインパールに同じようなものを見出している。沖縄に共感を持っていた」というのである。交流会ではマンガナ氏から「大変でしたね」とお悔やみのような言葉もあり、ふだんは琉球王

朝の抑圧性を批判している石垣島の郷土史家が「こんな時だから頑張らないといけないよな」とあいさつする一幕もあった。Bさんの首里城観は、自身の見解の如何を問わず、インドの音楽家から刺激を受けることで揺らいだ。

これら一連の経験を解きほぐすことによって初めて、象徴やアイデンティティという位置づけをどう評価すべきか「よくわからない」というBさんの心情を理解するヒントが現れてくるように思える。

### (3) 沖縄本島との感覚の相違

Cさん（南大東村出身・在住、40代）は「(首里城のことは) 他人事っていうか、他県のことっていう(考え方だ)」と、南大東島の雰囲気語る。

南大東島は、島内に高校がないことから、中学校卒業後はほとんどが沖縄本島の高校へ進学する。島内在住者であっても、那覇市内に部屋を借りたり、自宅を持ったりするケースも珍しくない。親が仕事で毎月那覇に出て、子どもは沖縄本島の学校に通うのであれば、2拠点生活をするのは島内では不合理とは考えられていない。

それでも、首里城は他人事で「他県のこと」という受け止めがある。

Cさんは、沖縄本島の人たちはもともと島の人と「感覚が違う」と話す。たとえば、高等弁務官のキャラウェイはその強権性で語られることが多く、1961年2月から1964年7月までの在任中、「最も強硬な直接統治が行われ」、「たとえば、立法院で可決された法案を次々に闇にほうむる」などしたことから、「キャラウェイ旋風」なる言葉も残る（琉球新報社：1998 134）。このキャラウェイについて、Cさんはしかし、「島ではすごいヒーロー。銅像が立ってます」と話す。製糖会社と農業生産者の間に生じた土地所有をめぐる問題の解決で、キャラウェイが積極的な役割を果たしたというもので、「沖縄本島の人『キャラウェイは独裁者』という反応をするが、南大東では土地所有権の問題を解決した人として慕われている」というのだ。

文化的な側面にしても、八丈島からの開拓者の影響が大きい。Cさんは島内の子どもたちに話をする場合には、南大東の祭事に登場するみこしなどは、沖縄全体から見ると特異なスタイルであることを伝え、高校進学後に沖縄本島の文化に触れたときに戸惑わないように注意を呼び掛けているとい

う。

#### (4) 新聞メディアにみる首里城観のばらつき

沖縄県内で首里城の火災がどのように受け止められているのかについて、全体的な傾向をつかむため、県内の新聞メディアの報道をチェックした。その結果、いわゆる「県紙」の2紙と、先島地方の宮古・八重山の新聞との間には、報道量において14倍の開きがあった。

調査の方法は、火災の発生から丸1年となる2020年10月31日の前後15日間について首里城関連の報道の量を調べるというものである。調査の対象とした新聞はいずれも日刊の一般紙で、那覇市に本社を置く『沖縄タイムス』と『琉球新報』、宮古島市に本社を置く『宮古毎日新聞』、それに石垣市に本社を置く『八重山毎日新聞』の計4紙である。この4紙はページ建てが一樣ではなく、同じ新聞であっても日によってページ建てに増減があるため、調査では一般に「1面」と呼ばれる1ページ目と、「社会面」と呼ばれる2ページ分を対象とした。

その結果、首里城関連の記事は『沖縄タイムス』55本、『琉球新報』45本、『宮古毎日新聞』1本、『八重山毎日新聞』6本となった。県紙が計100本の記事を掲載したのとは対照的に、先島の2紙は計7本にとどまり、14倍以上の開きがあった。先島の2紙は、調査対象以外のページで、再建に向けた寄付の動きや外部のメディアが配信した首里城関連の記事が計5本あった。これを加えても掲載本数は12本にとどまり、県紙2紙との開きは依然として大きい。

記事の扱いでも歴然とした違いがみられた。県紙が首里城火災を1面トップにしたのは、『琉球新報』が10月31日付と11月1日付、『沖縄タイムス』が10月30日付と31日付、11月1日付の計5日間。また、社会面のうち、広告欄を除いた記事掲載部分に占める首里城火災関連記事の割合は、『琉球新報』は10月31日付が68.2%、11月1日付が56.0%、『沖縄タイムス』は10月31日付が70.8%、11月1日付が70.2%となり、1周年当日とその翌日は紙面の半分以上、時には7割を割いて首里城火災について伝えていたことが分かる。一方の先島2紙は、集中的な報道は行っていない。調査対象の時期

は、先島地区を視察した県議会議員団で新型コロナウイルスのクラスターが発生していたほか、石垣島では陸上自衛隊配備に関する動きがあり、首里城火災に優先する形で報じていた。首里城火災を「私たちのニュース」ととらえる度合いは、県紙2紙は鮮明であり、先島の2紙は薄い。マスメディアの報道姿勢が、受け取り手の関心をそのまま反映しているとみることはいないものの、先島の2紙は結果的に、首里城のことは県紙2紙ほどに手厚く報じる必要はないという姿勢を示したといえる。

## II 大龍柱の向き

首里城正殿前には龍を模した一對の彫刻「大龍柱」が置かれている。1992年の修復では、龍が互いに向かい合う形で設置されたが、2体の龍がともに正面を向くスタイルを真正なものとする意見は根強い。今回の再建でも相対か正面かをめぐる議論が再燃しており、2020年11月14日の琉球民族独立総合研究学会のシンポジウムで後田多敦氏（神奈川大准教授）が1877年の撮影とみられる写真に基づき大龍柱が正面を向いていたと発表した。8日後の11月20日に開かれた「首里城再興に関する公開討論会」では大龍柱の問題はメインテーマのひとつとなり、正面向きを支持する論者に対してフロアから拍手が送られる場面もあった。ただ、6人のシンポジストのひとり、友知政樹氏（沖縄国際大学教授）は「大切なのは、正しい向きに関する議論、これは喧々諤々でいいと思うが、これがウチナンチュの対立のものになっては大龍柱も悲しむ。この辺は気を付けながら、今後も公開の所で、メディアのなかで、いろんなところで議論されるべきだと思う」と述べ、大龍柱の向きをめぐる議論が沖縄県民や県出身者らの対立を導くことがないように注意を促していた。

狩俣恵一氏（沖縄国際大学名誉教授）も対立の回避を訴えている。『琉球新報』への投稿で、狩俣氏は「大龍柱の向きは時代によって異なると考えてよい」と述べたうえで、正面か相対かの決定では「技能者集団が大龍柱の向きを判断することを希望する」と訴え、「議論の勝ち負けではなく、共感する首里城であってほしいと願うからである」と結ぶ（狩俣：2021）。正面か相対かで決着を付けることにこだわるあまり、首里城再建が対立の火種に

なってしまうことを危惧する意見である。

県内の美術批評家も「より本質的な問題は、いかに将来に向けて文化財を継承していくかの反省と再挑戦のほうであるのではないか。龍柱の向きは後でも変更できるだろうが、文化財は損失してしまえば、二度と戻ることはない。この、憂鬱なウイルス禍において我々が考えなければならないことは、将来の社会に対して、何を遺して伝えるべきかという、長期的な展望であるはずだ」(土屋：2020)と批判する。

### (1) 「こだわり」を尊重

大龍柱の向きをめぐる議論について、Bさんは「大事だと思う」と語る。Bさんは先島の伝統芸能を実演・調査するサークルの活動を通じて、伝統芸能が原型とは異なる形で伝承されているケースや、真正さをめぐって議論になるケースを目の当たりにしてきたが、「芸能は生きている。進化をやめるとそれで終わる。神様を楽しませ、みんなを楽しませるものだから、それでいいのではないか」という長老の言葉に触れ、伝統が変化することを肯定的に受け入れる態度も身に付けている。こうした点からBさんは「龍柱も、横向きも前向きも両方あったんだと思う。どれが正しいというのはない。議論をして、それなりの意義を見いだすことだ」と述べ、大龍柱の向きをめぐる議論の展開やその帰着点に関心を寄せている。また、「人によってはどうでもいいことかもしれないが、どうでもいいことにこだわる人がいてほしい」とも述べ、大龍柱の議論を支える探究心に肯定的な立場を取る。

### (2) 専門外・素人からの参画

琉球王朝の第一尚氏に連なる家系だというDさん(那覇出身・在住、50代)は「専門家が意見を出し合い、十分調べて決めてほしい」と述べる一方、「琉球王朝では、大和(日本本土)から客が来た場合には接待を日本風にし、中国から来る場合には中国風にしていたそう。狛犬(「龍」の意)も、あっちを向いたり、こっちを向いたりということはあるのかなと思う」とおおらかに解釈してみせた。Dさん自身は専門家ではなく、専門家に判断をゆだねる立場だが、やはり首里城の専門家ではなく、文化人類学・民俗学

を専門領域とする狩俣氏が、大龍柱の相對説を「推論の域を出ない」とみなし、「14～17世紀の大龍柱の向きについては分からない」（狩俣：2021）と述べている点は興味深い。加えて言えば、後田多氏は「首里城再興に関する公開討論会」において、1877年撮影とみられる写真に関連して、「首里城研究は相当進んでいて、外にいる人間が研究しても新しい成果は出てこないだろうと思っていたんです」と述べている。それが今になって発見された理由として、後田多氏は、1877年という時期が「ちょうど琉球処分の中」だった点に着目し、「日本側の視点で資料を集めたり作業したりすることで、見落としたのではないかと指摘した。接收する側ではなく、接收された側の視点で琉球処分を読み解くことの必要性を強調したものだが、期せずして、プロパーの首里城研究者に対して、これまでの研究を読み直す意義を指摘することになった。後田多氏自身の言葉によれば、後田多氏は、琉球処分や琉球の祭祀の研究者である。首里城に対しては沖繩神社の研究に関連して、「首里城の周辺から」アプローチしており、首里城専門家ではないと自認している。

首里城火災を機に、大龍柱の向きをめぐる議論において専門家と非専門家の垣根が下がったと即断することはできないが、狩俣（2021）が「勝ち負け」ではなく「共感」を求めるのは、専門家による甲論乙駁は是とするものの、その域にとらわれない開かれた議論を求めたものと言えるだろう。その意味で、Dさんの素朴な解釈も大龍柱の向きをめぐる議論に参画することが可能となる。開かれた議論を求める声は次に紹介するEさんのような言葉によっても語られている。

### (3) 開かれた議論への二一ズ

Eさん（宜野湾市出身・那覇在住、40代）は「（大龍柱の向きは）どうでもいいと思っている」と話す。首里城のことは、「沖繩出身者」という立場からすれば「地元のもの」となるが、宜野湾出身者という立場からは「地元のもの」という感覚はなく、「沖繩の象徴」と言われても「ピタッと来ない」という。大学で学ぶために関東地方で暮らした経験と比較して、沖繩は「時間の流れ。ゆっくりしている部分がある。満員電車もないし、ほんの少し車

を走らせれば、自然を感じられる。地域の行事が身近にあったり」といった特性があり、そこに沖縄のアイデンティティや象徴を見る。「首里城を沖縄のアイデンティティや象徴とみる意見は否定しない。ぼくはそうじゃなかった」というのだ。

このEさんでも、火災には衝撃を受けた。起床して外を見ると、首里のほうで空が赤くなっており、テレビのニュースで流れる火災の映像に「一言で言うと、もうただただショックでした。現実味がない。ドラマとか映画のような気持ち」と振り返る。しかし、再建の在り方となると、大龍柱の向きなどへの焦点化には消極的だ。「これから（首里城に）かかわる人がしっかり入り込んで（いったほうがいい）。（自身はこれまで首里城について）考える機会がなかった。沖縄に生まれたことや、沖縄の歴史とかをもう一度考えるきっかけにするための議論をしっかりとやったほうがいい」という発言は、火災をきっかけに首里城に関心を向けるようになった人や、より若い世代を巻き込む形で再建論議を行うべきだとの期待を示している。

## まとめ

屋嘉（2020）は「再建をめぐる議論は、まず私たちは何のために再建するのかという意思を明確にし、確認することから始めなければならない。公的資金を、たとえば児童の貧困問題解決のためではなく「遺産」の再建に費やすことの意義、すなわち、再建によって何が得られるのかを明確にしなければならない」と指摘している。これは単にお金の使い道をよく考えるべきだと主張しているわけではないはずだ。象徴やアイデンティティという位置づけに対して「一概に言えない。『よくわからない』というのが正直な気持ち」と述べるBさんの複雑な心境を解きほぐすべく努め、Aさんが抱いているような琉球王朝に対する反発に耳を傾け、Eさんの「沖縄の歴史とかをもう一度考えるきっかけにするための議論をしっかりとやったほうがいい」という要望に寄り添うことであろう。

筆者は石垣島で23年間生活した経験があるが、石垣島から沖縄本島へ行く場合に「沖縄へ行く」と表現されることは石垣島では常識である。石垣島自体が沖縄の一部であるにもかかわらず、「沖縄へ行く」と表現する。そし

て、その石垣島と同じ八重山地方に属する与那国島の人たちが飛行機や船で石垣島に向かう場合、「八重山へ行く」と表現することがある。石垣島の人たちは、沖縄に属していながら、沖縄を他者として扱い、与那国の人たちは八重山の一部でありながら、八重山を他者として扱うことがあるのだ。Bさんが、首里城を象徴やアイデンティティとみなすことができるかという点について「一概に言えない。『よくわからない』というのが正直な気持ち」と述べたのは、「首里城は沖縄を代表する建物である」と表現する場合、その「沖縄」は、自らにとって他者であって他者ではない存在だからだと考えられる。今回の調査において、インタビューーに首里城火災の第一報を見聞きした時のことをうかがうと、おしなべて大きな衝撃を受けていた。今回のインタビューは、火災から1年余りが経過したタイミングで行った。一種のショック状態から脱した時期において、首里城と「私」の距離感に戸惑い、否定や葛藤、はっきりとした他者化などが語られることになった。

首里城を相対化する見解は、沖縄において公に語られることは少ない。『沖縄タイムス』は2020年9～10月、「首里城再建を考える」と銘打った全11回の連載企画を文化面で行い、10人の有識者がそれぞれの専門領域から首里城に関する論考を寄せている。このなかで、首里城や琉球王朝の抑圧性を明確に指摘したのは八重（2020）のみだった。本稿で取り上げたインタビューーたちの言葉は、首里城と「私」の間に横たわる距離感をさまざまに語り、今後復興される首里城においてはこうした多様性が反映されることを是としていた。それはすなわち、多様な首里城観を網羅的に回収できる場の乏しさを示しているのではないか。「開かれた議論」は、大龍柱の向きをめぐる専門家の論議と対置され、多様な首里城観を吸収する場となるかもしれない。（2021年1月31日）

## 参考文献

- 浅田晴久「インパールの過去・現在・未来—南アジアと東南アジアのはざま—」（『E-journal GEO』、Vol. 14（2）、2019：296-303）
- 池田慎太郎「日米琉特殊関係の政治経済史—米統治下沖縄における「親米派」をめぐる—」『名古屋大学法政論集』260、2015：75-98

- 池間栄三「与那国の歴史」第7版（池間苗、与那国町）1999
- 狩俣恵一「大龍柱の向き 技能者の判断重視を」（2021年1月26日付「琉球新報」8面）
- 進尚子「複数のオキナワ・アイデンティティ：沖縄県南大東島の事例」『沖縄文化研究』44、2017：211-241
- 高良倉吉「首里城正殿に関する建築年譜」『沖縄県立博物館紀要』14、1988：23-30
- 土屋誠一「年末回顧2020<美術>」（2020年12月29日付「沖縄タイムス」11面）
- 中野育男「米国統治下沖縄の自治と神話」『専修商学論集』107、2018：83-102
- 八重洋一郎「農民を搾取 王府の象徴 急がず複雑な歴史 直視を」（連載企画「首里城再建を考える」10、2020年10月27日付「沖縄タイムス」19面）
- 屋嘉宗彦「将来を展望する礎石に県民主導・参加の体制を」（連載企画「首里城再建を考える」11、2020年10月28日付「沖縄タイムス」19面）
- 米地文夫「山の名に地政学はなじまない——地名による侵略：『日本風景論』から『大地の子』まで——」『季刊地理学』48、1996：188-191
- 琉球新報社編『沖縄コンパクト事典』琉球新報社、1998、那覇市

## 新聞

『沖縄タイムス』

『琉球新報』

『宮古毎日新聞』

『八重山毎日新聞』

## 映画『男はつらいよ』にみる日本文化

－「寅さん」と「マドンナ」との恋を中心に－

王欽

**要旨：**国民的映画『男はつらいよ』シリーズは、日本全国をテキヤ稼業で渡り歩く車寅次郎（通称「寅さん」）と、彼の生まれ故郷「葛飾柴又」を主な舞台とした人情喜劇である。1969年に映画第一作目の大ヒットから27年間で48本もの作品が作り続けられ、ギネスブックにも載り、日本のみならず世界でも稀な長寿映画である。主人公の望郷―恋―旅というワンパターンの物語が、これだけ長い間、人気を誇る映画シリーズとなったのは、形式的かつ精神的な魅力を備えているからだと考えられる。

特に「寅さん」と「マドンナ」との恋物語は、日本の文化・文芸の表現の形式的構造や精神的型によるものではないかと思われる。つまり日本人の「叶わぬ恋」の伝統を色濃く受け継いでおり、「失恋の美学」が貫かれている。恋は広く普遍的であろうが、彼らの恋には、愛情の表現パターンがある。それはいずれも成就できない結末となる。典型的な「日本男児」としての寅次郎は、「忍ぶ恋」の実践者であり、「プラトニック・ラブ」の求道者でもあり、愛情表現になると、不器用で自分の気持ちを明確に表現できないのである。恋の成就が結婚生活という世俗的なこととは逆に、理想的な愛の継続を意味する表現ではないだろうか。

本論では映像人類学の視点から、この映画の魅力及び「寅さん」式愛情表現を明らかにしてみたい。

**キーワード：**「寅さん」シリーズ、日本文化、恋、愛情表現

## はじめに

国民的映画『男はつらいよ』シリーズは、日本だけではなく、国際的にも広く人気を博した。米紙ニューヨーク・タイムズは俳優、渥美清の死去を報じ、「日本は、寅さんの死と同時に昔流の生き方が失われたことを国を挙げて悲しんでいる」<sup>1</sup>と伝えた。フランスの有力紙ルモンドは、「下町の英雄、寅さん逝く」<sup>2</sup>と題した渥美清の評伝を、日本人俳優としては異例の扱いで掲載した。国民栄誉賞を受賞した渥美清は、その一生を映画「寅さん」に賭け、「永遠なる寅次郎」と一体化し、大衆の心に深く入り込んだ。

映画の舞台である東京の葛飾柴又に、「寅さん」記念館や「フーテンの寅さん」の銅像まで作られるほど、本映画は幅広く民衆に影響力を与えたものであった。

本映画シリーズは、主人公・車寅次郎の望郷一恋一旅というワンパターンの物語である。しかし、なぜ「マンネリズム」の人情話が、日本のお盆や正月に無くてはならない風物詩となったのか。2019年12月に「寅さん」シリーズ50周年を迎える記念作『お帰り 寅さん』が、スクリーンに蘇ったことをきっかけに、筆者は本映画の魅力を再発見しようと思う。

監督の山田洋次は、劇的変化を遂げる日本社会を、長期にわたり記録した唯一の映画「寅さん」シリーズが急速に変化する時代の中で、変わらない伝統的なものの重要性を訴えている。「柴又の風景も人間関係も、それを変えないのは、基本コンセプトである。日本人が長い間、大事に育ててきた暮らしのモデルがこの映画にある」<sup>3</sup>と述べ、映画評論家の佐藤忠男も、本映画は「何かの伝統の結晶なのであり、あえて言えば伝統そのものなのである」<sup>4</sup>と指摘した。従って、映画に出てきた伝統性、登場人物の行動やセリフ、対人関係などは、日本文化を反映させていると筆者は考える。

今まで本映画の研究は日・中において見られるが、映画評論や対談など、

---

1 刊行委員会編「私たちの寅さん」『私たちの寅さん』シーアンドシー出版、1996：186。

2 上掲同。

3 松竹株式会社（編）『男はつらいよ パーフェクト・ガイド』NHK出版、2005：27。

4 佐藤忠男『みんなの寅さん「男はつらいよ」の世界』朝日新聞社、1996：291。

作品紹介に留まっている。映画には様々な文化要素が含まれており、作られた国である日本の社会状況、国民性や価値観などが深く刻み込まれている。日本では、井上（1993）は詳細なデータをもとに、寅次郎の家族、恋、人生を考察した。佐藤（1996）は、比較映画論に基づいて日本映画とアメリカ映画を比較し、「寅さん」シリーズにおける日本文化の独自性を論じていた。濱口・金児（2005）は社会心理学の視点から、「寅さん」の中に映された日本人のパーソナリティを明らかにした。

中国側では、主に「寅さん」にみる日本人の美意識、幸福観、恋愛観（熊沢民1997、冀美玲2005、路秀丽2009）など多様なアプローチはあるが、映画全体を「望郷」、「恋」、「旅」という三つの大きな文化要素に分け、恋を中心に「寅さん」式愛情表現を検証した研究がまだ見当たらない。

本論では、日本の時代背景も視野に入れながら、この映画から見られた文化の魅力を探っていこうとする。まず、映画の中心的な文化要素の一つである「恋」に絞り、「寅さん」と「マドンナ」との恋をいくつかのパターンに分類する。「寅さん」をはじめとする登場人物のセリフを手がかりとして、「寅さん」式愛情表現を考察する。

## 1. 「寅さん」シリーズの魅力

映画が一般に人々にとっての「夢」や「理想」を描いている一定の形での代理満足と言われ、「日常」と「非日常」の対立する意識構造がある。本映画では「旅」が常に主要な話題になる。「旅」は日常生活からの一時的逃避であり精神の自由として放浪を夢見、「非日常」的なこととされる。それを「寅さん」に投影されている。つまり我々は旅を憧憬し続けながら、現代社会を生き抜かねばならないのである。

「寅さん」シリーズは、日本文芸伝統における物語の形式をうまく生かした上に、ある意味では、寅次郎は日本人の「理想像」として、精神的癒し機能も備えている。即ち、形式的かつ精神的な魅力を備えているから、人々は長い間、この映画を飽きることなく見続けてきたように思われる。

## 1.1 形式的な魅力

### 1) 貴種流離譚

まず、「このシリーズは貴種流離譚という、世界中の神話や説話に共通の、だからこそ安定していること磐石の如き物語形式に基づいて作られている。」<sup>5</sup>と井上(1993)が指摘したように、日本における物語形式の一つとしての「貴種流離譚」<sup>6</sup>が、「寅さん」の物語に内蔵している。

日本では、『古事記』における日本武尊の東征、スサノオの高天原追放、『源氏物語』の光源氏の須磨配流、義経伝説における源義経の苦難の流浪などが貴種流離譚の典型であるが、水戸黄門や宮本武蔵もそのバリエーションである。

「寅さん」の物語はこの貴種流離譚の裏返しである。ごく普通の家に生まれた寅次郎が、テキヤ稼業で故郷を離れて流浪し、旅先で出会った不幸な女性たちを助けるために献身的に尽くす。山田は「読書と旅と映画」で「車寅次郎こそは漂泊の旅人。しがない旅鳥である。風の吹くまま気の向くまま、四角いトランク一つ片手にさげて日本中をぶらぶら旅する姿に、ぼくは少年時代に読みふけた諸国漫遊の豪傑の姿を重ねているのかもしれない」<sup>7</sup>と述べている。

寅さんは「貴種」とは言えないが、自分の悲しみや苦しみをひたすら胸に秘め、不幸な女性たちに愛と希望を与え、心の安らぎをもたらし、精神的に立ち直らせてからまた一人旅に出る。こんな粹な生き方をしている寅さんは、「庶民の英雄」とも言えるのだろう。

### 2) 道中記

さらに、井上(1993)は「このシリーズは道中記あるいは道行きの形式を内蔵している。道中記や道行きもまた、古い時代から使い込まれてきた、人類にとっては基本的とも言うべき物語形式である」<sup>8</sup>と述べている。

5 井上ひさし(監修)『寅さん大全』筑摩書房、1993:2.

6 貴種流離譚:民俗学者の折口信夫が提唱した説話類型の一つ。貴い家柄の英雄が本郷を離れて流浪し、動物や女性の助けなどで苦難を克服して栄誉を取り戻す物語。

7 「読書と旅と映画」朝日新聞、1995年6月21日

8 前掲書。井上(1993):3.

日本の古典「道中記」<sup>9</sup>の代表的なものに、元禄文化に活動した俳人松尾芭蕉による最後の紀行文集『奥の細道』がある。芭蕉の著作中で最も著名で「月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也…」という序文から始まる。この紀行文の中で芭蕉は江戸の芭蕉庵から旅立ち、岐阜の大垣まで25ヶ所を旅した。人生を旅とし風雅を旅の花とする芭蕉の人生観がよく出ている。

テキヤの寅さんは、夏は涼しい北の国、冬は暖かい南の国で旅暮らしをしている。「寅は各地に出かけることで、その土地のしみじみとした良さが見えるという視点は、シリーズ化が定着した頃にはすでにあった」<sup>10</sup>という。古くからある観光地や温泉地が登場し、また鄙びた山あいの村や離島の特色ある生活を、あえてみせようとしているものも多くあった。要するに、旅の途中の風景が毎回の観光案内にもなっており、シリーズ後半には、ロケ誘致合戦が各地で繰り広げられたほどである。この作品は古くからの日本の道中記形式をうまく生かすことによって経済的効果もあったものと言えよう。

### 3) 美女遍歴

このシリーズでは、「マドンナ」と称してその時代の名女優が毎回登場する。マドンナとは、イタリア語で「憧れの女性」をいう。寅さんは、毎作品と言っていいほど美しいマドンナに惚れてしまい、恋の辛酸を舐めながら、最後には必ず実らない結末となる。「寅さん」と「マドンナ」との恋物語は、「失恋物語」とも言えるだろう。

全48作にわたり、寅さんの恋愛模様を日本各地の美しい風景を背景に、マドンナになる女性が46人もいるから、美女遍歴という物語の形式をも内蔵しているように思われる。しかし、日本には『源氏物語』や『好色一代男』というドンファンものの伝統があるが、寅次郎は光源氏や世之助のような色好みや漁色家ではない。彼の女性遍歴は、むしろ禁欲的で指一本も触れない純情がある。伝統的な美女遍歴から離れ、女性に対して専ら精神的に憧

---

<sup>9</sup> 道中記：旅行の行程をたどるように、体験した内容を記した文。紀行文・旅行記・道中記ともいう。

<sup>10</sup> 濱口恵俊・金児晁嗣（編著）『寅さんと日本人 映画「男はつらいよ」の社会心理』知泉書館、2005：58。

れ、相手の幸せを祈る「プラトニック・ラブ」<sup>11</sup>の形式を取っているのである。

#### 4) 愚兄賢妹

『男はつらいよ』の原題が『愚兄賢妹』だったように、本映画シリーズには「兄と妹」という構造もあり、兄妹愛が終始一貫している。そのことは毎回タイトル・ミュージックでも歌われている通りに、「どうせ俺らはやくざな兄貴、わかっちゃいるんだ妹よ、いつかお前の喜ぶような、偉い兄貴になりたくて……」<sup>12</sup>とある。

日本で女性の力に、最初に強い関心を寄せたのは民俗学者の柳田国男である。柳田の「妹の力」(1925)という論文によると、古くから日本では、妹が兄に対して守護的な呪力を発揮すると考えられていた。兄というものが男ゆえにもつ孤独感や寂しさを、妹が快活にふるまうことによって慰める関係は、本来の日本の家もっていた関係である。

「確かにお兄ちゃんの幸福を祈る可憐な妹というのは日本人の胸をしめつける神話的なイメージである」<sup>13</sup>と柳田(1925)が記しているように、映画の中では、妹のさくらは兄の寅への愛情が人一倍強い。「さくらは寅の庇護者であり、限りなく母性である。寅の永遠の女性と考えてもよい」<sup>14</sup>。常に女性に振られ続けている寅さんを、最終的に理解しようとしている。そういう愚兄賢妹の物語形式もこの映画の大きな魅力となっているのである。

## 1.2 精神的な魅力

戦後日本は、高度経済成長によって急速に都市化されてきた。しかし、近代化に向かう過程で社会の包容力、地域及び家族の絆が弱まり、人と人の中で濃密な連帯感を失いつつある。『男はつらいよ』が製作された1969年からは、日本人の暮らしも景観も、かつてこれまでにないスピードで激変してい

---

11 プラトニック・ラブ (Platonic love)：肉体的欲望を伴わない精神的恋愛。『広辞苑 第5版』1998：2363。

12 前掲書『寅さん大全』筑摩書房、1993：10。

13 柳田国男「妹の力」『婦人公論』中央公論新社、大正14年10月

14 吉村英夫『完全版 男はつらいよの世界』集英社、2005：36。

く。高度成長期とバブル崩壊を経て、そういった激動する日本社会に抵抗するかのよう、この映画は古き良き日本の「原風景」を描き続けてきた。合理主義の今の世の中で、経済的豊かさを追求しながらも、人々が抱える「心の病」を、無私無欲で自由な旅暮らしをしている「寅さん」が癒してくれる、というわけである。彼の偽りなき人間らしい姿が日本人の目に映り、清冽な存在になったわけである。

多くの日本人が故郷喪失者となった現代では、下町情緒溢れる「とらや」<sup>15</sup>が精神的な安住の地、すなわち「心のふるさと」である。山田（1997）は、「葛飾柴又という現実の土地に名を借りた架空の世界、つまり、ぼくら日本人が、今日あこがれてやまない心のふるさとである」と語った。そんな地域社会が、日本人にとって、不安定な世情の中で、生活の確たる拠り所の象徴となり、「寅さん」シリーズは、正月やお盆に映画館で迎える、故郷への里帰り行事のようなものだったのである。スクリーンの「寅さん」に逢うことで、観客が笑顔になり、一切の生活苦を忘れ、精神的に癒されるのである。

## 2. 「寅さん」式愛情表現

恋は、映画のテーマとしては最も多く描かれるものの一つである。『男はつらいよ』シリーズに登場する女性たちのうち、「寅さん」の恋の相手になる「マドンナ」はゲスト出演で毎回変わり、第1作の光本幸子から始まって、日本映画界の名花たちがこぞってマドンナ役を熱望し、登場した。特に、浅丘ルリ子演じる旅回りの歌手リリーは、シリーズで最も人気の高いキャラクターで、4作品に登場している。ほかにも、吉永小百合、大原麗子、栗原小巻、竹下景子らも複数回登場し、その可憐な美を競い合い、寅さんとの「恋」を彩っているのである。

### 2.1 恋のパターン

本映画に登場するほとんどの人物がそうだったように、「マドンナ」もまた基本的に善人である。全体を通すと、「マドンナ」は「寅さん」の恋の対

---

<sup>15</sup> 本映画の物語の中心舞台となる団子屋、寅さんの実家である。

象のバリエーションであると同時に、人生の困難を軸にしたストーリーのヒロインとして、映画のバリエーションを確保しようとする要請に添っていた。シリーズ中、特に共通性のある作品によって、「寅さん」と「マドンナ」との恋を概してまとめると、「崇拜型」から「逃避型」まで五つのパターンがあるが、いずれも成就できない結末になる。

寅さんが最初に惚れたマドンナは、第1作に登場する帝釈天・題経寺の住職、御前様の娘冬子である。冬子は寅の幼馴染で柴又の人たちにお嬢様と呼ばれ、文字通りの貴婦人である。上品で美しく優しい。寅のような下々の人間の悩みにも耳を傾けてくれる。また、第18作の『寅次郎純情詩集』では、シリーズ中、最も貴婦人らしい貴婦人の綾は没落した上流家庭の未亡人である。その他、寅が堅気でない商売人だから、インテリの女性に対して崇拜の情から恋の相手となったのは、考古学者の礼子（第16作）であったり、翻訳者の圭子（第24作）であったり、医師の真知子（第40作）であったりする。そういう身分違いの恋、貴婦人への「崇拜型」の愛には、好色というよりは、「高嶺の花」と呼ばれるような上品な女性と付き合うことで自分も精神的に向上しようという「プラトニック・ラブ」である。

また、弱い女に同情するという「同情型」の愛は、もう一つのパターンとなる。シリーズ第7作『奮闘編』で、寅は少々知恵遅れの娘に同情して結婚まで考えるが、これは貴婦人崇拜とはだいぶ違う。かわいそうな女に男が同情してつくす、即ち同情から愛が生まれるケースがシリーズの中で特に多い。第9作『柴又慕情』、第13作『寅次郎恋やつれ』、第22作『噂の寅次郎』もそうである。第26作『寅次郎かもめ歌』では、寅は死んだテキヤ仲間の娘を東京へ連れて行き定時制高校へ行かせて面倒をみる。こうして「寅さん」シリーズには、様々な不幸と悩みを持った女性たちが次々と登場する。寅さんの最大の美德は、そういう弱い女性のために一肌脱ぐという献身的につくすことであろう。

同じように寅さんの同情から恋物語が始まっても、女性のほうがたんに受身でない強い性格の持ち主であり、寅さんにとっては近い立場にいる同類同士と言える。そういう間柄から生まれるのが「平等型」の愛であり、それを第三のパターンとしよう。マドンナのリリーは、同一人物として計四度登場

し、最終作となった第48作『寅次郎紅の花』まで、寅さんを愛しながらも最後まで結ばれなかった。リリーは旅回りの歌手で、いわば寅と同じく堅気ではない旅暮らしをしている。こういう二人は同じ身の上からの連帯感と理解があるから、いくら喧嘩してもその後はすぐ仲直りして寄り添う。ほかには第17作『寅次郎夕焼け小焼け』の芸者としてのぼたんも、水商売という点で寅と同類である。それもリリーの場合と同様に、同情して深い仲になるというよりは、互いの欠点を言い合える同類同士であることによって、快調に平等的な人間関係が進展するのである。

特にシリーズ後半になると、寅さんもおじさんの世代にならざるを得ない。そんな時に会う女性たちは、寅の自由な雰囲気にかされる年下の若い娘となる。それが、第28作の愛子だったり、第33作の風子だったり、第23作のひとみだったりする。寅さんとこれらの若いマドンナとの間柄は、頼れる親戚のおじさんのように応援するという「応援型」の愛であり、決して恋焦がれる愛情ではないように思われる。特に42作目以降の作品では、甥の満男の恋愛色が濃いシナリオに変わり、寅は完全に恋の指南役に徹するようになった。

最後のパターンとして取り上げるのが「逃避型」の愛である。寅さんは迫られると逃げる人間であることは、彼の甥である満男のせりふからも窺える。「向こうがその気だったこともあるんだぜ。だけど、おじさんのほうが逃げ腰になっちゃうんだ」、「その人がおじさんのことを好きになると、慌てて逃げ出すんだよ」などである（山田1997）。第10作『寅次郎夢枕』で千代に告白された時、第27作『浪花の恋の寅次郎』でふみが近づいてきた時、寅は常に慌てて逃げてしまう。第29作『寅次郎あじさいの恋』でかがりが寅の寝ている部屋に入ってきた時に、彼は寝たふりをしてその状況から逃げてしまった。つまり、寅さんの恋の多くは失恋というより、自ら恋を成就させるチャンスから逃げたのである。

## 2.2 恋の結末

このシリーズでは、寅さんは「失恋王」と言っても過言ではないほど、46人の美しいマドンナに惚れつつも、例外なく失恋するか、身を引く結末

になる。シリーズ前半の寅は、マドンナに会った瞬間に一目ぼれ、相手の気持ちなど、お構いなく夢中になり、恋は一方的で盲目的である。そこへ相手の恋人や夫が現れ、やむをえず諦める。後半になると、寅は主に恋の指南役を果たし、マドンナから愛情の発信をされても、とぼけて受けようとはせず、一番仲のいいリリーとも最終作まで結婚には至らなかった。

「寅は永遠に愛を求める男だが、愛の達成そのものを望んでいるのではない」と吉村（1997）は述べているように、「一番いい人の、一番いいところだけを見て、それですっと引き下がりたいという気難しい美意識である。もし結婚すればそうもいかない。人間であるからには非常にいやな面も内側にはいっぱいあるはずである。だから、気ままで自由奔放に生きる寅にとって、現実味を帯びた結婚より、片思いで十分なのである」。梅原猛は寅さんの失恋について、「恋が空しく終わるのは必ずしも偶然の事情によるのではなく、寅のやくざっぽい見かけには似合わない深く相手の立場を気遣う恥ずかしがりやの自制心ゆえでもある。こうして二人は別れるが、その結果、女性は寅によって心を慰められ、知らないうちに人生の教訓を受けて幸福生活に戻るのである」<sup>16</sup>と指摘している。佐藤（1996）によると、「寅は、行く先々でもっばら女性に憧れ続け、女性の力になろうと努め、時にはその女性のために堅気になろうかとも考えるのである。しかし、ついに彼はプラトニック・ラブのまま、また旅の空へと去ってゆくのである」ということである。これらの見方をもとに、『葉隠』や『武士道』に唱えた日本の伝統思想から、寅さんの失恋の原因を探るとともに、「寅さん」式愛情表現も読み取れると思う。

まず、日本では、侍の時代から、立派な男は女を口説かないという儒教倫理観がある。新渡戸によると、「侍にとっては感情を顔に表すことは男らしくないと考えられた」<sup>17</sup>。さらに、感情は内に抑えれば抑えるほど、純粹になり強くなるから、「忍ぶ恋」、或いは「叶わぬ恋」こそが、至極の恋だという日本独自の恋愛観と美意識が生まれた。例えば、『葉隠』には、「恋の至極は忍恋と見立て候……一生忍んで思死する事こそ恋の本意なれ……（聞書第

<sup>16</sup> 「思うままに一道德の教師：寅さん」東京新聞（夕刊）、1996年8月20日

<sup>17</sup> 新渡戸稲造（著）、奈良本辰也（訳）『武士道』三笠書房、1997：101。

二)」<sup>18</sup>とある。寅さんは自分の恋愛観をアピールする時、「女に振られた時は、じっと耐えて、一言も口をきかず、黙って背中を見せて去っていくのが、男というものじゃないか」(第21作)。また、「何も言わない、目で言うね。お前のことを愛してるよ。すると向こうも目で答える。悪いけどあなた好きじゃないの。そこでこっちも目で答える。わかりました、それじゃいつまでもお幸せに。そして背中を向けて黙って去る……それが日本の男のやり方よ」(第24作)。典型的な「日本男児」としての寅次郎は、伝統倫理観の強い「侍」のように、女を口説くまでして得恋のほうに仕向けることを潔しとせず、ひたすら「忍ぶ恋」に殉じてしまうのである。

次に、寅さんは「プラトニック・ラブ」の求道者であり、克己心の強い禁欲主義者とも言える。京極は、「恋した相手が自分を受け入れそうになると、現実条件がないことを思い出し諦める。こうして繰り返される恋物語は、寅の自己規律と断念という『男はつらい』物語、理想と現実の断絶の『つらい』物語である」<sup>19</sup>と。自己規律といえば、自制心、或いは克己心のことを指すのが、新渡戸(1997)は、「克己の理想とは、日本人の表現によれば、心の安らかさを保つことであり、またギリシア語によると、デモクリトスが究極的な「善」と呼んだエウテミアの状態に到達することである」とする。失恋を重ね、その道のエキスパートとなった寅さんは、「そりゃこっちが思う分だけむこうが思ってくれりゃ、世の中に失恋なんてなくなっちゃうからな、そうはいかねえもんな」(第29作)とついに失恋に達観し、相手を責めない「善の状態」に到達するのである。「ストイックな寅は、山田のピュアな思いを体現して生きるのである」<sup>20</sup>から、たとえ結婚生活を想像しても、相手を眺めているだけでいいという。「一日中じっとその顔を見てる、俺……夜だって寝やしないよ、スヤスヤ軽い寝息をたてるその美しい横顔をじっと見つめているな、……。いいんだよ、食わなくなつて。あんなきれいな人と一緒に暮らしたら、腹なんか、すかないんだよ」(第34作)。それは

<sup>18</sup> 山本常朝(講述)、田代陣基(筆録)、奈良本辰也(編訳)『葉隠』三笠書房、2010: 64.

<sup>19</sup> 前掲書。『私たちの寅さん』1996: 50.

<sup>20</sup> 都築政昭『寅さんの風景 山田洋次の世界』近代文芸社、1997: 45.

喜劇的な誇張でもあるが、寅さんの恋におけるプラトニックな志が見えるのである。

最後に、日本男性は愛情表現が不器用であることもその一因であろう。佐藤（1996）の見方では、「男らしい男はコミュニケーションが下手なのは、山田洋次の憂える日本男性の愛情コミュニケーション不全症の問題があるから」と指摘し、「戦後、自由主義という目標に向かっての恋愛は、青年男女の通過儀礼のような神聖なるものと見なされる。しかし長年の日本男子の態度が一朝一夕で変わるわけではない」と述べている。つまり、男っぽく構えれば構えるほど、女性に対する愛情表現が一層不器用になる。寅さんの場合、「忍ぶ恋」にせよ、「プラトニック・ラブ」にせよ、どちらも愛情コミュニケーション障害を招きやすい。シリーズ屈指の出来とも思える第29作『寅次郎 あじさいの恋』では、普段おしゃべりな寅さんは、愛や恋の表現となると、寡黙で一言も喋れない。マドンナとの愛情コミュニケーションがうまくいかない、「男ってえものはな、引き際が肝心よ」（第27作）と言って、全然相手の女性を引き留めないのである。日本男性の愛情表現の下手さは、「山田が諸作品の中で繰り返し追求してやまない中心的なテーマである」<sup>21</sup>ように、寅さんも同じく、マドンナへの思いは熱いのだが、愛情表現が不器用で相手には全く届かないのである。

いずれにしても、「寅さん」と「マドンナ」との恋物語は、日本の文化・文芸の礎を作った「叶わぬ恋」の伝統を色濃く受け継いでおり、「失恋の美学」が貫かれている。それは実らない恋こそ、最も美しいという従来の日本の感情説に相応しい。日本人は昔から、ハッピーエンドより、悲劇的な結末のほうがもっと人の心を打つと考え、和歌に詠われたような切ない恋や、近松の心中物語に描かれたみじかくも美しい恋など、「叶わぬ恋」をテーマにした古典文学を好んできた。「寅さん」シリーズは、まさに都築（1997）が指摘しているように、「笑いの話の形を借りた悲劇である」。寅さんの恋物語も、成就できないからこそ、理想的な愛の継続という含みを持っており、観る者の心に響く名作となり、いつまでも美しいように思われる。

---

<sup>21</sup> 前掲書。佐藤（1996）：151.

## おわりに

戦後、特に七十年代に入り、「人間性の復活」と「自然への回帰」という日本の社会的命題に応じ、山田映画には、地方・農村・小さいもの・弱いものに対する優しい視線があり、どんな人間をも愛情豊かに見つめる。「寅さん」シリーズはその代表的な作品である。「寅さん」は常に天真爛漫で周りを騒がせるが、俗性と聖性を持ち合わせており、豊富多彩な「人間の色気」<sup>22</sup>を備えているから、広く大衆に好かれる人物像になったわけである。高度経済成長とバブル崩壊を背景に、癒し系の「寅さん」の存在がブームになり、その裏に映されたのが、人々の「情の世界」への憧れ、戦後目まぐるしい社会変化の中に置き忘れてきた、自分たちの「心の原点」であろう。

一方、「寅さん」と「マドンナ」との恋は、「東アジアの伝統的恋愛観と純情、照れくさくて曖昧な男女関係や夫婦関係」<sup>23</sup>のあり方を受け継いだが、日本独自の「忍び型の恋」を男女関係の最高にランクしてきた。「寅さん」式恋は、「プラトニック・ラブ」でもあり、克己の理想が貫かれている。その本質は、現代の性文化とは対極にある、いわば「禁欲の美学」である。寅さんは、戦前からの儒教的な男らしさのイメージにこだわるばかりに、山田(1997)映画のいわゆる「日本の男は女に対して、憧れのような愛情を抱きながらも、寡黙で自分の気持ちを明確に表現できない」から、いずれも「叶わぬ恋」となるのである。

以上のように、「寅さん」シリーズの大ヒットを一つの文化現象としてとらえ、「恋」というテーマを中心に論じてきたが、この作品には、「恋」以外の文化要素も含まれており、これらの文化要素の考察を通じて、本映画シリーズの研究及びその全体像への理解をさらに深めていきたい。

## 参考文献

井上ひさし『寅さん大全』筑摩書房、1993

---

<sup>22</sup> 都築(1997)は「人間の色気」とは、豊かな人情であり、笑いであり、生活の潤いであり、男と女の純情であると説明されている。

<sup>23</sup> 康上賢淑「日本映画における東アジアの文化と伝統—三本柱から見る日本映画への素人の感想」『鹿兒島経済論集』48(1-4)、2008:147.

- 切通理作『山田洋次の世界—幻風景を追って』筑摩書房、2004
- 熊沢民「談寅次郎」『日語学習与研究』3、1997：51-54.
- 康上賢淑「日本映画における東アジアの文化と伝統—三本柱から見る日本映画への素人の感想」『鹿児島経済論集』48（1-4）、2008：147.
- 小谷野敦『日本恋愛思想史：記紀万葉から現代まで』中央公論新社、2012
- 佐藤忠男『みんなの寅さん「男はつらいよ」の世界』朝日新聞社、1996
- 蔣芸「压抑和隐忍坚持：從愛情到爱情—淺談山田洋次的影视魅力」『芸海』1、2015：99-100.
- 松竹株式会社（編）『男はつらいよ パーフェクト・ガイド』NHK出版、2005
- 新谷尚紀『寅さんの民俗学』海鳴社、1996
- 都築政昭『寅さんの風景—山田洋次の世界』近代文芸社、1997
- 中村輝子「みんなを癒した寅さん」『私たちの寅さん』『私たちの寅さん』刊行委員会編 シーアンドシー出版、1996
- 新渡戸稲造著 奈良本辰也訳『武士道』三笠書房、1997
- 濱口恵俊・金児暁嗣『寅さんと日本人—映画「男はつらいよ」の社会心理』知泉書館、2005
- 柳田国男「妹の力」『婦人公論』中央公論新社、1925
- 山田洋次『男はつらいよ』シナリオ1-5 筑摩書房、1997
- 山本常朝講述 田代陣基筆録 奈良本辰也訳『葉隠』三笠書房、2010
- 吉村英夫『完全版 男はつらいよの世界』集英社、2005
- 吉村英夫『山田洋次と寅さんの世界』大月書店、2012
- 四方田犬彦『日本映画史110年』集英社、2014
- 李兆忠「迷人的寅次郎神話」『世界知识』13、2008：64.
- 黎枫「“寅次郎”—日本民族文化和艺术的结晶与象征」『電影評介』10、1989：30.
- 路秀丽「浅析日本電影《男人難当》中的恋愛觀」『電影文学』14、2011：78-79.
- \*本研究は、2019年度陝西星視野影業有限公司で助成を受けた研究成果の一部である。(課題番号:YD2019036)

## シベリア調査旅行

崔吉城

シベリア調査旅行に出る。旅には思索がある。日本に留学し、日本語がうまく出来ずとも何とか生きてきた。それは私の言語の底力である。世界旅行で一番必要なのは言葉であるが、その言語障害は私の無言語時代の体験が底力として生きる時でもあった。

現地調査において筆談も会話も全く通じない時があった。私の現地調査は現地語を学び、現地で長く参与観察をするというテキスト通りの調査ではない。まして良い景色に賛嘆し、楽しむ観光旅行では全くない。アスファルトのない道で隠れて住んでいるような少数民族の人を探し訪ねて、お話を聞かせてもらう旅である。不真面目に思われる話ではあるが、今から考えると本当に良い冒険だったと思う。

### ウズベキスタン

ここは中央アジアのウズベキスタン、アジア諸国における文化政策の変容と展開に関する実態調査研究（代表青木保）の一員として参加させていただいた。実は私の参加は付属的だろうと思っていたので、文部大臣級の方が主宰する会議ではもっぱら写真を撮っていた。しかし、紹介があり、私が韓国人であると聞いた人たちの表情に反応を感じた。それはウズベキスタンの高麗人の存在が意識されたからであろう。

朝鮮人たちはスターリンの強制移住政策によって沿海州などからカザフスタンとウズベキスタンに移された。それについて二人の方にインタビューすることが出来た。1937年スターリンは極東地方の全領域から朝鮮人を南カ

ザフスタン州、ウズベク共和国へ強制移住させた。朝鮮人のウズベキスタンへの移住は76,525名、カザフスタンへは90,526名、総数は171,781名を強制移住させたのである。当時、朝鮮人は日本の植民地支配のもと、親日的であると考えられ、危険分子と見なされたのであろうという。「ソ連との戦争勃発前迄は、朝鮮人と日本人との相互関係は良かった」と聞く。

彼らは強制移住による悲劇があったことはないという。韓国や日本のテレビ局が撮影に来て悲劇として扱ったことは大間違いであると言う。彼ら自身は中央アジアで農業開発のために移住したのであり、スパイ云々という韓国や日本のテレビの報道はまちがいで強く主張する。それを聞いて私はショックを受けた。ロシアのメディアより韓国や日本のメディアは信頼できない。そして自分達を民族的英雄化しているのにも戸惑っていると彼らは言う。

雨のない地方で荒地を肥沃な稲田にしようとして、開拓事業を成し遂げた。花を咲かせた。それは綿の花であった。また大きな「スターリン集団農場」で労働をし、毎年国家へ米の供出量を増加させていったのである。彼らはそれほど被害者ではないというのである。

当時、米および棉の栽培者のリストがしばしば発表されており、労働現場における朝鮮人金炳和が顕著な業績でソ連の勲章や記章を受けていた。タシュケント州で31名の朝鮮人が「社会主義的労苦の英雄」という称号を受けた。

木綿生産王の銅像を探して歩いている時、おばあちゃんが西瓜を売っていた。朝鮮語で話しかけてみた。彼女は咸鏡道訛りの朝鮮語で、苦労話が長い。沿海州から強制移住させられた人だった。彼女は良いところで住んでいることが幸せだという。やはり彼女も日本や韓国のメディアが間違えた報道をするという。悲劇的なスターリンの強制移住はどう理解すべきだろうか。

遅いタシュケントの歴史研究者の高麗人の金氏との約束を守るために、3百キロ以上離れたサマールカントを往復するのにタクシーを使用し、時間に合わせて約束の場所に行ったが金氏は現われない。再三の電話も通じなかった。彼の身に何かあったのかと心配もしたが、時間と共に裏切られたよ



1998.8.25日本大使館ウズベキスタン・タシュケント  
写真：前列右から青木保、大使、崔、北岡、後列宮武公夫、土佐昌樹、梶原景昭

うな、失望感でいっぱいだった。彼とは数年後、アメリカで再会したので、その時の事を話しても彼は記憶さえしていなかった。そんなことはたいしたことではないという表情の彼にまた、失望した。

## ウラジオストク

1998年7月28日。ウラジオストクの海水浴場はダイビングや北方からの旅行者など、たくさんの水着の群があり、人種も多様で美しかった。ある人は表面はお洒落な社会だと言っていた。そこで小学生たちが煙草を吸う場面を目撃した。ここでは喫煙に関しては非常に自由で、社会的規制慣習はないという。煙草や嗜好品についての礼儀作法はないようである。

ロシアも父系制であり息子が好まれているが、最近では娘がより好まれる傾向があると言う。現地では男女平等な社会に感じる。女性が社会活動を積極的に行う傾向がみられる。銀行などでは事務係の上司は女性の方が多いように感ずる。

ホテルではやはりロシア語以外は全く通じなかった。旅行社を探してもわ

からない。ホテルの正門の左側に旅行社らしき看板を見つけて入って見たら正解。旅行社のジャナZhanna V. Maysheva Victor氏が自分の運転で案内するという。名前は個人名、父名、姓名に構成されている。ジャナさんの父親は50才でモスクワ居住、彼女は母と一緒にウラジオストックで暮らす。University of Marylandで英語を学習した。小中を合わせた11年教育を受けたと言う。そこでは体育の先生以外は女性の先生だと言う。さらにロシアは早くからフランス風に近代化されたのだと聞く。

ロシア料理のレストランで昼食。パン、スープ、ステーキ、ソーセージ、キノコなどが出た。赤色のスープ以外はロシア式とは言えない。ロシア料理は西洋化されたのかも知れない。女性は仕事と家事をしており、父親より尊敬される。ロシアでは代が変わる度に個人名が苗字になる。夫婦と兄弟姉妹は名前で呼び合う。父親は親族名称で呼ぶ。ハニーなど夫婦同志だけの呼称はない。フルネームは公式の時以外はほぼ使われない。ビジネスでは名字だけ使うが日常生活ではほとんど使われていない。

その後ナナイ族の民族工房のアムール民族芸術博物館に行った。ドイツ人で日本に帰化した小野寺カリレイ氏（73才、国籍は日本）は画家としてナナイ族の宗教や民俗に関心があり、その作業をしながら博物館を経営しているという。建物の屋上を利用したものであり、博物館というより個人のアトリエのようであった。木造神像、鹿骨の神像など、アムール河のナナイ民族芸術博物館の資料収集者の故A. P. ドンカーン氏の収集品が保存されている。釘を使わず白樺やポプラの木で丸木船を作った作品もある。

ソ連では1970年代までも迷信打破により、シャーマンを弾圧し、その民俗資料はほぼ失い、そのほとんどは外国へ搬出され、現在はその民俗資料を購入する時は政府の許可が要ると言う。

1998年7月29日。市内から45キロ離れた所にあるソ連で死亡した日本人抑留者が眠る300余基の墓地を回ってみた。私はシベリアとモンゴル、中央アジアのウズベキスタンとカザフスタンでも抑留者の墓を見て回った。サンクト・ペテルブルグでは教会と墓地が観光化されているのを思い出した。西洋では最初の観光地がエジプトのピラミッドであったことを想起する。

ロシア正教会と墓地を訪ねた。教会の前に立って、右手で額の中央から下へ、そして、胸部で左から右へと十字架を切って儀礼的なおじぎをする。東方正教会ではローマカトリックとは方向が異なっている。私の十字をきる手を右から左へと直してくれた人がいた。ロシア人であることのアイデンティティにもなっているようである。

ソ連崩壊により治安が悪くなったという。韓国大使館の職員が殺害された事件があったがまだその事件は解決されていない。車を駐車する際にはセキュリティのために50センチほどのバーで固定する。盗難が多く治安が悪い。社会主義から変わると医療費、教育費が年間5000ドル自己負担になる。個人病院ができると言うが、まだここにはない。賄賂で入学などもあり、社会的混乱は大きい。大学教員の給料は500ドルほどであると言う。

ソ連の政治家たちと指導者についての話題が出た。歴史的には悪名高いスターリンの死後、ソ連の最高指導者となったフルスチョフが平和共存を図り、人気があったと言う。私が出持っている怖いイメージとはかけ離れていた。私が比較的良いイメージを持っていたブレゼネフは不人気だったと言う。ゴルバチョフのペレストロイカにより新しいロシア時代になり、エリチン執権による新しい政策にも反応を伺った。ソ連時代のコルホーズは国営であったのが無くなって、経営が上手くいかず半分くらいは倒産した。そこに中国のマーケットが形成されていくという。

## 郷土博物館

7月30日。日本の旧銀行の建物、郷土博物館Arseniev State Museum of Primorskiy Regionは入場料を払って入ってから休館中だということを知った。入口のシャーマンの模型の写真を撮っただけだった。ギリシア式裸像が左右に立っている坂道を歩いていたら日本人に殺されたソ連軍の銅像が立っていた。ロシア極東の沿海州の歴史。1910年ごろに日本人が6千人住んでいたという。雪はあまり降らなかったが寒く、多くの人が凍死したと聞く。

劇団65年記念公演予定のマックシムゴルキー記念ドラマ劇場は1970年代に建立。修理中。1972年建立の50万人収容の大規模なサーカス公演場は天井の数枚のガラス以外は全部壊れていた。

1907～9年に建立されたルーター教会はソ連時代に軍事博物館として使われたので庭には戦車と武器が展示されていた。宗教の自由と言われている新時代であっても正教会ではないプロテスタント教会は復興は難しいようである。信仰より生活が大きな問題である。指導者が変わるたびに変わる。ペレストロイカもそうである。7か月間給料をもらっていないと言う。その国民に政府は「デモをしたいならしなさい。飢え死にするだろう (Go to Strike, you will starve)」という。

典型的なロシア式「ノスタルジア」食堂で昼食を食べた。壁にはロシア民俗鷲(わし)や結婚式を描いた絵が掛っている。食事はすべてパンから始まる。パンは麦やオートムギで作られる。ベジタブルスープ、肉(チキン、アヒル)、ジャガイモ(サツマイモやトウモロコシはない)、トマト、コーヒーなどが出た。

飢え死にしても犬肉は食べない。犬はペットか猟犬である。中国人が犬肉を食べることを蔑視する。バスに乗った。3ルーブル(日本円で100円程度)。町はきれい、秩序があると感じた。インタビューとガイドから聞く話とは異なって人々は楽天的に見える。私には日本で聞いた話よりもとても美しく見えた。ベビーカーやデートの実風景は聞いたロシアとは別天地であった。

## ハバロフスク

1998年7月31日。8時50分ハバロフスク行きのチェックイン。機内に荷物を持って入ったが出された。有料トイレ3ルーブル。10時30分に再度チェックイン。2回もX線照射、同行した加藤氏のフィルムに異常があったという。この旅行で9回ものチェックインとX線照射でフィルムにはかなりダメージがあった。私の乱暴な調査旅行が彼に迷惑をかけたことをお詫びした。

12時30分、ハバロフスク到着。アムール河が見られるインツェリストホテルに投宿。韓国料理の食堂で食事をした。食堂で数人の韓国系ロシア人に会った。食堂の経営者の南宮氏は1941年ソウル生まれ、アメリカ居住、ここでは百貨店と食堂などを経営している。彼の紹介で金万九氏(51才)がガイドをしてくれることとなった。彼はロシアで生まれた韓国系のロシア人

「高麗人」であり、大学を卒業してもジャガイモなどの農業をしなければならぬと言う。土地が広く、資源が豊富であり、努力すれば豊かになれる国だとも言う。

社会主義時代には現状維持しか考えなかったので努力する必要がなかった。主に高麗人が農業を営んだ。高麗人はロシアの少数民族として不満もあるようだった。口喧嘩になるとロシア人から「帰れ」とか「スパイ」と言われるのが一番いやだという。日本の「朝鮮人帰れ」とほぼ同じニュアンスである。ロシアでは一回は注意され、二回目には必ず逮捕されると言う。日本人、韓国人、アメリカ人などと話をしたことだけでスパイと疑われ逮捕された人もいた。しかしロシア軍人が性暴行したという話は聞いたことがないという。彼は時速120キロで良く走る。事故は運であり過速ではないと思うと言っていた。

## ナナイ族

8月1日。ハバロフスクから70キロ。アムール河の下流のシカチアリアン村へ車を走らせた。個人の家が資料館となっている。ナナイ族のシャーマンの道具などを観た。資料館の女性が英語で案内してくれた。準備して行った油を使用し、ボートでアムール河を渡った。この川の水は汚れている。中国ではこの川を黒龍江というので黒のイメージを持っていた。1200年前の岩刻絵をボートに乗って観察した。岩に刻まれた古代美術。観光資源化による村おこし、アムール河の少数民族の聖地シカチアリアン「岩刻絵」のナゾ。ロシアは村とNGOのコラボレーションによる村おこしの試みとして、古代岩刻絵の保存と村おこしを企てている。

アルコールが社会問題になっているロシアでは酒をお土産にすることが多い。シャーマンを訪ねる時は必ず持って行く必要がある。シャーマンは病氣治療などの儀礼をするので酒は必須的な供え物である。

ダダ村にナナイ族のシャーマンがいるという情報提供があったので、予定より1日早く移動することにし、ホテルをキャンセル、飛行機のチケットを一日早くし、私はそのシャーマンに会うことができた。

ハバロフスクから160キロ、さらにダダ村へ2キロ。シャーマンの家を探



シャーマンのアルトガビ・リンジャ・アトウンチェ(90才) 右

して到着したが「隣村に遊びに行った」と言われ、その村へ向かった。隣村と言われて安心したがその隣までが20余キロ、聞いたハウド村に着いた。ガイドの金氏が入って私は外で待っていたが15分ほど経て、出てきた彼は、「酒を持ってきたか」と言われたと言う。持っていないと家に入れてくれないという。お酒が好きな人か、いや必需品だと思い、ガイドの金さんに町まで買いに行ってもらった。私は村とその家の位置などを観察するために待つことにした。子供たちの自転車乗りの風景をみながら、平和で長閑な農村だと感じた。

酒を持参してシャーマンの家に入ることが出来た。酒はどう使われるのだろうか。ロシアでは過飲して死ぬ人が多く、酒は良くないという。シャーマンの彼女にとって酒は飲酒ではなく、神酒である。シャーマンのアルトガビ・リンジャ・アトウンチェ(90才)が指で酒をはじき飛ばす。これは清める仕草である。中国、韓国、日本でもある習慣であり、直ぐ分かった。そして盃に注ぎ、テーブル、神棚や窓際などに供える。

彼女の夫は1942年太平洋戦争の時に戦死した。息子たちも死んで今は一人暮らしだという。自分は長生きしているが、3人の息子も孫も死んだ。本

人は今では目が良く見えない。50歳頃、倒れて意識を失って神を迎え、シャーマンになったとのこと。生きるためにはシャーマンになるしかない。そして長生きしている。それは自分のためであり家族のためでもあった。若い時は美女であったという。シャーマン家の系統ではない。外出する時、シャーマンのベルトや鈴などは身につけて出かけることは出来ないが、片面太鼓だけは持ち歩く。

早速インタビューをすることになった。乾燥した木の葉をお湯に入れて、その水滴をまき散らし、太鼓を叩きながら声を出して歌い、祈り、神憑り、占いをしてくれた。当時私が撮影した映像はビジュアルフォークローア(代表北村皆雄氏)から「映像人類学シリーズ」の「アジアのシャーマン」(59分)として発行された。シベリアの唯一のシャーマンと言われた方の死の直前に撮ったものである。

8時(20時)頃、食堂も飲み水もない田舎からハバロフスク市内に戻った。平壤食堂で食事をした。ここでは料理は粗末であっても歌舞は欠かせない。バンド、ギター演奏、歌舞がある。この食堂は北朝鮮の人が経営したものであったが、上手く商売繁盛するとロシア人が法律などを利用して奪い、経営者を追い出したという。そのようなことは中国、カザフスタンなどでよく聞く話である。日本でも外国人を社長などに起用して一定期間使って追い出すのと同様である。

## 韓国教会

8月2日。ハバロス中央教会で、10時から12時まで礼拝参加。担任牧師はアメリカから来られた李鐘根牧師を紹介してくれた。ハーグ、握手、対話など短い挨拶。礼拝のお祈りから説教まで通訳される。説教は学識を主張するのではなく、神様の御言葉を伝えている。「聞く人は知識で聞くのではなく、言葉ではなく信仰で受け止めてください。」と言う。中国で宣教した時は、警察に捕まったことがある。しかしこの使命は止めないと強い決意を語っておられた。

ロシアに住むことは幸せである。ロシアは広い。この教会の新しい敷地が400平方メートル、市内バスに乗ると幸せである。ロシア女性は美女が多い。

アメリカではアメリカ人が美しいと思ったが、ここに来てロシア人がより美しい。神様がロシア人を美しく作ったと思う。特にロシア女性は首が長い。食べ物も多い。ロシア人は幸福である。エリチン大統領から追い出されなければここで死にたい。

ロシア人は帽子をよく被る。良いものはミンクの帽子、安いものは犬毛の帽子である（笑）。ミンクの帽子はプレゼントとして喜ばれる。帽子のひったくりもよくある。ある女性はミンクの帽子に紐をつけている。ミンクの帽子は室内でも脱がない。犬毛の帽子は良く脱ぐ。天国でもミンクの帽子は脱がなくてよい（笑）。

## カササギ

8月3日。カササギが鳴く。良いニュースを知らせるサインだという。懐かしい。韓国ではこの鳥を「カッチ」という。韓国ではカササギはうれしい便りをもたらす“吉鳥”とされている。カササギが日本では北九州の一部にしかおらず、朝鮮半島の鳥といわれるが、ここハバロフスクでその鳴き声を聞く。尾が長くスマート、黒い羽に一部が白くカラスより美しい。カラスが凶鳥であり、「カッチ」は吉鳥とされている。

19時からサーカスの公演があると聞いて、行ったが終わったという。金さんの情報は正確ではないことになる。これはロシア的なのか、彼の性格かは分からない。夕飯には石が混ざっていた。気をつけないと歯がやられてしまう。夕食後キャバレーを覗いて見た。我等のテーブルにマダムのような女性が二人の女性を連れてきて、英語でショートタイム140ドル、オールナイト200ドル、彼女のアパート100ドル、中国人80ドルというメモを見せた。日本人は何ドルであろうか。No thankの言葉を残してすぐに出た。

当地では歌やバンドのショーが終るごとに100ルーブルの花（時には造花）を投げて感謝を表現する。スケートショーにも見られる光景である。女性たちが客を評価する。中国の男性は金がなく大きい声でお喋りが多い（No money, too much touch, loud speak）と言う。社会が混乱すると性的に紊乱になるのは何故であろう。戦争中を含めて考えなければならない。インツェーリストホテルは外国人が主な客であり、異邦人相手のセックス商業があるの

だろうか。団体客には旅行社が斡旋し、その裏にはKGBかヤクザが関わっているという。

## ロシア正教会

8月4日。空港に早過ぎの到着。日本人らしい人がいた。早速話かけた。北大大学院で地質研究をしている学生の対馬教夫氏。彼はカムチャッカなどを回ってきたという。彼にロシアに対する総合的な印象を聞いた。ロシア人は思った以上に明るい。特に女性は美しい、美意識が高いという。同行の加藤敬氏と私も同感であると頷いた。

イルクーツク着、迎えに来る予定の旅行社のガイドは来ないので、タクシーに乗った。一人30ルーブルであるが100ルーブルにお釣りはくれない。ロシア正教会が目立つ。市街の道を少し歩いてホテルに着いた。ホテルの食堂では中華料理。ショッパイ、食後カメラだけを持ってアンガラ河辺を散策した。ここにいるだけで感動した。

空や川もどこかで見たものと、それほど変わらない、異色のものでもないが、中高生の時に覚えたシベリアの地名の所に来ている実感、それだけで感動である。出発前までは異様な世界のようなシベリアに来てみて、彼らの普段の生活地であり、普通の日常であるのに、それがなぜ感動させる力があるのだろうか。広島の実家へ電話、暑いという平凡な話、変わったニュースもなく、面白くない。何かの異変を期待しているわけではないのに、つまらなさや安心感を覚える。二つの遠距離の地の日常が繋がり世界が一つに感ずる。

中央博物館はニス塗りのために休館、郷土博物館Regional Museumではシャーマニズムに関する展示が充実していた。イルクーツクはロシアのシベリアの中心都市、バイカル湖にも近く、人気の都市である。西洋式建築と伝統的なロシア正教会の建物間を電車が走る。アンガラ河沿いを散策しながら、ビデオカメラを回した。

## シャーマンの研究者

1998年8月5日 ホテルの人に日程変更と情報を求める相談をした。イルクーツクから70余キロ離れた郷土博物館のブリヤット分館に向かって車を走らせた。騎馬民族の象徴らしい騎馬像が立っている。7-80余りの少数民族が住んでいる。人口1万2千人。入場料は15ルーブル、ビデオ撮影は100ルーブルだった。しかしシャーマンの写真が5枚と1個の太鼓しか展示物はなく粗末である。ただここでハンガリー人の研究者が調査中であるということと「ペー」というシャーマンの研究者Sharakusinova氏（82才）に関する情報を得たのは大きいことであった。



Sharakusinova氏（82才、中央）左は娘

電話番号を探して訪ねることを約束した。午後8時半に彼のご自宅に到着した。彼はここBokhanのシャーマン家で生まれ、民俗学者になった。1957年ハンガリーのシャーマン研究者のVilmos Dioszegi博士と共同研究をしたという。後にイルクーツク州立大学の教授になった

た。それはソ連時代にハンガリー人による最初の民族学研究であった。私はシベリア調査のために彼のTracing Shamans in Siberiaを熟読したので、ここで偶然会えたことに感激した。私はVilmos Dioszegiの先生であるホバル氏のシベリアシャーマニズムの翻訳者であることを自己紹介しながら嬉しさを表現した。娘さんのSharakshinova, Nadezhda Osipovna氏はイルクーツク州立大学教授の叙事詩人である。

8月6日駅まで3ルーブルといわれタクシーに荷物をいれたが運転手が降りてきて荷物を下ろす。そして10ルーブルだという。近い駅ではあるが遠回りでもイルクーツク駅に9時に着いたが、駅舎は修理中であり、塵だらけである。ブリヤット自治州のウランウデへ行く列車に乗車しようとしたがロシア語が出来ず戸惑った。数か所の窓口に行ってもモスクワ標準時間の表示だけで、現地時間に計算し直す必要があることも、その方法も知らず、本当に

パニック状況になり、オシッコをちびったほどだった。初めてのことで、今も忘れられない。

「英語ができる人はいないか (Anybody can speak English?)」と大声で叫んだ。

恥も外聞もなく、勇気が出た。入口に入ってきたばかりの、大きい荷物を担いでいる青年が手をあげて、協力してくれた。彼はポーランドからの旅客である。数年前までは現地時間で時刻表が使われたが、今はモスクワ標準時間で統一されているという。まずプラットホームの番号を知らなければならない。彼が時刻表示板を読んで私が乗るべき列車は1時間45分遅れているという。突然嬉しくなった。この嬉しさは何だろう。

前回はバイカル湖を通過する時間が深夜であって残念ながら景色を楽しめなかったので今度は昼の時間にした。世界で一番大きい湖を見ることができたのである。

## ウランウデ

8月7日 ウランウデでブリヤットシャーマン研究者T. M. Mikhailov氏と昼食をとりながら話を交わした。彼は私が翻訳した原著者であるハンガリーのホバルを始めシャーマニズム研究の古典的な研究者の名前を出した。彼はイルクーツク州立大学歴史学科で博士号を取り、モスクワ市立大学でポスト



T. M. Mikhailov氏 (写真の右)

ドクターコースで学習したシャーマニズム研究者であり、国際的に知られている人である。30余りの論文でブリヤートの人々の歴史における原始宗教であるシャーマニズムの役割と地位について語ってくれた。Buryatシャーマン家出身の人がソ連時代に共産党員になりシャーマンを弾圧し、博物館でも展示を禁じたという。それを守らず、殴られた人もいたという。しかし現地のシャーマンの状況などについては一切触れず自分の研究を参考にするよようにと言う意図だと理解した。

またシベリア鉄道でバイカル湖畔を走りイルクーツク、そしてモンゴルのウランバートル、中国へと旅は続く。

**1999年8月16日**

### **北京空港で**

1時間遅れて午後3時10分に到着。コンベアーに乗っている私のカバン、それはシンガポールで買ったばかりのサンソナイトのもので、私にとっては洒落た贅沢なお気に入りのカバンである。コンベアーの上にとった一つ残っていた私のカバン。それをもって、迎えに来てくれたガイドの権氏と一緒に市内の五州浜館の客室に安着し、ホッと長い歓談をした。彼に簡単なプレゼントを上げようと思い、カバンを開けようとしたが、開かない。あれ？ と思い名札を確認すると名前が違う。他人のカバンを持ってきたのである。パニックになった。

急いでそのカバンを持って空港へ、どんなに急いでも1時間はかかる。いろいろ想像した。その名札はローマ字、男性か女性か。相手がどんなに困り怒っているか。ビンタされてもおかしくない。いかなる暴力にも我慢しなければならない。私は謝罪金として、とりあえず封筒に100ドルを入れて、「謝罪」と書いた。車のスピードが遅すぎるように感じる。また、私のカバンは無事であろうか。ちゃんと戻って来るのか、心配になる。カバンの中にはロシア旅行のためのビザや現金も入れてある。旅行を断念せざるを得ないかもしれない。パニック状況はどんどん大きくなり、車のスピードはどんどん遅すぎる感じである。

空港に戻った。しかし入れない。客が出る時、ガラスのドアが開いた瞬間、遠くに私のカバンが置かれているのが見えた。一安心、英語でそのカバンが自分のものであると言い、ようやくガイドと一緒に入ることができた。カバンは間違いなく自分のものである。私が持っていたカバンを渡す相手を探した。しかしその人は既に国際会議に間に合わないと言ってカバンが戻ってきたら確認して欲しいと言い残して、出かけて行ったと言う。

税関員がカバンの中の物を確認するためにあけた。会議用のファイルや化粧品が入っていた。女性のものであることをはじめて知った。ガイドさんは

中国では謝罪金は頼んでも本人に絶対渡らないので、個人的に連絡するように私の名刺を入れて必ず連絡を願うことにして、そこを離れた。謝罪はいまだにできていない。申し訳なく、残念であり、感謝である。この件に関しては不幸と幸運が交差、否、一気に喜びが大きくなった。このことは忘れられず、さらに多くのことを鮮明に思い出す。忘れず大事に持っている記憶である。

8月20日北京空港に行く。日本では20年住んでも一回も見ることのない、唾を吐く場面。珍しい。中国は唾具文化を持っている。黄砂の多い土地環境からできた文化ともいえる。今はpm2.5という科学汚染がより問題となっている。韓国でも汚染が社会問題になっている時、私は東京に留学した。流れる品川は青く濁っていた。東京都知事的美濃部亮吉氏の「富士山が見えるようにする」という選挙のキャッチフレーズを聞きながら時代錯誤的に感じた。彼は「東京に青空を」と訴えて初当選した。公害対策に取り組み、環境問題に取り組んで改善、世界的に「きれいな国」と評されるようになった。汚染は中国だけの話ではない。グローバルな問題である。

北京空港は超満員、人口の多いことを象徴しているかのようである。混雑の中、22番ゲートで12時45分発Aeroflot、二人の遅刻客のため2時間遅れて出発、モスクワ空港に18時45分着。乗り継ぎが問題、一人旅では時にはパニックになる。航空会社はいろいろと対応してくれる。延着の放送があっても乗客の反応は皆無、なぜだろう。それが日常茶飯事であるからであろうか。バスやタクシーに乗り換えて国内ターミナルへ向かった。

非常・異常に慣れきっている日本人は、地震など意外に多い国であるから変更や異変にも慣れているようである。危機においても秩序を守る。私は日本に住んでいても日本人になりきっていない。

## サンクト・ペテルブルグ

8時35分に間に合わず9時35に変更手続きを急ぎ、国内線空港に荷物を運び、10人乗りの車に乗り、インフォメーションセンターへ、再びセキュリティチェック、ボーディングをパスし、10時40分着。サンクト・ペテルブルグホテル303号室に無事到着。セメント床なのにスリッパがないのに多少

抵抗感があった。私はすでに日本化されたのだろうか。

窓からみる風景にバルチック海が広がっている。サンクト・ペテルブルグ、ネヴァー(Neva)川を散策した。海から空まで神秘的に感じる。その地では普通の日常であるものがなぜ私には神秘的に感じられるのだろうか。なぜだろう。環境の魅力なのか。私の感じ方によるものかも知れない。見たことがなかった時は異様なところ、行って見るとその現実には過ぎない。

良いガイドを探すのが調査では肝要である。サンクト・ペテルブルグ地元の大学で英文学を専攻した28才ロシア人女性ミスファリダFaridaがガイドとして来てくれた。早速私の関心がある所と、スケジュールを提示した。教会、墓地、博物館、書店などの案内を依頼した。

まず観光化されている墓地に入場料を払って入った。観光名所である。ノヴォデヴィチ(Novodevichy)墓地。旧ソ連当局によって破壊され(1929)、後に修復された。敷地内には11の教会があり、ロシアの国家的英雄が何人も埋葬されている。ロシアの音楽、文学、科学を愛した人々が眠っている。墓が観光名所というと日本人は異様感をもつかもしいないが、ピラミッドなど墓が観光の対象になっている所は多い。

墓地を歩き、芸術的な墓碑や墓碑銘、埋葬されているロシアの一流の芸術家、作曲家、思想家の墓が並んでいる。私はその中の『罪と罰』の著者フョードル・ドストエフスキー、作曲家ピョートル・チャイコフスキーの墓の前に立った。

墓で死者の個性、業績、人生が具現されている。ピアニスト、作家、軍人などそれぞれ職業や成功物語りが表現されている。中でも家族や子孫たちの悲しさも表現されている。とくに涙の壺が目立つ。悲しみは涙の量で測る。大きいツボを抱いているものもある。二人の子供と妻を残して夫が亡くなり、大きい涙のツボを抱えている。ピラミッドも墓であり、古代から人気の観光スポットであることを思う。

サンクト・ペテルブルグの観光名所はチャイコフスキーやトルストイなど有名人の墓がある共同墓地である。

この共同墓地は日本の墓の墓標のように単純なものとは対照的ある。日本の墓は非常に単純な墓塔が一般的であり、家族墓であり、余地がほぼな

い。

最近では日本の墓文化も変わっている。墓に関する信仰や思想が変り、墓の意味も変わる。有名な歌手島倉千代子氏が75歳で亡くなられた。彼女は死ぬ直前の3日前まで歌った歌が葬式で披露されたという。またご本人が死ぬ前に都内の寺に黒い御影石で墓を造られ、ピアノをイメージしたデザインの墓を用意していたという。「こころ」の文字が大きく刻まれ、横には生前に決めていた戒名が彫られており、背面には俗名の「島倉千代子」と並び、「島倉忍」の文字が並んで刻まれている。しかしこの墓が日本の一般的なものとは言えない。この墓はモニュメントとして多くの人が尋ね、観光化されそうである。韓国の葬式では女性はおお声で泣く、なぜ私を残して逝ったのかwhy leave meと叫ぶこともある。

私の韓国の友人の中には墓を準備している人がいる。人は死んで「あの世」に行くという信仰、子孫との接点として墓が存在する。私は死んだら神の側に行きたいと望んでいる。生きた痕跡を思いだしてもらえればそれでよい。死ぬ前に自分の墓などを用意することは死後の世界を認めることになる。死を覚悟して、死を準備する心はそれが文字通り「死生観」の生き方である。最長寿国の日本ではいま「生観」だけが強調されていて、「死観」はあまり考えられていない。

墓から出て美術館・博物館に向かった。世界三大美術館の1つで8,000平方メートルのサンクト・ペテルブルグの中の1番の人気スポット。個人で事前予約をして行ったが、入口から長蛇の列。中をゆっくり見られるか心配だったが、石の階段を抜けるとゆっくりとみることができた。日本語のオーディオもあるので、休みながらゆっくりと楽しんだ。美術館と言っても、絵画などの美術品を鑑賞するだけでなく、昔の王宮の建物の内装を見学できるので、美術品に興味がなくともおすすめしたい。

少年時代に読んだロシア文学、トルストイ、ドストエフスキー、ツルゲーネフなど以外に銅像や話などでプシキンにも出会ったような気分だった。彼等はロシアの文学界に広く知られている。本屋でプシキンに関する英文詩集 *Prisoner of the Caucasus* を購入した。彼は政府の監視のもと、窮屈な生活

を余儀なくされた。政府との戦い、悲劇的なことから質の高い創作をしており、永遠に記憶される。旅先では思索、読書、プシキンの一生を読み、休んだ。

## 人類学博物館

何より驚いたのは博物館の大きさ、建物の長さ100メートルという大きさである。以前大英博物館やルーブル博物館などをみたが美術館として規模の大きさには感動した。文字通り広大国である。文化大国、特にフランスの影響を受けて西洋文化の中で質を高めてきたと感じた。私は如何に小さい国、そして心も狭い国で生活しているのかとあらためて想わされた。

博物館が並んでいる街にある人類学博物館The Kunstkammer (Museum of Anthropology and Ethnography) では時間があまりなく、並んでいる列を譲ってもらい中に入ることが出来た。入口に立っている神竿の木柱を見て感慨無量であった。特にここで韓国の村で祭る鳥竿が一階から二階の天頂まで7-8メートル細長く伸びている。先端には二羽の鳥、竿の中間のところに一羽の鳥が刻んである。どうしてシベリアのものがここにあるのかと質問した。ニコライ皇太子が日本からウラジオストックに寄り、サンクト・ペテルブルグへ戻る時、その途中でシベリアを横断した時、持ってこられたという。

## モスクワ

8月22日

モスクワのインツーリストホテル1506号に到着。時計台正午。気温15℃。気温の変化、寒さが気になる地域かも知れない。ホテルの朝食に韓国や日本にはない生ピーナツがあった。北ヨーロッパでは一般的だという。嬉しい。私は子供の時から味を覚えているので心から喜んだ。モスクワではお洒落と贅沢が感じられる。ロシア語ができないことは不便ではあるが、観察は良くなる。街がきれい。女性がお洒落である。

自由市場、ファッション、ハイヒールやミニスカートが意外に多い。百貨店の中の宝石コーナーを観察した。赤の広場とマネージュ広場や百貨店には

贅沢品がいっぱい。庶民生活とあまりにもかけ離れている。市民の清潔感が高い。お掃除で拭くというより磨くことが目につく。むしろ中国や韓国からの旅客が唾を吐くのが目立つ。日本に電話をかけるためにはまず1000ルーブルの保証金を払わなければならない。システムが不便、政治が悪いと感ずる。

食後クレムリン宮殿の周囲を散歩した。歩きながら広大というより独裁権力の集中した建物だと思った。他の建築物に比べて美しさが無いと感じた。恐ろしい宮殿というイメージが強い。私のソ連軍への怖さを高調させるように軍隊の行列が無名勇士に献花をしていた。胸に勲章を付けた元軍人も現れた。子供時代以来、空想したKGBの巣窟のイメージを払拭してみたいと思っていた。

そのクレムリン宮殿正門に向かって左側にロシア正教会がある。ロシア正教会は1917年のロシア革命によって無神論を奉じるソビエト政権から大きな弾圧を受け、地下で活動するか、民間信仰化される傾向があった。教会には聖像と呼ばれる画像アイコン (Icon) が多く飾ってある。それは聖人や、天使など聖書における重要な出来事やたとえ話などを画いた画像である。宗教はペレストロイカ時代に至ってようやく緩和された。ソ連時代に弾圧を受けたが宗教の自由、ナショナリズムと結びついて復活している。私が目にするのはその様子である。その周辺には乞食がいる。セルビアへの献金 (Help Serbia) 箱が置かれている。

礼拝ではあるが礼拝の時間や順序が決まっているようではない。出勤時間帯に1時間ほど観察。撮影は禁止、40余人の礼拝参加者は、主に女性、男性は4人だけだった。4人の女性が讃美歌を歌う中、神父が主宰、煙香で清め、祈り文を読み上げる。出勤する人たちが聖具に触れていくのが一般的である。中には祈っていくが、神父に聖告白する人もいる。イルクーツクでは跪いて礼をする人は多かったが、ここでは一人もいない。礼拝でも信者が固定されず誰でも自由に参加できるような雰囲気である。礼拝も長く続いても終わりや始まりは気にせず参加するような礼拝である。

ロシア国立歴史博物館に寄った。広大さと燦爛なる歴史を誇張する。文化

的に西洋化された。悲惨な歴史は展示されていない。博物館の中と外の格差は大きい。リアリティが弱いのはどう見るべだろろうきか。プロパガンダ的なのであろうか。それは国家の規模とは関係なく世界的に一般的である。私も一人旅で気分が落ち込んでいて、気が小さくなっていたが博物館を観覧しながらきらびやかなものだけを見て気持ちが大きくなったようで、日本では絶対しないナショナルレストランで日本の円で6000円もするビーフステーキを食べた。それを後悔する私はやはり気が小さい。

シティツアーで大型バスに乗った。ブルガリアとベルギーからの二人と一緒にだった。まず私が直前まで歩いていたクレムリン宮殿、お土産商店、そこから若干離れた八〇メートル高地Sparrow Hillsからクレムリンを眺める。韓国人団体ツアーに会った。嬉しくて話かけようとしたが避けるようだった。以前韓国人と海外で会うとお互いに喜んで、どこから来たのかなどの会話をしたが、それは変わったようである。プライドだろうか。

## プシキン

8月24日。プシキン結婚記念銅像をみて、記念館を鑑賞。これは西洋美術館であり、イタリアのコーナーが目に入った。

大型書店に寄ったが英文書コーナーで米国人が書いたニコライ二世に関する本を1冊買った。ロシアの最近史を理解するのに良い本である。ロシア国立東洋美術館State Museum of Oriental Artの入場料は10ドル、極東室でカムチャッカのチュクチ族のシャーマンの太鼓をみて、象牙の彫刻像4人の鼓手と二人の踊りの像が視線に入った。二人のキュレーターから説明も聞いた。長袖でも寒かった。

ロシアで意外にも、尊敬する文学者たちを知ることになった。トルストイ通りの文豪トルストイ家の博物館に行った。入場料20ルーブル。館内は靴にビニールを被せてそのまま歩く。私は青春時代に、信仰と自殺などの問題で悩み、彼の告白(Confession, 1879)を読んだことを思い出した。住んでいた当時のまま、忠実に再現されている。家の中も家具や食器からトルストイのコートや自転車に至るまで、今にも奥の書斎から彼が出てくるようであ

る。

ゆっくり見ているうちに韓国人団体が2チーム入ってきた。彼が執筆している模型があり、関心があっても撮影禁止。今では記憶にほぼ残っていない。展示物を保護、あるいは資料的価値を独占する展示だと思った。見て記憶するように考えたら撮影は許容したほうがよいのかもしれない。

8月25日。食堂ではフィンランド人がやってきて、同席しても良いかと言われた。席はたくさん空いていたのに日本ではありえない。彼は日本製トヨタ車がよいという。日本に関する話題としては、まず日本産メイドインジャパンが先に出る。トヨタ自動車は長持ち、サービスセンターの対応がより良いという。日本人は静かに感じるという。

私は日本人のように付き合い難い民族は他にないと思っていた。なぜ日本では引きこもりが多く、内向的な人が多いのか。子供たちが公園で遊んでいるのを見ながら日本でも低学年では社交性があり、活発であるが学年が進級するごとに言葉が少なくなる。それは教育の所為ではないだろうか。日本の教育の方針を読んで見ると自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力、自らを律しつつ…が強調されている。また国際社会に生きる日本人としての自覚を育てるためには異文化を理解し国際貢献をする日本人として育てるとも書かれている。

## ウラジオストック

8月26日。

モスクワから7時間後、午前10時ウラジオストック国内線空港に着く。鉄柵門を出てから荷物を取りに行くと、トラックに積まれ荷物は乱暴に投げ降ろされている扱いの風景。ここでは普通のことと考えなければならない。ロシア人ガイドのアレキサンドロ氏がGavan (gulf) ホテル506号へ。昨年お会いした韓国の宣教師のおられる、ウラジオストック監理教会に行ってみた。92年から始まった宣教活動が効果を成し、100席がほぼ満席になるほど信者が増えたという。

李ドンケン牧師の奥さんは啓明大学中国学科の卒業生、私の教え子でもあり、良い協力者を得ることができた。彼らは高校生の息子の将来を考える。

兵役義務が問題である。ロシア国籍を取るとロシアの兵役をしなければならぬ。1937年8月18日スターリンの強制移住の時を記念する石碑を観た。当時韓国人が住んだ「ソウルの家」は今、ロシア人が居住しており、いづれその家を買って記念館を作ろうとしているという話を聞いた。

ロシア人の家庭に案内され、ホールが広いと感じた。幼児がいたので写真を撮ろうとすると「魂が奪われる」という慣習があるので遠慮するように言われた。100年前の韓国での話をここで聞いた感じである。

8月27日

10時半、ツレーブVadim A. Turaev博士が来られた。ウラジオストックでは彼の案内であった。トロイバスの車内は人種的にはロシア人が主であり、少数民族は一人二人であった。バス賃を出そうとして無料であるので笑われた。乗客は私をみてソ連の社会主義制度が良いというに表情をしていたのが印象に残っている。彼は言う。予算がなく道のアスファルト包装も出来ない。病院が無料である反面、税金が高くなり困っているともいう。結局、今は病院は有料となっている。ソ連崩壊後でも社会主義制度がまだ残っている時であった。資本主義よりは社会主義が良いと思う人も多かった。それは独裁とか自由より社会保障が望ましいと思う人が多かったからだと考えられる。

昼食のために中国系食堂へ。肉チャーハン、石が混ざっていて注意して噛んだ。夕食は韓国系食堂、ここに来ていた客に声をかけて通訳を願う。調査のときも通訳を依頼、約束をしたが彼は来なかった。洗濯をする。私は長期調査旅行でもカバンは一つ、それは現地調達、下着などは洗濯をする。録音した現地調査はその日の内に整理してノートするという原則を守る。現地調達というのは現地の物を利用し、現地体験を大事にすることであり、その現



ツレーブVadim A. Turaev博士、左



アレックサンドルスクの港（左）と刑務所（右）

場でノートをする。私は集中訓練する形で集中して試験勉強をした覚えはない。ただ好きでやっている内に覚えるのが私の勉強方法である。

## サハリン

サハリンは日本植民地の樺太である。日本植民地時代の樺太庁のあった豊原という中心地ユズノ・サハリンスクに着いた。女性保安官が機内に入ってきてパスポートを検査する。外国人らはそのまま、降りろという。私は外国人を特別に優遇して通過させるものと考えた。ところがタラップを下りると待機していた保安官が厳しくチェックする。

旅行社の人が私の名前を書いた紙を持って出迎えてくれた。彼はビクトル（Victor Bainetov）という印象の良いロシア人。11年制の小学校卒業後、海洋学校を卒業した後、船乗りとして5年間世界を回った。サハリン総合大学で古代史を勉強してアメリカの石油会社に勤務し、2年前にそこを辞めて旅行会社のガイドになったとのこと、英語が達者である。

荷物を受け取る所に入っていくと超満員の人が天井をみつめて立っている。屋根裏部屋のようなところから、荷物が落されてベルトコンベアで流される。彼が中に入ってきて手助けしてくれた。

州庁・市庁所在地であるユズノ・サハリンスク市内に到着し、駅舎につながっているユーラシアホテルに投宿した。ユーラシアホテルはソ連時代には外国人専用のホテルであったが、今は主に日本人が多く泊まっている。しかし、フロントでもロシア語以外は全く通じない。木製の寝台が二つ置かれた

部屋にテレビと電話がある。部屋から国際電話はもちろん市外電話も出来ない。

幸いフロントの前に、受け手が支払うコレクトコールの電話があり、国際電話ができる。ロシアで電話をかけるのは煩雑なうえに、料金が高く、時にはトラブルになることがある。夏であったが暑さは問題にならない。暖房はあるが冷房はない。暑さに対応する設備は何もない。列車などは窓をあけようとしても、数人で力をあわせないと開かないし、人々は開けようとしなない。

ホテルは鉄道に接しており騒音が酷い。ちょうどこの日は1階のレストランで結婚披露宴や誕生日の祝賀パーティーなどがあってうるさかった。食堂全部が貸し切りになり食事が出来ない。しかし、結婚式の祝賀客と相席してそれを観察することができた。騒乱に近いものであり、観察しやすい。私は絶好のチャンスだと思い、ビデオカメラを回した。彼らは私を異邦人とは思わず、カメラマンだと思ったようである。またある人からは新婦の隣の席に座るように誘われたりして、私は終始カメラマンのように撮影した。私にとって結婚式や誕生日の祝賀パーティーなどを取材できる絶好のチャンスであった。

私は2001年夏にサハリン北部の調査をした。サハリンの主都ユズノ・サハリンスクから北方638キロにあるノグリキまで汽車で行った。ノグリキは数年前からぜひ行ってみたいと考えていた。午後9時発の特室13・14番が指定席だった。その列車は日本の夜行列車のような2段ベッドになっており、ドアがきちんとついた個室のようなものである。普通の個室は4人用で640ルーブルなのに、特室は2人用になっており、1560ルーブルと割高である。この時に指定された特室はドアが故障しており、それを車掌に話すとすぐに部屋を変えてくれた。これは女車掌の態度から泥棒に注意しているようであった。隣の席には英国人が乗っていた。彼は自己紹介を、'ジョークを混ぜて話してくれた。

英国南部で生まれて海洋学を勉強して船長になった。タイはもちろん、ベトナムとカナダ等を往来しながら仕事をしている。しばしばひとりで旅行をしたが、タイの食堂で仕事をしているとき25歳のタイ女性と交際するよう

になって、英国の婦人と離婚して、タイ女性と結婚して二人の娘がいるが、長女は5才で、二人目の娘は3才7ヶ月。日本人とこんなプライベートな話をするには何年もかかるかもしれないのに、彼の個人生活を容易に聞くことができた。それで互いに一気に親しくなった感じである。それは旅行という状況が作る気分であろう。このような対話をしている時に女車掌がきてロシア語で無条件荷物を置いて、皆降りろというジェスチャーをする。

ロシア語がわからない私は全く状況がわからず座っていた。その時慌しく案内者が上がってきて言うには、汽車に爆発物が装置されているという電話連絡があって、調査をするために皆降りて待合室で待機しろとのことだった。貴重品だけを持って急いで待合室に行ったが、そこからさらに待合室外の広場に出された。ある人はチェチェン問題などでテロかもしれないと恐れていた。またある人は発車時刻に間に合わない人が延着させて乗ろうとして電話をかけたのかもしれないという。ガイドによると大学入試に遅刻した学生が学校に爆発物を設置したという電話をかけて試験時間を延期させたという話もあり、今回もそのような類のいたずら電話かもしれないという人もいた。

結局9時出発予定の汽車が2時間20分遅れて、夜11時20分に再び改札を行った。改札口には大きいシェパード犬が荷物一つ一つ、においを嗅いで調べていた。ところがその犬は食料品が入っている荷物にほえて皆を笑わせていた。汽車に戻ってみると、置いたはずの荷物が無い。びっくりして探してみると他の部屋へ検査をするために持って行ったという。今回は通訳案内者がいたからよかったが、一人旅でこういうハプニングが起こったらどう対処したらよいかを想像すると、頭の中は真っ白になりそうである。車内は非常に暑かった。暑さに対応する設備は何もない。ドアをあけることも難しい。走り出すと電気が通い始め、涼しい風が入り、過ごしやすくなった。12時に消灯して寝た。

## ノグリキ

午後1時30分、ノグリキ駅に到着した。ノグリキという地名は〈黒い水〉というニフキ族の言葉だという。それは油田を暗示したという住民の話であ

る。

この油田開発の歴史は長い。私は油田と温泉を見ながら少数民族の村に行った。この地域にニフキ族が1000余名住んでいる。汽車から降り、速く車を走らせて1時間でノグリキから北に70余キロメートル地点に住んでいる〈WAL〉という〈ウィルタ族村〉に到着した。ここにウィルタ族が60人程住んでいる。

案内者の金氏がここに昔住んだことがあり、隣人だったミヘイエブ氏の家を訪問した。彼の家は政府が建てたロシア式の家屋である。ゆえにウィルタ族式の建築の特徴は一つもない。彼らはトナカイを飼っている。トナカイは優しく、扱いやすい家畜だという。荷物を運搬したり、食用にしたりするなど、非常に重要な家畜だ。冬にはトナカイを放牧する。そしてトナカイと共に移動しながら狩猟をするが、今現在、トナカイは放牧する程度であり、完全にトナカイに依存した生活を送ってはいない。むしろ魚を捕って生計をたてている。いまは狩猟の季節で、男たちはトナカイを連れて狩猟するために山に行き、家には老人と女性だけがいる。男たちが狩猟に出かけている間、妻の兄が留守の家族を見守っている。基本的にはナナイ族やエベンキ族は魚を捕って生計を維持する。昔ウィルタ族は狩猟に、エベンキ族は魚業という図式があったが、今はほとんど区別がないようである。

隣のエベンキ族の家に寄った。この辺ではエベンキ族は少なく、15人程度しかない。家の中へ入ると女性数人と一人の老人がいた。46才の男性を「おじいさん」、45才の女性を「おばあさん」と呼んでいる。訪問したその日は最高気温27度で最も暑い日だというのにガスで火を炊いて料理をしているために、家の中が非常に暑い。小麦粉をこねて、菓子を作るために火を炊いている。いくら暑くても窓を開けるという習慣はほとんどない。地球温暖化がすすめば、こちらの人々は早く死ぬかもしれないという思いがふと頭をよぎった。

ノグリキ博物館は現在修理中であり、臨時に文化館を使用している。科学担当官は2名で、その他、合わせて6名の職員がいる。ウィルタ族、ニフキ族などの民芸品が陳列されている。ソ連時代に迷信打破の対象になり、伝統的なシャーマンの道具などはほとんど喪失してしまったので、今では貴重な

資料になっている。それで今また伝統文化を復元しようとしており、二つのニフキ族伝統芸術団が結成された。科学担当官ノックカリナラというニフキ族の女性によれば、ロシア政府は少数民族が伝統的に生活するように推奨しているという。

## ニフキ族

ニフキ族のアレックスサンドロ（1956年生）氏の家を訪問した。鱒などの魚をひもにかけて干してある。鱒はこの特産だ。彼の父は朝鮮人だという。

彼の話によれば父は1947、8年に北朝鮮の咸鏡北道から労働者として単身で来島し、ここでニフキ族の母と結婚した。父は強くて、やさしい人だったという。二人の子供には大声でしゃべったりすることはなく、常に勉強するように言っていた。彼の兄はロシア人女性と結婚して息子が一人おり、完全にロシア人になった。母が亡くなって、父はロシア人と再婚して、二人の娘がいる。子供は完全にロシア人になった。

彼の妻の父と祖父は日本人だが、母方はニフキ族である。彼は日本人に会って自分には日本人の血が流れていると話しても、誰も日本人としては認めてくれないが、韓国人は父親が北朝鮮出身だと話すと同じ民族として認めてくれたので親しく感じるという。

帰路5時発の汽車に乗った。列車の平均時速は43キロである。車窓からは森林の風景が続いて見える。樹齢10年程と見えるイチイ（一位yew tree）と白梅等である。山火事で荒れた野原では古木の林が目にはいる、山火事のほとんどは不注意から起きるといふ。山火事になっても消防活動はほぼできず焼け尽くし、雨が降ったら鎮火するという。焦げた枯れ木からは新しく若芽が出て育っているの見える。

大きい山火事を起こした女性が現場で逮捕されたことがあったが、彼女は山菜取りにいて、道に迷い、寒くて死にそうだったので火をつけて救援を要請したと報道された。山林を焦土化するの山火事だけではない。表向きには自然環境保護が叫ばれているが、実際は大々的に伐木が行われているからである。ロシア住民たちは国が広くてそこまで管理ができないと考えて

いる。私は国家にこのように管理能力がないのなら大国という資格はないと思った。

北港のポルナイスク（静香）で少数民族のニフキ族についての調査のため少数民族博物館を観覧した。その後、旅館を探そうとしていたところ、その博物館の30代の女性学芸員が自分の家に泊りなさいとってくれた。言葉の問題があるので、ロシア人の運転手と共に、その家に泊ることにした。その家は玄関に入って右側に風呂場、その反対側に台所、そして両側に二つの部屋がある。大きいのが応接間、その向かい側に小さい部屋がある。そこは10歳くらいの息子の部屋である。応接間にはソファがある。運転手と彼女がロシア人同士で話しているのを聞きながら、ロシア語のできない私は疲れて、応接間の床に布団を敷いて早く寝た。当然運転手が応接間で私の隣に寝ると思いながら眠った。ところが、朝早く起きてとびあがるほど驚いてしまった。私の隣に同じように床に布団を敷いて、ピンク色のガウンを着た彼女が寝ているではないか。運転手は隣の部屋で子供と寝ている。この状況に私は強くショックを受けてしまった。いや、困ったというか、どう理解していいのだろうか。彼女が私の側に寝ているということはどういう意味なのか。どう解釈したらいいのだろうか。私は内心、自分を男として認められたのか、あるいは男としてみていないのか、それとは関係なくロシア人の習慣であろうか、非常に困惑した。

朝の食卓で私はそれをわざわざ話題にした。40年間旅行をしても若い女性とこのように一緒に同じ部屋に寝たのは初めてのことだと言ってみたが、彼女もロシア人の運転手もなにも反応しなかった。この事実は特別に変ったことではないようである。しかし朝鮮族たちに話してみたら異様な表情をした。この時に、「ロシア女性は性的に乱れている」という話も出た。謎はいまだに解けない。文化論でも説明できない。いや、私自身、明確にその理由を解きたくないのかもしれない。ロマンチックな思い出として残しておきたいような気分でもある。しかし、もしかしたら彼女の部屋のプライベートなところ、あるいは貴重なものを置いている部屋であるから、それを守るためにそうしたのかもしれないという思いに至ったときは、私のロマンチックな想像はオーバーセンスだったと思い、がっかりし、一気に憂鬱になってし

まった。

ロシアの旅券には民族名を表記するようになっており、子供は16歳になって旅券を持つ時、はじめて民族を選択する。父母の民族のどちらを選ぶかは子供の選択による。サハリンにはロシア人以外に朝鮮人、ウクライナ人、そのほかに先住民といわれるオロッコ（Orok）、ニフキ（Nivkh）、エベンキー（Evenk）族等があり、中でもニフキ族が一番多く、住んでいる。そこに住む原住民に会うために行って見ることにした。

2001年8月12日9時（21時）

窓から見える風景、寒いツンドラとして印象付けられたシベリア、サハリンに原風景を感じた。森林が豊富、寒い地域に森林が豊富であることが不思議に思われる。木の切り株だけのものが多い。山火事による焼け跡だという。サハリンは降水量が少なくても、気温が低いために水分の蒸発がなくて中・北部地方には白樺などの樹木が茂り大森林をなしている。つまり凍土から溶け出す水分によって降水量が少ないにもかかわらず、木が育ち、温度上昇が避けられるから森林ができるという。埠頭に山積みされた木材を目撃して、戦前そこで働いた朝鮮人労働者を想起した。植民地時代、濫伐に対する非難を浴びせたソ連が今では自分たちが森林を伐採していることも直感した。

### 〈ヴァル村〉

翌日午後2時半にユズノ・サハリンスクから北方六三八キロにあるノグリキニ（黒い水）に到着した。金氏（55歳）が迎えてくれた。駅から北に70キロメートル余りのニフキ族が住んでいる〈VAL〉という村に到着した。ウィルター族Uilta（旧称オロッコOrok）は伝統的に、トナカイを飼育



案内通訳してくれた朴ソンイ氏

し、その群れとともに季節移動をしながら、漁労、海獣・陸獣狩猟、採集などを糧として生活をしてきた。300～400人のウイльта族が居住するが、日常会話はすべてロシア語で行われる。

### 〈夜行列車〉

帰路で当地午後5時出発、ボルナイスクに朝7時30分着、李キョンホ氏宅で食事。彼の家族を見てロシア人との混血が著しいと感じた。長男の妻がロシア人、二女の夫がロシア人、その子、李氏の孫がロシア人のようである。李氏はロシア人の孫を可愛がっている。

ロシア人の息子の嫁が墓参りには参加しないことが李氏の不満ではあっても中学校二学年の孫はかわいい。ロシア人の顔をした孫に人種的に何の違和感もないという。李氏は長孫といい彼をかわいがる。児童新聞に投稿して入選して賞を貰ったと自慢する。ほとんどの家族の中にはロシア人の顔をした人がいる。

ユズノ・サハリンスクに帰る時の夜中のボルナイスク駅でのこと、出発時間1時、深夜12時から切符を買うために列をなした。10人目ぐらいの順番であった。後の人に順番を認められればそこに並んでいなくても良いということで実際には買票者は多い。12時30分に列車が入ってきた。5分前から売票。しかし、出発時間になっても同行の朴氏は相変わらず切符を買うために列に立っている。列車が入ってくる前の駅で空席の情報を到着先の駅に連絡すればその席分の切符を売るといふ。いよいよ定刻1時になって列車は出発しようとしている。窓口がぱっと下ろされた。切符は買えない。切迫した時であった。

結局切符は買えなかった。座席は残っているのに切符は売らない。買えなかった人は次の明け方3時半の列車の切符を買えといふ。もう一泊しなければならぬのか。窓口が閉まったので朴氏は突然走り出した。見送りにきた彼の父子が私のかばんを持って深夜の闇の線路を越えて列車後方へ走った。列車に乗ってから交渉してみるとのこと、切符を車中で買わざるを得ない。

やっとの思いで乗ることができたとき、列車は出発していた。しかし乗っ

てみると私たちの車両には数人しか乗っておらず、席が大幅に空いていた。車掌から切符を買って席へつくために待っていたが車掌は控室にもいない。しかたがないので立って30分ほど待っていると、ようやく車掌がきて4号室に案内された。

私は腹が立って不平、悪口を言ったが、朴氏はここでは日常的に体験することであるという。ここに住んでいる人々としてはそれが当然と思い、生きるしかない、受け入れざるを得ないという。彼は顔を洗いにいった。私は戻ってくるまでドアに鍵をかけることができないのでドアを開けて、長く待った。

崔吉城著『朝鮮戦争で生まれた米軍慰安婦の真実』  
(ハート出版、東京、2018年)

原田環

本書は、『韓国の米軍慰安婦はなぜ生まれたか』(ハート出版、東京、2014年)、『朝鮮出身の帳場人が見た慰安婦の真実』(ハート出版、東京、2017年)等で、慰安婦問題を熱心に取り上げてきた文化人類学者の崔吉城氏が、『韓国の米軍慰安婦はなぜ生まれたか』を全9章の1冊の本に増補改訂したものである。新たに韓国のセマウル運動、韓国陸軍士官学校での生活にも言及していて、内容がより豊かなものになっているが、本稿では紙数の関係上、慰安婦問題に絞って検討したい。

慰安婦問題については、2015年に日韓の外相間で「最終的かつ不可逆的な」解決を図った「日韓合意」が確認されたが、韓国側の日本批判は止まない。韓国は第二次大戦における朝鮮人慰安婦の存在を日本の性犯罪とし、「強制連行」「性奴隷」等の言葉を用いて批判している。この韓国の動きは、慰安婦の存在を日本の不法行為の結果発生したものだという外在論が前提になっている。

これに対して崔氏は本書で、慰安婦問題は「強制性」に絞って議論すべきだとした上で、慰安婦が誕生する朝鮮社会の内在的歴史要因に目を向けることを提起している。具体的には、自らの個人史を経糸に、朝鮮戦争(1950-53)と「貞節」ナショナリズムを緯糸にして慰安婦問題を取り上げている。自らの個人史を柱の一つにしているため、慰安婦問題を韓国内部から歴史的に捉えたものとなっている。

そもそも慰安婦とは何か。崔氏によれば、慰安婦とは戦場において軍人に慰安を提供する女性(売春婦)であった。慰安婦をめぐる運動では戦前の

ものをターゲットにしているが、戦後にも存在した。これらの慰安婦の存在が、慰安婦問題において、「強制」を伴ったものか否かが問題になっているのである。戦前の慰安婦に関しては、崔氏は先の『朝鮮出身の帳場人が見た慰安婦の真実』において、帳場人の朴氏の日記による限りでは、日本軍の「強制」は見られなかったという。

戦後の慰安婦については、崔氏は朝鮮戦争の国連軍において直接見聞したという。朝鮮半島は1945年に日本の植民地支配から解放され、1948年に北緯38度線以南に大韓民国（韓国）、以北に朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）が成立した。その後1950年に北朝鮮が韓国に侵略した結果、朝鮮半島全土を戦場とする朝鮮戦争が始まった。これに国連軍（米軍中心）、中国軍が参戦した。崔氏の故郷、韓国京畿道全谷邑も戦場となり、韓国軍、北朝鮮軍、米軍、中国軍が相次いで進駐した。

この時、中国軍以外の軍隊によって村の女性に対する性的暴行が起きた。主要には米軍であった。当初、全谷邑の村民は米軍が共産軍から村を解放しにやって来たとして歓迎したが、米軍は村の女性達を襲い性的暴行を行った。韓国軍も自国の女性に対し性的暴行を行った。

崔氏によれば、この状況に対して村は儒教的な伝統的倫理をゆるめて、外部から売春婦をいれるとともに、各戸の部屋を売春婦に貸し出し、利益を得た。村人は売春婦を歓迎し、村は売春村と化した。売春村になると村では、米軍の性的暴行はなくなった。村はあたかも慰安所のような状況を呈した。慰安婦は外貨を稼ぐ存在となった。かくして村の利益のために米軍慰安婦が誕生した。売春は不特定多数を相手にし、慰安婦は軍人を相手にした、セックス産業であった。

朝鮮戦争以後もセックス産業は栄えた。米軍基地の周辺には売春地帯が形成された。1970年代、朴正熙政権は一方で売春婦（慰安婦）の行動を貞節の面から取締りながら、他方で外貨獲得と朝鮮半島の安全保障のために、彼女らの行動を愛国視した。韓国政府は米軍の性暴行や売春に対して大きな問題にしなかった。今日、韓国政府は慰安婦問題に関し米国に非常に寛大であるが、日本に対しては厳しく、政治的外交的カードとして用いている。

ところで崔氏によれば、村の儒教的な伝統的倫理とは、女性が守るべき

「貞節」をさす。「貞節」とは、女性が課せられた「婚前の純潔」と「一夫従事」（「不事二夫」、再婚禁止）のことで、女性にとって命より大切なものと見なされていた。これに対して、男性は買春も、妾を持つことも許容されていて、明らかにダブルスタンダードであった。朝鮮社会における「貞節」とは、女性にだけ屈従を要求する家父長的「男尊女卑」によって女性を虐げるもので、再婚禁止などは、女性の再婚を妨げセックス産業においやる場合もあった。

崔氏は、慰安婦問題の「少女像」は、現代版「貞節」思想を具現したものだという。「少女像」は「貞節」の「烈女碑」から来たもので、「烈女碑」は李朝時代に於いて「一夫従事」（「不事二夫」、再婚禁止）を守った女性を表彰したものである。

「少女像」を反日慰安婦運動団体が担ぐのは、朝鮮と日本の国家の関係を、純潔な朝鮮人の女性とよこしまな日本人の男性に置き換え、朝鮮人女性がよこしまな日本人によってその純潔を奪われ慰安婦になったとのシンボリックな想定がある。朝鮮が日本の植民地になったことを、朝鮮の純潔が日本によって奪われたとイメージ化することによって、反日ナショナリズムを高揚して国民を統合し、対日交渉を有利に進めようとする意図がある。このセックスナショナリズム、言い換えれば「貞節」ナショナリズムの根底には伝統的な「貞節」観が今日も生きていて、女性の解放につながっていないと崔氏はいう。「少女像」は反日運動のシンボル・手段であって「烈女碑」に示される伝統的韓国社会内部の男尊女卑を否定するものではない。

本書は、文化人類学の立場から慰安婦問題を韓国社会内部から女性を視点に据えて検討したもので、客観的で説得力のあるものとなっている。本書には崔氏の体験に基づく知見が示されていて有益である。今後、本書が契機となって「貞節」ナショナリズムのさらなる研究が進展することを期待したい。

## 筆者紹介

---

櫛田宏治 東亜大学学長  
金田晋 東亜大学教授 広島大学名誉教授  
上田崇仁 南山大学教授  
孫連花 大連理工大学准教授  
単言 大連理工大学大学院生  
林楽常 大連大学教授  
鄭新爽 大連大学講師  
上水流久彦 県立広島大学教授  
松田良孝 ジャーナリスト  
林楽青 大連理工大学准教授  
王 欽 延安大学准教授  
崔吉城 東亜大学教授 広島大学名誉教授  
原田環 県立広島大学名誉教授

## 編集所感

---

本機関誌は東亜大学東アジア文化研究所創立10周年記念として出させていただいた。ホームページやニュースレターなどを通じて発信してきたように、研究会、講演会、読書会、そしてワン・アジア財団（後にユーラシア財団と改称）の支援による「アジア共同体論」講座を中心に、『アジアに向けて』『映像が語る植民地朝鮮』などを発行してきた。地元の郷土愛を超えて、アジア、世界に向けて、言語、芸術、映画、調査記が掲載されている。（崔）

# 東アジア文化研究

---

2021年3月31日 発行

※本誌はユーラシア財団の支援によるものである。

発行 東亜大学東アジア文化研究所

〒751-8503 山口県下関市一宮学園町2-1 東亜大学2号館  
TEL.083(256)1111

---

© Choe Kilsung Printed in Japan 2021

ISBN978-4-9910475-1-0 C0098

---

印刷・製本 瞬報社写真印刷株式会社

## 〈研究所刊行案内〉



### 『ワン・アジアに向けて』 崔吉城編 2017

本書は二部構成で、第一部はワンアジア財団支援公開講座「ITによるアジア共同体教育の構築」の報告書で、15回行われた講義の映像を30分弱にまとめた講義の概要（DVD付）。

第二部は「記憶と記録」として、下関から出征して日中戦争参戦の現場で写した小山正夫元上等兵の貴重な写真とインタビュー、そして植民地時代を生き抜いた妻末連さんの貴重な体験記（聞き書き）を収録。



### 『植民地朝鮮:映像が語る』 崔吉城著

東亜大学東アジア文化研究所発行 2018

「日本植民地時代＝暗黒の時代」の実情——日本植民地研究をタブー視してきたが著者は戦前に生まれ、植民地朝鮮の映像をもとに、日本植民地時代の実情に迫った研究書。「映像に映る日常生活」、「ドキュメンタリー映像」、「植民地主義映像」など計7章で構成。日本人が理解しなければならない、韓国の反日感情の源流に迫った。





ISBN978-4-9910475-1-0  
C0098 ¥1000E



## Contents

To Celebrate the 10th Anniversary of the Eastern Asian Institute of the University of East Asia .....	Kouji Kushida
Locality, Humans, Arts .....	Susumu Kanada .....3
A study on text data analysis of Japanese textbook (Colonized Korea) with KH Coder .....	Takahito Ueda .....17
Research On the C-J Translation of Public Signs in Chinese Public Service .....	Lianhua Sun • Yan Shan .....30
Metaphors Seen in Vertical Expressions for Time .....	Lechang Lin • Xinshuang Zheng .....43
The Particularity of Nostalgia for Japan’s Imperial-Era Buildings in East Asia .....	Hisahiko Kamizuru .....57
The Formation of China’s Rural Image in “Manchury Films” .....	Leqing Lin .....76
Multiple Images of the Shuri Castle : from the confusion of the people in remote islands and the perspectives to Ryu-chu .....	Yoshitaka Matsuda .....98
Analyzing Japanese Culture in Tora-san Series Films—On the love between “Tora-san” and “Madonna” .....	Qin Wang .....109
Siberian Fieldwork Note .....	Kilsung Choi .....123
Book Review by Harada Tamaki .....	<b><i>On the Comfort Women in Korean War</i></b> .....154

Published by March 31, 2021  
UNIVERSITY OF EAST ASIA